

# 京都市内遺跡試掘調査報告

令和3年度

2022年3月

京 都 市 文 化 市 民 局



# 本文目次

I	試掘調査の概要	1
II	平安左京	3
1	北辺四坊六町跡, 公家町遺跡 (上京区京都御苑3)	3
2	一条四坊十町跡, 公家町遺跡, 京都新城跡 (上京区京都御苑2の一部)	8
3	六条一坊十町跡 (下京区中堂寺柳筒町 7-9, 36-1)	14
III	平安京右京	16
1	三条一坊十四町跡 (中京区西ノ京西月光町 1-31 他)	16
2	四条一坊十町跡, 壬生遺跡 (中京区壬生神明町 1-16)	18
3	四条三坊十四町跡 (右京区山ノ内赤山町 7-1, 7-2, 8, 39-1)	23
4	六条三坊十二町跡 (右京区西京極北庄境町 31)	26
IV	そのほか市内遺跡	34
1	史跡 仁和寺御所跡, 名勝 仁和寺御所庭園 (右京区御室大内 33)	34
2	大覚寺古墳群 (右京区嵯峨大覚寺門前堂ノ前町 10-1, 10-4)	52
3	室町殿跡 (花の御所) (上京区烏丸通今出川上る岡松町 255)	62
4	山科本願寺南殿跡 (山科区音羽伊勢宿町 32-54, 32-85)	70
5	山科本願寺南殿跡 (山科区音羽伊勢宿町 33-43)	73
6	長岡京左京二条四坊五・十二町跡 (伏見区西出町 1-7, 1-8, 1-41, 1-44)	76
7	長岡京左京二条四坊十一・十三・十四町跡 (伏見区久我御旅町 9-8 他 11 筆)	81
8	史跡・特別名勝 西芳寺庭園 (西京区松尾神ヶ谷町 56)	87
	出土遺物概要表	95
V	試掘調査一覧表	96
	報告書抄録	107

# 図 版 目 次

- 図版 1 平安宮
- 図版 2 平安京左京北辺～三条 一・二坊
- 図版 3 平安京左京北辺～三条 三・四坊
- 図版 4 平安京左京 四～六条 一・二坊
- 図版 5 平安京左京 四～六条 三・四坊
- 図版 6 平安京左京 七～九条 一・二坊
- 図版 7 平安京左京 七～九条 三・四坊
- 図版 8 平安京右京北辺～三条 三・四坊
- 図版 9 平安京右京北辺～三条 一・二坊
- 図版 10 平安京右京 四～六条 三・四坊
- 図版 11 平安京右京 四～六条 一・二坊
- 図版 12 平安京右京 七～九条 三・四坊
- 図版 13 平安京右京 七～九条 一・二坊
- 図版 14 史跡仁和寺御所跡・名勝仁和寺御所庭園・一ノ井遺跡・上賀茂中山町遺跡・植物園北遺跡・芝本瓦窯跡・大深町須恵器窯跡・史跡賀茂別雷神社境内・史跡大徳寺境内・史跡賀茂御祖神社境内（下鴨神社）
- 図版 15 大覚寺古墳群・史跡名勝嵐山・嵯峨遺跡・臨川寺境内・嵐山谷ヶ辻子町遺跡
- 図版 16 上京遺跡・室町殿跡（花の御所）・聚楽第跡・寺ノ内旧域・法成寺跡・白河街区跡・白河北殿跡・白河南殿跡・禪林寺旧境内・寺町旧域・芝町遺跡・旭山古墳群
- 図版 17 法性寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡・山科本願寺南殿跡・大塚遺跡・山科本願寺跡（寺内町遺跡）・安樂行院跡・深草寺跡・深草坊町遺跡・貞観寺跡・日野谷寺町遺跡・吉祥院竹尻城跡
- 図版 18 伏見城跡・指月城跡
- 図版 19 長岡京跡・中久世遺跡・下久世構跡・大藪遺跡・大藪城跡・東土川遺跡
- 図版 20 長岡京跡・淀城跡
- 図版 21 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡・横大路城跡・史跡・特別名勝西芳寺庭園
- 図版 22 平安京右京四條三坊十四町跡
- 図版 23 平安京右京六條三坊十二町跡（1）
- 図版 24 平安京右京六條三坊十二町跡（2）
- 図版 25 平安京右京六條三坊十二町跡（3）
- 図版 26 大覚寺古墳群（1）
- 図版 27 大覚寺古墳群（2）

- 図版 28 大覚寺古墳群 (3)  
 図版 29 大覚寺古墳群 (4)  
 図版 30 室町殿跡 (花の御所) (1)  
 図版 31 室町殿跡 (花の御所) (2)  
 図版 32 室町殿跡 (花の御所) (3)  
 図版 34 史跡・特別名勝 西芳寺庭園

## 挿 図 目 次

図 1 調査地区割図	1
<b>試掘調査の概要</b>	
図 2 年次別・地区別試掘調査実施件数	1
<b>平安京左京北辺四坊六町跡，公家町遺跡</b>	
図 3 調査位置図	3
図 4 江戸時代中・後期の宅地割りと計画範囲	3
図 5 各調査区配置図	4
図 6 試掘調査・詳細分布調査断面図	4
図 7 試掘調査・詳細分布調査平面及び詳細分布調査位置図	5
図 8 出土遺物実測図	6
<b>平安京左京一条四坊十町跡，公家町遺跡，京都新城跡</b>	
図 9 調査位置図	8
図 10 調査区位置図	9
図 11 1区断・平面及び石組遺構1平・立面図	10
図 12 2～5区断面図	11
図 13 遺物実測図・拓影	12
図 14 X線透過撮影画像	12
図 15 金属製品分析結果	13
<b>平安京左京六条一坊十町跡</b>	
図 16 調査位置図	14
図 17 調査区位置図	14
図 18 試掘調査平・断面及び詳細分布調査柱状断面図	15
<b>平安京右京三条一坊十四町跡</b>	
図 19 調査位置図	16
図 20 調査区位置図	16
図 21 第1区遺構面検出状況	16
図 22 第1区平・断面図	17

図 23 周辺調査遺構接合図 .....	17
<b>平安京右京四条一坊十町跡, 壬生遺跡</b>	
図 24 調査位置図 .....	18
図 25 調査区位置図 .....	18
図 26 第 1・2 区断面図 .....	19
図 27 出土遺物実測図 1 .....	20
図 28 出土遺物実測図 2 .....	21
<b>平安京右京四条三坊十四町跡</b>	
図 29 調査位置図 .....	23
図 30 調査区位置図 .....	23
図 31 第 1～3 区平・断面図 .....	24
図 32 出土遺物実測図 .....	25
<b>平安京右京六条三坊十二町跡</b>	
図 33 調査位置図 .....	26
図 34 調査区位置図 .....	27
図 35 平成 26 年度試掘調査平・断面図 .....	27
図 36 調査区断面及び断割り断面図 .....	28
図 37 調査区平面図 .....	29
図 38 出土遺物実測図 .....	31
<b>史跡 仁和寺御所跡, 名勝 仁和寺御所庭園</b>	
図 39 調査位置図 .....	34
図 40 境内調査位置図 .....	36
図 41 1Tr. 配置図 .....	37
図 42 1Tr. 平・断面図 .....	38
図 43 1Tr. 全景写真 (南から) .....	39
図 44 2・3Tr. 配置図 .....	39
図 45 4～6Tr. 配置図 .....	40
図 46 6Tr. 全景写真 (北から) .....	40
図 47 2～6Tr. 断面図 .....	41
図 48 7・8Tr. 配置図 .....	41
図 49 8Tr. 漆喰溝検出写真 (西から) .....	42
図 50 7・8Tr. 断面図 .....	42
図 51 9～11Tr. 配置図 .....	43
図 52 9・10Tr. 平・断面及び 11Tr. 柱状断面図 .....	44
図 53 出土遺物実測図 .....	45

図 54	水掛不動周辺調査配置図	46
図 55	中門東土塀調査配置図	46
図 56	中門東土塀石垣断面図	47
図 57	中門東土塀出土遺物実測図 1	48
図 58	中門東土塀出土遺物実測図 2	49
<b>大覚寺古墳群</b>		
図 59	調査位置図	52
図 60	調査前風景（東から）	52
図 61	調査前風景（北東から）	52
図 62	調査区位置図	53
図 63	1・4区断面及び7区平・断面図	54
図 64	8・9区平・断面図	55
図 65	2・3・11区柱状断面及び5・6区断面図	56
図 66	詳細分布調査 A-A'・B-B' 平・断面図	57
図 67	詳細分布調査 C-C'・D-D'・E-E' 断面図	58
図 68	周濠推定復元図	59
図 69	大覚寺古墳群の位置関係と周濠推定線図	61
<b>室町殿跡（花の御所）</b>		
図 70	調査位置図	62
図 71	調査区位置図	62
図 72	調査区平面図	63
図 73	調査区断面図 1	64
図 74	石垣 6 立面図	65
図 75	調査区断面図 2	66
図 76	出土遺物実測図	67
図 77	遺構位置関係図	68
図 78	「元禄十四年実測大絵図」から見る調査地	69
<b>山科本願寺南殿跡</b>		
図 79	調査位置図	70
図 80	調査区位置図	70
図 81	1 区平・断面及び遺構断面図	71
図 82	「光照寺絵図」と今回の調査地の位置関係図	72
<b>山科本願寺南殿跡</b>		
図 83	調査位置図	73
図 84	調査区位置図	73

図 85	1～3区平・断面図	74
図 86	2区遺構検出状況（南東から）	75
図 87	3区溝1（北西から）	75
図 88	山科本願寺南殿復元案	75
<b>長岡京左京二条四坊五・十二町跡</b>		
図 89	調査位置図	76
図 90	調査区位置図	77
図 91	1～3区断面及び4区平面・断面図	78
図 92	周辺調査成果と調査地	79
図 93	4区全景（南西から）	80
図 94	4区東四坊坊間小路東側溝とビット3（南東から）	80
<b>長岡京左京二条四坊十一・十三・十四町跡</b>		
図 95	調査位置図	81
図 96	調査区配置図	82
図 97	各調査区基本層序柱状断面図	83
図 98	2・4・10区断面及び5区平・断面図	84
図 99	9区平・断面図	85
図100	柱穴4・6・7平・断面図	85
図101	出土遺物実測図	85
<b>史跡・特別名勝 西芳寺庭園</b>		
図102	調査位置図	87
図103	史跡・特別名勝西芳寺庭園指定範囲図	87
図104	影向石付近の石組（北から）	88
図105	1区調査前風景（南西から）	88
図106	3区付近の導水路跡の凹み（西から）	88
図107	2区調査前風景（西から）	88
図108	旧地形と調査区位置図	89
図109	1区測量図	89
図110	2区平・断面図	90
図111	2区全景（北から）	91
図112	3区全景（北から）	91
図113	3区東壁断面図	91
図114	4区平・立面図	92
図115	4区全景（東から）	93
図116	遺物実測図	93



# I 試掘調査の概要

## 1. 京都市内の埋蔵文化財行政

京都市で所管する周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という。）は、京北町との合併に伴う遺跡地図の改訂を経て、933件を数える。その範囲内でおこなわれる土木工事に対しては、遺跡の重要度と工事規模に応じて「慎重工事」・「詳細分布調査」・「試掘調査」・「発掘調査」の4種の行政指導をおこなっている。この指導業務は、当初、文化財保護課がおこない、昭和55年の京都市埋蔵文化財調査センター設立以後はセンターが担当してきた。しかし、センターが平成18年4月1日付けで文化財保護課と統合され、現在は文化財保護課埋蔵文化財係が担当している。

行政指導に基づいて実施される調査には、国庫補助による調査と原因者負担による調査があるが、詳細分布調査と試掘調査、発掘調査の一部については国庫補助事業として実施している。このうち、詳細分布調査と発掘調査は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、「埋文研」という。）へと委託してきたが、平成26年4月1日から、文化財保護課埋蔵文化財係が担当しており、その成果は、別冊の報告書により報告される。

本報告書は、令和3年1月～12月に文化財保護課が実施した、国庫補助事業による試掘調査をとりまとめたものである。文化財保護課で実施する試掘調査は、届出や通知を受けた工事予定地内における遺跡の有無、あるいは遺跡の残存状況やその範囲を把握し、遺跡が良好に存在し、工事がその遺跡を破壊する場合には発掘調査を指導し、設計変更などにより遺跡の保護が可能であれば開発者に対して遺跡保護の措置を指示するなど、文化財保護行政上、非常に重要な業務であり、現在は9名の技師が常時、従事している。

令和3年1月～12月に文化財保護法に基づいて提出された届出（文化財保護法第93条）・通知

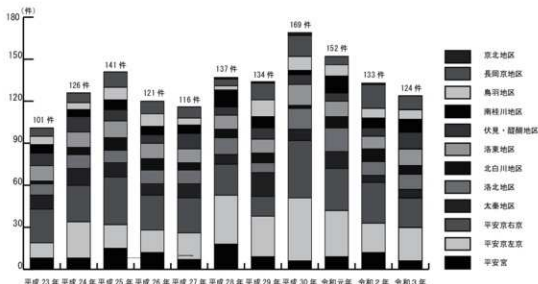


図2 年次別・地区別試掘調査実施件数

(同法第94条)件数は、総数で1,692件になる。前年比では60件(3.7%)の増加で、現状維持が続く。昨年に続く新型コロナウイルスによる社会不安の中であったが、対策が浸透しはじめたこと、秋頃に感染状況が一度落ち着いていたこと、個人住宅が好調だったことなどから依然高い建築件数を維持している。これらの届出・通知に対して、文化財保護課は発掘調査11件(前年9件, 22.2%増) 試掘調査133件(同139件, 4.3%減)、詳細分布調査670件(前年644件, 4%増)、慎重工事878件(同840件, 4.5%増)の指導をおこなった。

このうち試掘調査の実施件数は124件で、地区ごとに見ると、平安宮域6件、平安京左京域24件、平安京右京域21件、太秦地区6件、洛北地区11件、北白川地区6件、洛東地区12件、伏見・醍醐地区12件、南桂川地区9件、鳥羽地区7件、長岡京地区10件であった。南桂川地域が今年は盛況であった。倉庫施設建設が増えたことによる。

## 2. 令和3年1月～12月の試掘調査概要

試掘調査124件のうち26件(V章・試掘調査一覧表参照)については 発掘調査を指示した。今年実施された発掘調査は埋文研が4件(№21, 22, 33, 104)、株式会社文化財サービスが5件(№3・9・11・43・66)、関西文化財調査会が2件(№4・85)、株式会社アルケスが1件(№2)、国際文化財株式会社が1件(№5)、株式会社四門が1件(№13)、株式会社地域文化財研究所が1件(№116)、同志社大学が1件(№118)の計16件で、10件が現在協議中である。

発掘調査で特に顕著な成果があったのは、平安京左京五条二坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡で室町時代～平安時代までの7面の遺構面を調査し、土坑墓・地鎖遺構や土坑などを多数確認した№4、山科本願寺期の堀及び焼亡期の地下室・柱穴列・土坑を調査した№21、指月城・木幡山期伏見城の石垣を検出した№104などがある。

ほかに工事の掘削深度が試掘調査で確認した遺構面より十分に浅いため、または設計や工法の変更により当面の保存が図られたなどの理由から、発掘調査に至らなかった例が6件(№10・26・44・63・75・76)ある。また、保存措置が講じられなかったものの報告すべき成果のあった調査が8件(№1・19・49・67・73・92・113・122)、発掘調査の補足成果となるもの1件(№83)について詳細を報告する。

(赤松 佳奈)

## II - 1 平安京左京北辺四坊六町跡，公家町遺跡

令和2年度No.38 (20H109)

### 1. 調査の経緯 (図3)

本件は、休憩施設新築工事に伴う試掘調査である。対象地大宮御所の北側の遊園内にあたり、左京一条北辺四坊六町跡及び公家町遺跡に該当する。近隣では発掘調査(調査1・2)や詳細分布調査が行われている。特に対象地の北側に隣接する京都迎賓館では、新築工事に伴う発掘調査(調査1)が行われ、平安時代から江戸時代の道路、園地、地業などが確認されている。この時、調査成果と絵図との検討が行われ、江戸時代を通じた地割が示された。なお、宅地7と8の間には東西方向の塀が確認されている。図4はこの調査で明らかになった江戸時代中・後期の宅地割りを示した図に、今回の計画範囲を重ねたものである。これにより、対象地は文久三(1863)年の内裏図では屋敷地が立ち並ぶ場所にあたり、内裏細見之図などでは、甘露寺家(宅地8)と考えられている範囲にあたる。なお甘露寺家は宝永の大火後、明治維新まで当該地に割り当てられていたと推測されている<sup>1)</sup>。

令和2年9月16日に実施した試掘調査では遺構保存を前提とした事前協議に基づき、建物計画が行われるため、最上面の遺構面のみを確認するにとどまった。しかし試掘調査後の協議で、建物の安全上、計画範囲の一部で十分な保護層が設けられない



図3 調査位置図 (1:5,000)



図4 江戸時代中・後期の宅地割りと計画範囲 (1/2,000)

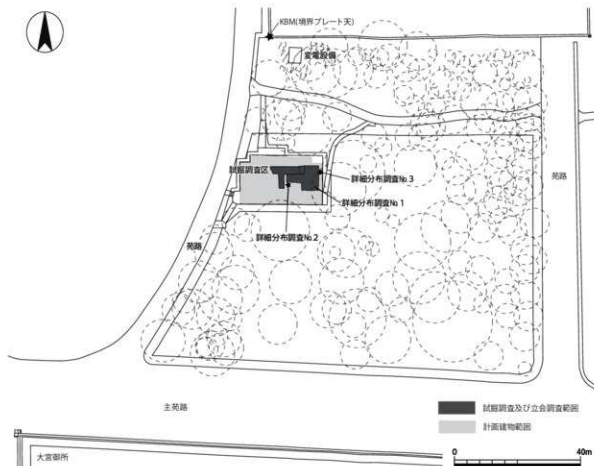


図5 各調査区配置図 (1:1,200)

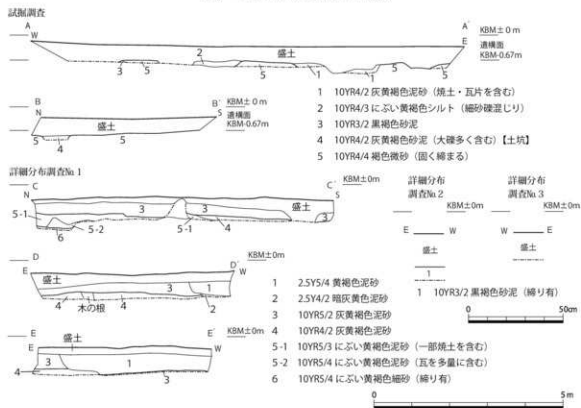


図6 試験調査・詳細分布調査断面図 (1:100, 1:20)

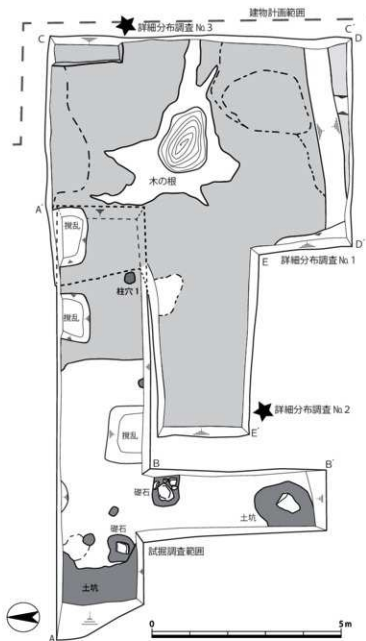


図7 試掘調査・詳細分布調査平面及び詳細分布調査位置図(1:100)

柱穴(柱穴1)や礎石を伴う柱穴、拳大の石を多数含む土坑などを検出した。

詳細分布調査No.1は、試掘調査区の東側にあたり、試掘調査区と一部重複する。基本層序は、現表土以下、GL-0.08mで灰黄褐色泥砂、-0.4m(KBM-0.74m)でにぶい黄褐色泥砂、-0.74m(KBM-1.12m)でにぶい黄褐色の細砂に至る。調査は工事掘削深度に保護層を設けることが可能になるにぶい黄褐色泥砂上面で行った。今回の調査区でも遺構面は北西から南東に向かいやや下がっている。結果、近代の土管施設痕跡や土坑などを確認したが、江戸時代に遡る明確な遺構は確認できなかった。しかし遺構面とした黄褐色泥砂(図6:C断面5-1, 5-2)には焼土とともに瓦が多量に含まれる部分がある。当初、大規模な廃棄土坑が存在する可能性を検討したが、層境は不明瞭で、結果、大きな層序として捉え調査を行った。調査区の北東隅の一部を断割り、下層面の確認を行った。

範囲が認められたため、重点的な詳細分布調査(詳細分布調査No.1)を行うこととなった。また工事施工に伴い、樹木の伐根及び遺跡保存の確認のため、詳細分布調査を2回行った(詳細分布調査No.2・3)。ここに併せて報告する。

## 2. 層序と遺構

現況は樹木が茂る公園となっており、対象地内にもいくつかの樹木が立っていた。試掘調査では、新規計画建物範囲を中心に、樹木を避けて、東西方向の調査区と南北方向の調査区をあわせた「T」字型の調査区を設定した。基本層序は、表土及び煉瓦や電気線などを含む近現代の盛土以下、GL-0.35~-0.45m(KBM-0.65m)で固く締まる褐色微砂の遺構面を確認した。遺構面は西から東に向けてわずかに下がっている。遺構検出は、この層の上面で



图8 出土遗物实测图 (1:4, 1:2)

含まれる瓦の堆積層は隙間があり、個々の破片が大きいものが多かった。

詳細分布調査№2は、伐根に伴う調査である。掘削深度はGL-0.5m。層序は、盛土以下、GL-0.37 (KBM-0.61m)～-0.5mで黒褐色砂泥を確認したが、遺構は検出できなかった。

詳細分布調査№3はGL-0.3m (KBM-0.51m)まで盛土で、工事掘削が遺構面に抵触しないことを確認した。

### 3. 遺物 (図8)

試掘調査及び詳細分布調査にて江戸時代後期以降の遺物を確認しているが小片が多く、報告に耐えない。このため比較的残りの良い、詳細分布調査№1の焼土を含む黄褐色泥砂から出土した土器や瓦を以下に報告する(1～16)。

1は土師器皿である。口径は12.1cm、器高は1.95cmである。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く仕上げる。2～5は染付である。2～4は碗、5は大皿と考えられる。6は寛永通宝で、直径2.25cm、最大厚0.12mmである。裏面に「元」を認める。寛保期に摂津国大阪高津新地で鑄造されたものと考えられる。7～15は軒丸瓦、16は軒平瓦である。7～12は菊文、13～15は巴文である。7～11は瓦当面の直径が約8～9cmと小ぶり、7のみ周縁をもち、8弁の菊文が配される。8は一重の8弁の菊文、9は二重の10弁の菊文、10・11は一重の16弁の菊文が配される。16は均等唐草文が配される。これらの遺物は、江戸時代中～後期と考えられる。

### 4. まとめ

今回の調査では、江戸時代後期の礎石や柱穴、土坑、江戸時代中～後期の炭化物を含む整地土を検出し、遺構面が良好に遺存していることを確認した。対象地が甘露寺家の宅地内にあたるため、これらは甘露寺家に関わる遺構と考えられるが、家紋瓦などは確認できず、資料から居住者の特定をするまでには至らなかった。今回の調査で確認した遺構は、一部、保護が難しい部分については追加調査を行い記録保存を行ったが、その大半を地中保存している。(奥井 智子)

註

以下、図1の調査№に対応。

1) 調査1：『平安京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2004年。

調査2：『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-8、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。

## II-2 平安京左京一条四坊十町跡，公家町遺跡， 京都新城跡 No.1 (20H631)

### 1. はじめに

本件は京都御苑仙洞御所内における消化設備関連の埋設管敷設工事に伴う試掘調査である。計画地は仙洞御所正門の北東側に位置し、周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡」・「公家町遺跡」・「京都新城跡」に該当する。2019年に当該東隣接地の発掘調査で、豊臣秀吉によって築城された京都新城の石垣が初めて確認された(発掘調査1<sup>1)</sup>)。石垣は文献上のみで知り得た「京都新城跡」の実態を解明するうえで貴重な遺構であると判断され、地中に保存された。このような経緯から石垣保存場所に隣接する本工事においても「京都新城跡」に関連する遺構に抵触しない計画が求められた。一方、当該地は寛永4年(1627)後水尾天皇により、院庁御所として仙洞御所が造営され、江戸時代を通して複数回の修理が行われていることが明らかになっている



図9 調査位置図 (1:5,000)

(発掘調査2<sup>2)</sup>)。このような状況を勘案して、本調査は埋設管敷設に伴って削平が予想される仙洞御所関連遺構の記録保存及び、工事計画が京都新城関連遺構に抵触しないことの確認を目的とした。

調査は令和3年3月23・24日に実施し、調査区の掘削深度は、工事計画掘削深度であるGL-1.3mに保護層0.3mを加えたGL-1.6m前後とした。ただし、工事計画地の隣接に樹木があり、一部計画掘削深度まで調査を実施できなかった範囲がある。調査区は樹木を避けて5箇所に設定した(1～5区)。なお、現地表面はほぼ平坦である。

### 2. 遺構 (図10～12)

#### 基本層序

1～5区の基本層序は概ね共通しており2区東壁を代表して述べる。現代盛土直下のGL-0.1mでオリブ褐色泥砂の整地層1(1層)、-0.26mで暗灰黄色泥砂の整地層2(2層)、-0.3mで焼



土（3層）、-0.5mで灰褐色泥砂の整地層3（7層）、-0.64mでふい褐色砂礫（9層）、-1.44mで灰色泥砂（13層）となる。北側隣接地の発掘調査成果<sup>4)</sup>を踏まえるならば、砂礫が主体となる9～12層が17世紀後半の堆積層及び洪水層に相当する可能性が考えられる。さらに、これより上位にあたる、3層が嘉永7年（1854）の火災に伴う焼土となり、この直下にあたる整地層3が嘉永7年の火災の被災面の可能性が高い。

**遺構** 遺構検出は各整地面の直上で実施し、第1区で石組遺構1、第3区で集石土坑2、第4区で礫敷遺構3を検出した。

#### 1区

**石組遺構1** 1区の西側で検出した南北方向の石組遺構である。整地層3を幅約0.9mの溝状に開削し、底に長辺0.25～0.4mの割り石を敷き詰め、東側には西に面を持つ石（長辺0.35～0.4m）を据えている。側石は裏込め土を補填して固定する。調査区範囲内において西側に側石はなく、抜き取られた可能性を考えたが、石の抜き取り痕跡がないこと、整地土3が東側石の直上とほぼ同じレベルまで堆積していることから、構築当初から西側には石が据えられていなかったと考える。したがって、石組遺構は低い基壇建物の化粧と雨落ち部分に敷かれた底石と推測する。石組遺構1は嘉永7年の火災の焼土によって覆われていることから、嘉永7年以前の建物に伴うと推測できる。

#### 3区

**集石土坑2** 第3調査区の東壁で確認した集石土坑である。検出面で南北1.85mであり、調査区外に展開する。埋土に拳大～人頭ほどの石が多量に混在する。

#### 4区

**礫敷遺構3** 第4調査区の全域で確認した礫敷遺構である。整地層3の上面に0.2mほどの礫が敷かれている。礫敷の天場が面をなしておらず、性格は不明である。

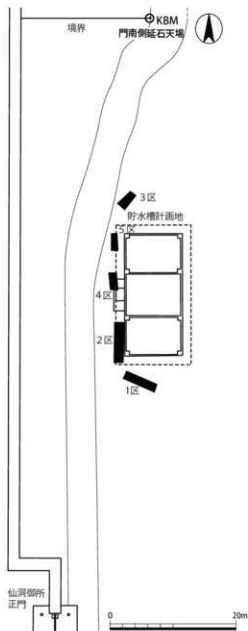
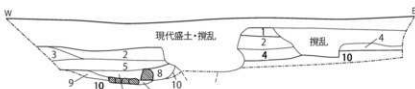


図10 調査区位置図（1：600）

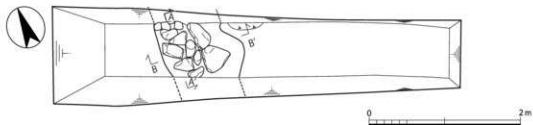
KBM±0

1区北東壁断面図



- |                        |                        |
|------------------------|------------------------|
| 1 10YR5/2 灰黄褐色泥砂【整地層1】 | 6 10YR5/4 にぶい黄褐色泥      |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂     | 7 10YR3/2 黒褐色泥砂【石組貼石土】 |
| 3 7.5YR4/2 灰褐色泥砂       | 8 10YR4/4 褐色泥砂【石組裏込め土】 |
| 4 5YR5/6 明赤褐色砂泥        | 9 10YR5/1 褐灰色砂泥        |
| 5 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫     | 10 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫    |
- 【整地層2】      【攪土】      【整地層3】

1区平面図



1区石組遺構 1 平面図・立面図

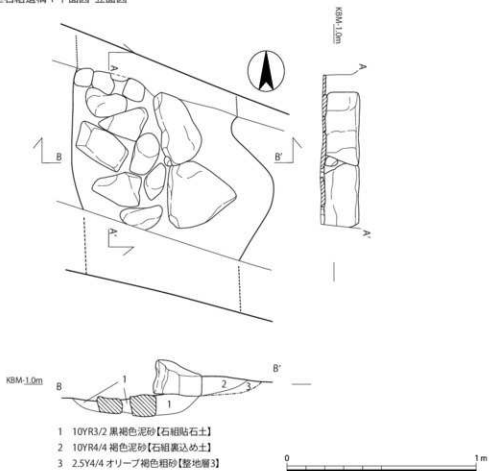
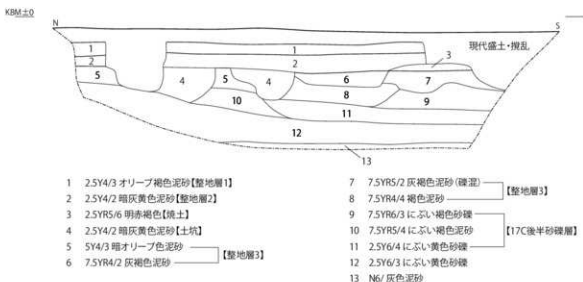
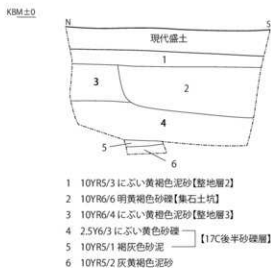


図11 1区断・平面（1：50）及び石組遺構1平・立面図（1：20）

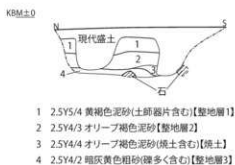
2区東壁断面図



3区東壁断面図



4区東壁断面図



5区西壁断面図

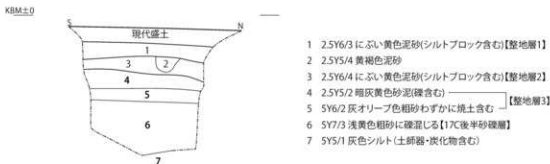


図12 2～5区断面図 (1:50)



図13 遺物実測図・拓影(1:4)

### 3. 遺物(図13～15)

各調査区から、土師器・陶磁器・瓦類が出土したが、図化することができた資料は限られた。

1～3は土師皿S, 4は染付碗である。1は石組遺構1の成立面である整地層3(1区10層), 2は石組遺構1の裏込め土(1区8層), 3・4は石組遺構1を覆う1区5層から出土した。1・2は19世紀前半頃, 3・4が幕末～明治時代と考えられ、層序とも矛盾しない<sup>3)</sup>。5は巴文軒丸瓦である。巴は尾は長く左巻で、外区には珠文が巡る。裏面の調整はナデである。6は金属製品で、鏡の可能性が高い<sup>3)</sup>。直径は約7.9cm、厚さ3.7～5.4cmである。



図14 X線透過撮影画像

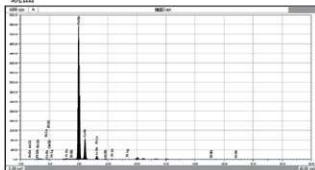
X線透過撮影により、線状に密度の高い箇所が確認でき、資料を本体の材質とは異なる重金属で継いだ可能性がある(図14)。仮に鏡とすれば持ち手に当たる部分と円形部の縁に薄い縁金具のようなものが確認できる。背面に模様などはない。また、X線透過撮影で得られた画像を基に継ぎが施されたと思われる箇所とそうでない箇所、計10カ所にX線を照射し、放出される蛍光X線から資料を構成する元素を調査した(図15)。分析の結果、資料は銅(Cu)を主体としてヒ素(As)・アンチモン(Sb)・鉛(Pb)が含まれていることがわかる。そのほかのカルシウム(Ca)や鉄(Fe)などは土壌由来の元素と思われる。また、継ぎ目と思われる箇所では、他の箇所と比較して鉛の検出強度が高い傾向が表れており、継ぎに用いられた金属が鉛または鉛を多く含む銅であった可能性がある。鏡面には鍍錫が施される場合があるが、本資料では錫(Sn)、水銀(Hg)ともに検出はなく、不明である<sup>3)</sup>。

### 4. まとめ

本調査では仙洞御所に関わる遺構を確認した。寛政2年(1790)の様相を描いた「仙洞御所絵図」によれば、石組遺構1の検出位置に建物が描かれている。仙洞御所は天明の大火(1788年)から嘉永の大火までに火災にあった記録がないことから、石組遺構1は絵図に描かれた建物に関わる基壇化粧の可能性が高い。また、仮に石組遺構1が建物であれば、4区礎敷遺構3は建物付近にあたり敷地内の通路の路面の一部の可能性が考えられる。

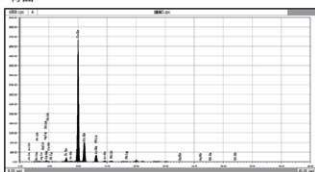
なお、「京都新城跡」に関わる遺構を確認することが出来なかった。したがって、本工事が「京都新城跡」に与える影響はないと判断できる。(鈴木 久史)

#### 鏡面



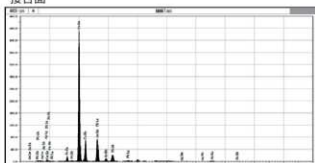
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	RO I (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	195.919	3.52-3.85
26	Fe	鉄	K α	751.429	6.21-6.59
29	Cu	銅	K α	11132.857	7.83-8.24
33	As	ヒ素	K α	2928.626	10.30-10.75
51	Sb	アンチモン	K α	128.281	25.83-26.65
82	Pb	鉛	L α	2801.160	10.33-10.75

#### 背面



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	RO I (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	976.103	3.52-3.85
26	Fe	鉄	K α	3302.823	6.21-6.59
29	Cu	銅	K α	101769.847	7.83-8.24
33	As	ヒ素	K α	5908.092	10.30-10.75
47	Ag	銀	K α	104.112	21.72-22.44
51	Sb	アンチモン	K α	233.184	25.83-26.65
82	Pb	鉛	L α	9854.652	10.33-10.75

#### 接合面



Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	RO I (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	991.126	3.52-3.85
26	Fe	鉄	K α	3165.208	6.21-6.59
29	Cu	銅	K α	86534.836	7.83-8.24
33	As	ヒ素	K α	16746.575	10.30-10.75
47	Ag	銀	K α	129.883	21.72-22.44
51	Sb	アンチモン	K α	657.724	25.83-26.65
82	Pb	鉛	L α	16605.590	10.33-10.75

図15 金属製品分析結果

#### 註

- 1) 小椋山一良「平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-11』（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2020年。
- 2) 持田透「平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-13』（公財）京都市埋蔵文化財研究所，2016年。
- 3) (財)京都市埋蔵文化財研究所「平安京左京北辺四坊第2分冊（公家町）」『京都市埋蔵文化財研究所報告第22冊』，2004年。
- 4) 金属製品については、関根俊一教授（奈良大学）にご教授して頂きました。記して感謝を申し上げます。
- 5) 分析については、山田卓司講師（龍谷大学）にご協力して頂きました。記して感謝を申し上げます。

## II-3 平安京左京六条一坊十町跡 No.49 (21H021)

### 1. 調査経過

調査地は、五条通と壬生川通の交差点より東に位置する。平安京左京六条一坊十町の南半部にあたり、四行八門の地割では西二・三行、北五～八門にかかる。今回、この区画に店舗の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

この町域において、平安時代に遡る地歴は残されていない。現在の字名である「中堂寺」は、横川中堂（延暦寺）の別院として開かれた寺の名に因むとされる。応仁の乱以前の様子を表すという『中昔京師地図』には大宮大路の西に「中堂寺村」が描かれており、ロイス＝フロイスの1573年書簡中には、織田信長に焼かれた京都の村々の名に「chudo」が見える。また『長享年後畿内兵乱記』には永禄元年（1558）5月9日に、松永弾正、三好日向守と摂津丹後の衆が中堂寺ほか数力所の寺に陣を取ったとする記載があり、中堂寺の周辺に室町時代の村落が形成されたことがわかる。

調査地の周辺では、東の十五町内で平成2年度に発掘調査が行われており、GL-0.9mの深度において平安時代前期～中期の遺構面が検出されている（図16①）。このため、今回の調査においても同深度における遺構面の残存が予測された。

試掘調査は令和3年7月27日に実施した。調査区は、従前の協議により建物対象範囲の東半部に設定した。その結果、東西方向に伸びる室町時代の溝を複数条検出した。ただしこれ以外の遺構の残存状況が不良であったため発掘調査は不要と判断し、工事施行時の詳細分布調査を以て調査内容を補うこととした。本文は、これら試掘調査と詳細分布調査に関する報告である。

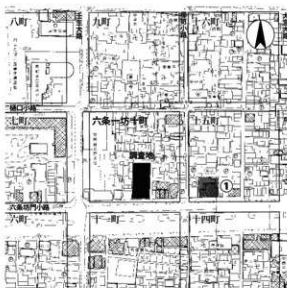


図16 調査位置図（1：5,000）

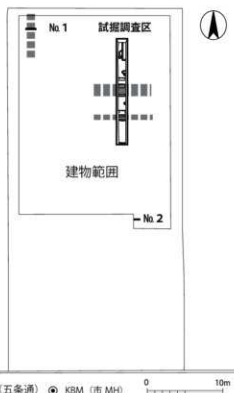


図17 調査区位置図（1：500）

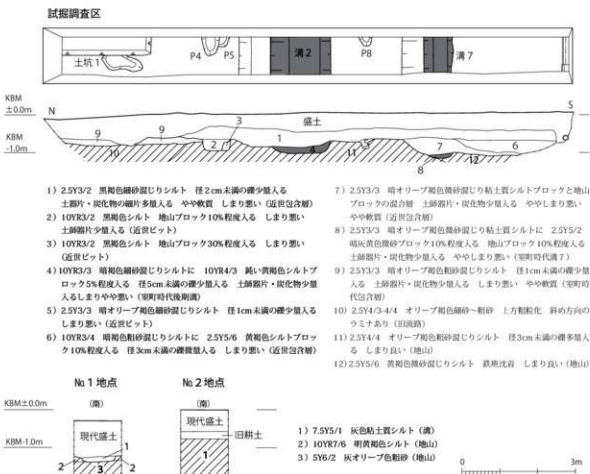


図18 試掘調査平・断面及び詳細分布調査柱状断面図(1:100)

## 2. 調査成果 (図17・18)

試掘調査区の基本層序は、GL-0.5mまで盛土、-0.8mまで近世包含層があり、その直下に地山を認める。地山直上の一部には室町時代包含層が残るものの、その範囲は限定的である。地山上面で遺構検出を行ったところ、東西方向に通る溝、不定形土坑、ビット等を確認した。これらは、いずれも平安時代後期の土器器片、室町時代の陶磁器細片を僅かに含む。江戸時代以後の削平により遺構深度は浅いものの、室町時代の遺構であると認識される。

詳細分布調査No.1地点では、GL-1.0mにおいて南北方向に走る室町時代の溝を検出した。町域の中央付近にあたるため、四行八門の地割に関する遺構の可能性がある。

## 3. まとめ

以上、左京六条一坊十町跡の調査成果を記述した。今回の調査では、室町時代の遺構を複数確認することができた。中堂寺村の地域史を語る一例として報告しておきたい。

(黒須 亜希子)

### 引用文献

調査① 『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2011年。

### Ⅲ-1 平安京右京三条一坊十四町跡 No.60 (21H103)

#### 1. 調査経過

調査地は、御池通と御前通の交差点より東に位置する。平安京右京三条一坊十四町に相当し、北辺が三条坊門小路の路面にかかる。今回、この区画に共同住宅の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

この町域に、平安時代に遡る所有者等の地歴は残されていない。周辺では、平成11年度に御池通の改良工事に伴う発掘調査(図19①)が実施されており、近接するG区ではGL-0.5mの深度において三条坊門小路の路面とその北側溝が検出されている。このため、今回の調査においても同深度での遺構の残存が予測された。

試掘調査は令和3年6月7日に実施した。調査区は、対象地の西半部に2箇所設定した。掘削の結果、西端に設定した第1区では、東西方向に伸びる溝のほか、ピット、土坑を検出した。一方、東側に並行して設定した第2区では攪乱が著しく、遺構を検出することができなかった。

以上により、遺構の残存が限定的であると考えられることから記録保存のための発掘調査は不要と判断した。ただし、未調査の対象地東半部については、工事施行時に重点的立会を指導した。

#### 2. 調査成果

調査成果が得られた第1区についてのみ、記述する。基本層序は、GL-0.2mまで盛土、-0.3mまでにぶい黄褐色シルトの平安時代包含層があり、以下、黄褐色砂礫を主体とする地山となる。調査区の南半部は大きく攪乱を受けるため、土層堆積を確認したのは北半部のみである。

地山上面では、三条坊門小路の南築地心想定ラ



図19 調査位置図 (1:5,000)



図20 調査区位置図 (1:500)



図21 第1区遺構面検出状況



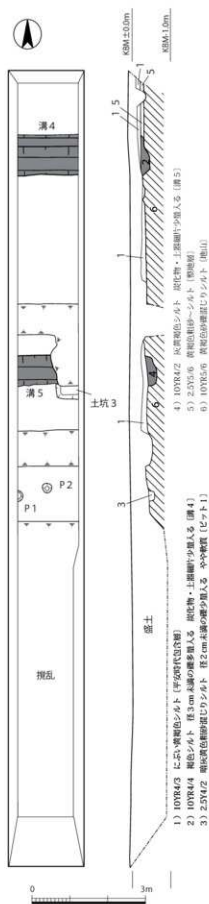


図22 第1区平・断面図（1：100）

- 1) 107R4/3 褐色粗砂シルト [平安時代包含層]  
 2) 107R4/4 褐色シルト 径3cm未満の硬多量入る 炭化物・土層面付少量入る [図4]  
 3) 25Y4/2 褐色黄褐色細砂シルト 径2cm未満の硬少量入る 中々炭質 [ヒット1]

- 4) 107R4/2 灰黄褐色シルト 炭化物・土層面付少量入る [図5]  
 5) 25Y5/6 黄褐色粗砂シルト [図6地層]  
 6) 107R5/6 黄褐色粗砂シルト (地山)

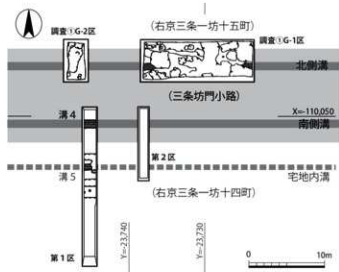


図23 周辺調査遺構接合図（1：500）

インよりも北に2.5mの地点において、最大幅1.0mを測る溝を1条検出した（図22溝4）。また、築地心想定ラインより南へ3.0mの地点では、最大幅0.7mを測る溝を1条検出した（図22溝5）。いずれも東西方向へ伸びており、南側が一段低い断面形状をもつ。築地心ラインとの位置関係から、溝4は三条坊門小路南側溝、溝5は十四町域の内溝と推測される。なお溝4より北側では地山上面に黄褐色粗砂～シルトの薄層があり、三条坊門小路の路面を形成する整地土の一部と推定される。溝4からは、須恵器、土師器、瓦の破片が出土した。また溝5からは、須恵器、土師器、緑軸陶器の小片が出土した。いずれも平安時代前期～中期の遺物である。

### 3. まとめ

以上、調査成果を記述した。これまで事例の少ない三条坊門小路の南側溝と、その南辺を示す資料として、周辺調査の補完となれば幸いである。（黒須 亜希子）

#### 引用文献

『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』、(財)京都市埋蔵文化財研究所、2000年。

## Ⅲ-2 平安京右京四条一坊十町跡，壬生遺跡

令和2年度No.57 (20H081)

### 1. 調査の経緯 (図24)

本件は、共同住宅新築工事に伴う試掘調査である。対象地は中京区壬生神明町に所在し、平安京右京四条一坊十町跡の北東部にあたり、敷地の東側に皇嘉門大路西築地が想定される。対象町は隣接町と併せた4町が源高明の西宮領に推定される。また、壬生遺跡にも該当する。

当該町内の既往調査は、平成9年に試掘調査(調査①)が行われ、GL-1.5mの褐灰色砂礫の地山上面で平安時代の溝や土器溜まりが確認されている。周辺では、北隣接町で試掘調査(調査②)が行われているが、遺構・遺物は確認されていない。また発掘調査(調査③)も行われており、江

戸時代や室町時代の土坑のほか、GL-1.6mの地山上面で平安時代前期の建物が確認されている。東隣接町で行われた発掘調査(調査④)ではGL-1.0mで平安時代の遺物包含層、GL-1.2mの地山上面で9世紀中ごろの東西方向の建物や池状遺構が確認されている。いずれの調査でも地山上面に平安時代前期の遺物包含層が確認され、その上面で遺構検出が行われているものの、遺構は確認されていない。調査期間は令和2年11月26・27日、調査面積は106㎡である。



図24 調査位置図 (1:5,000)

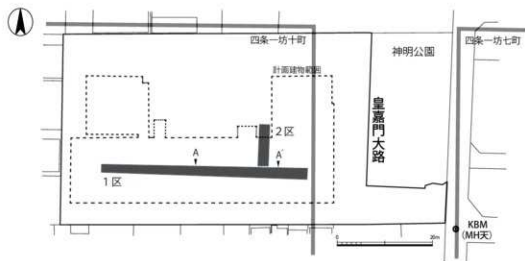


図25 調査区位置図 (1:800)

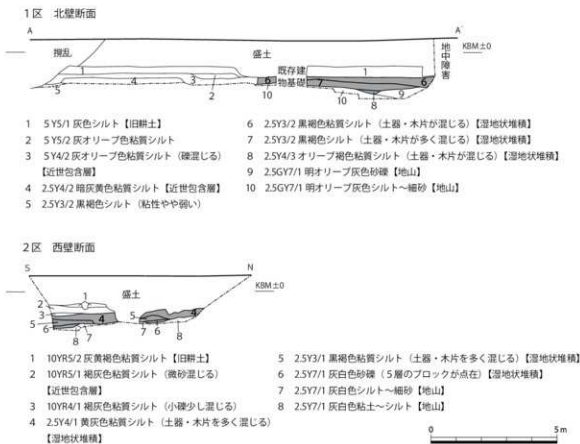


図26 第1・2区断面図 (1:150)

## 2. 層序と遺構 (図26)

今回の調査では、計画建物範囲を中心に、宅地内の様相と皇皇門大路西築地内溝の確認を目的として、東西方向の調査区(1区)と南北方向の調査区(2区)を設定した。調査は、周辺調査成果を基に、地山上面で遺構検出を行った。1区の大半は既存建物基礎の影響により攪乱が地山まで及んでいたものの、一部近世以前の土層が遺存していた。

1区の基本層序は、盛土以下、旧耕土、近世包含層とつづき、GL-1.4～-1.5mで平安時代前期の遺物を多く含む黒褐色粘質シルトやオリブ褐色粘質シルト(6～8層)、-1.7～-1.9mで明オリブ灰色砂礫やシルトの地山に至る。2区では、盛土以下、旧耕土、近世包含層を挟み、GL-1.5mで平安時代前期の遺物を多く含む黄灰色粘質シルトや黒褐色粘質シルトなど(4～6層)、-1.6～-2.0mで灰白色細砂～粘土の地山に至る。

1・2区とも遺構は検出できなかったが、平安時代前期の遺物を含む土層(1区-6～8層、2区-4～6層)が広がっていることを確認した。この土層は、断面観察より自然堆積と考えられる。2区-4層には小礫や砂などが多く含まれ、かつ粘性が弱いこと、2区-5層には遺物とともに根や枝などの有機物が多く認められること、2区-6層には地山が巻き上がっている様子が認められることから、当初流れがあったものの、次第に滞水し、草などが生えていたものと考えられる。池の可能性も考慮したが、断定できる資料は確認できず、落込みや湿地状堆積とする。

### 3. 遺物 (図27・28)

1・2区で確認した湿地状堆積(1区-6~8層, 2区-4~6層)から出土した遺物を報告する。出土した大半が細片で、図化に耐えうるものができたもののみを報告する(1~46)。

1~17は土師器である。1~9は杯Aである。1の口径は15.2cm, 器高は3.1cmである。口縁部は緩やかに外反し, 端部は丸く仕上げる。外面体部から底部にかけてケズリを施す。2~8は口縁部にヨコナデ, 端部は丸く仕上げる。体部には指オサエの痕が残る。ヨコナデが強く施され, 口縁部は短く, 外反が強く, 口縁部と体部の境が明瞭である。2の内面にはハケメ痕跡が残る。9の口縁部は直線的に開き, 端部外面には面をもつ。内面に煤が付着している。灯明皿と思われる。10~12は皿Aである。いずれも口縁部にヨコナデ, 底部には指オサエが残る。10の口径は13.0cm,

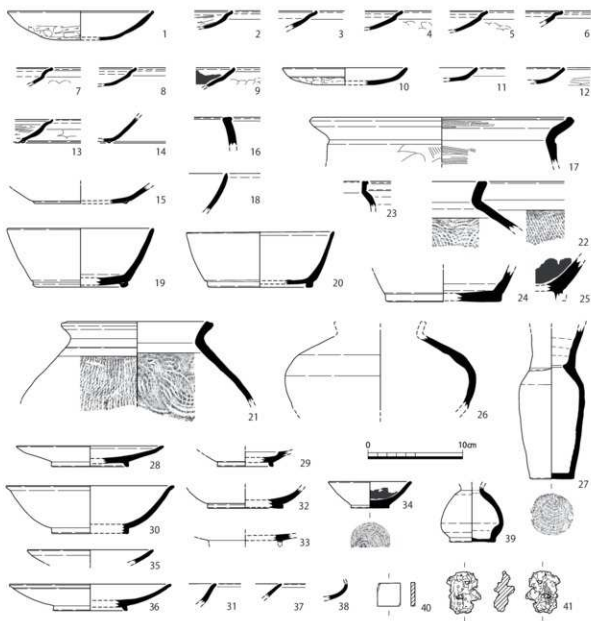


図27 出土遺物実測図1 (1:4)

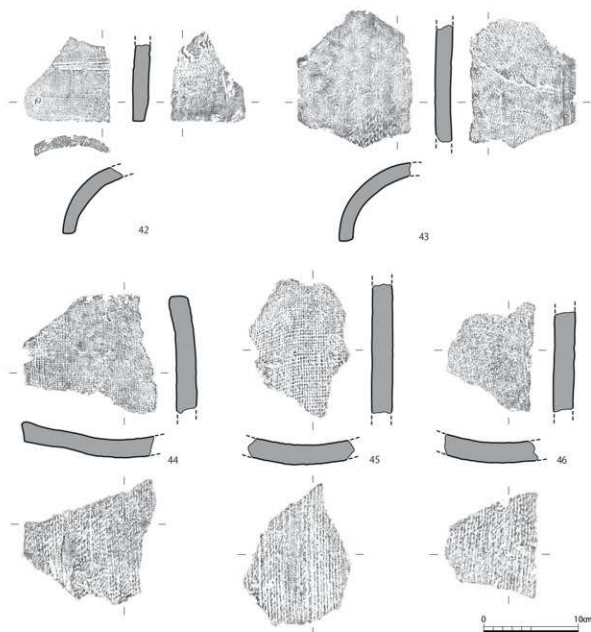


図28 出土遺物実測図2 (1:4)

残存高は1.8cmである。13～15は高台付の杯Aである。小片のため全体を知ることが難しいが、13の口縁部にはナデが施され、端部は上方を向く。体部内面にはハケメ、外面には指オサエが残る。底部には小さな高台が施される。14・15とも底部付近しか確認できないが、13と異なり、体部は直線的に開く。残存部より杯A Lと考えられる。16は鉢の口縁部である。端部上面には平坦面が施されることから、鉄鉢状の形態を想定できる。17は甕の口縁部である。これら土師器は、2 B段階の特徴が認められる。18は黒色土器碗B類である。内外面にやや粗目のミガキが施される。9世紀半ばの様相を示す。19～27は須恵器である。19・20は杯Bである。19の口径は15.2cm、器高は6.2cm、20の口径は15.6cm、器高は5.9cmである。ともに口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く取める。底部外面付近に断面四角形の高台を施す。21・22は甕である。ともに口縁部は短く直

線的に外に開く。端部上面には平坦面が施される。23～27は壺である。24は平底、25は高台が施される。25の内側には漆と考えられる有機物の付着物が確認できる。27は壺Gである。28・29は灰釉陶器皿である。28の口径は15.4cm、器高2.2cmである。口縁端部はやや内側に折れる。29は段皿である。30～39は緑釉陶器である。30～32は椀である。30の口径は17.4cm、器高5.1cmである。34は小椀である。口径は8.6cm、器高は2.8cm。口縁部は直線的に外に開き、底部には糸切痕が残る。内面に付着物が確認できる。33・35～37は皿、38は耳皿、39は小壺である。33の胎土はやや軟質で白みを帯び、釉薬は薄緑色であり、釉の厚みは薄いため、山城産と考えられ、この他は胎土は硬質でやや暗い灰色をし、釉薬は深緑色であり、釉の厚みもしっかりしており、尾張産と考えられる。40は石製品である。一辺2.44cmの方形で、厚みは0.42cm、白色である。表面には研磨痕跡はなく、釘穴や垂孔も確認できなかった。石帯の未成品の可能性もある。41は鉄滓である。42～46は瓦である。42・43は丸瓦である。42は凹面に布目、凸面にケズリ、43は凹面に布目とケズリ、凸面にタタキ痕跡が残る。44～46は平瓦である。凹面に布目、凸面にタタキ痕跡が残る。46には煤が付着していた。44は成形時に隅が切り取られており、道具瓦として製作されたことがわかる。これらの遺物は平安時代前期と考えられる。

#### 4. まとめ

今回の調査は、攪乱が著しいため部分的なものであったが、土師器皿や緑釉陶器、瓦、石製品などの平安時代前期の遺物を多く含む湿地状堆積を確認した。周辺の調査は平安時代前期の遺構が確認されているが、対象地では同時期の遺物を確認したにとどまる。対象地を含む4町域は、源高明の西宮が想定されるものの、西宮とわかる明確な遺構は確認されていない。今回の調査でも明確な遺構は確認できなかったが、平安時代前期にはなんらかの土地利用が行われていることがわかった。今後の資料の増加を期待したい。

なお、遺物41の分析につきまして、龍谷大学文学部歴史学科文化財遺産学専攻北野信彦教授、山田卓司講師のご協力を得た。記して感謝します。

(奥井 智子)

註

1) 以下、図1の調査№に対応。

調査1：「表2 試掘調査一覧表：№7」『京都市内遺跡試掘調査概報平成10年度』京都市文化市民局、1999年。

調査2：「表2 調査一覧表：図版8-106」『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和59年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1985年。

調査3：『平安京右京四条一坊九町跡・壬生遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-8、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2012年。

調査4：『平安京右京四条一坊七町（朱雀院）跡』京都平安文化財発掘調査報告書第1集、有限会社京都平安文化財、2013年。

### Ⅲ-3 平安京右京四條三坊十四町跡

No.63 (21H117)

#### 1. 調査経過

調査地は、三条通と西小路通の交差点より南に位置する。平安京右京四條三坊十四町の北辺に相当し、敷地の北端が四條坊門小路の路面にかかる。当該町域には、平安時代後期に小泉荘が成立したとされているが、これ以外に地歴は残されていない。今回、この区画に店舗の建設が計画されたため、試掘調査を実施した。

周辺では、令和元年度に北隣接地で発掘調査が行われており、弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓、古墳時代後期の古墳周溝、奈良時代の柱穴等が検出されている(図29①)。また西隣接地(赤山公園内)でも発掘調査が行われており、同様の成果が得られている(図29②)。当該地点の包蔵地は現在のところ「平安京跡」のみであるが、付近には弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地である西ノ京遺跡や、弥生時代の集落跡である山ノ内遺跡が存在しており、関連する遺構のひろがりが見込まれる。また、平安京跡の条坊遺構については、東隣の十一町内で実施された試掘調査の成果がある(図29③)。

GL-0.9mで平安時代後期の遺構面が確認されており、四條坊門小路の南側溝と推定される2～3条の重複する東西溝が検出されている。これらの調査成果より、今回の調査地においても遺構群が良好に残存することが予測された。

調査は令和3年9月30日に実施した。調査区は、建物の計画範囲にあわせて対象地西半部に設定した。地形の傾斜にあわせた東西方向のトレンチ2本(第1区・第3区)と、条坊の位置を確認する南北方向のトレンチ1本(第2区)の計3本である。調査の結果、全ての調査区において古墳時代から中世に至る遺構を稠密に検出した。この結果を受けて申請者は設計変更を行い、遺構面は概ね保存されることとなった。



図29 調査位置図(1:5,000)



図30 調査区位置図(1:1,000)

## 2. 調査成果

第1区と第3区では、GL-0.5mまで盛土、-0.8~-0.9mまで平安時代後期~中世包含層があり、以下、黄褐色シルトを主体とする地山を確認した。地山上面で遺構検出を行ったところ、土坑、溝、井戸、耕作溝、ピット等の遺構群を検出した。切りあい関係からは、耕作溝とピットが上位にあり、溝、土坑等が下位にあることがわかる。出土遺物から前者は室町時代、後者は古墳時代の遺構と推測される。

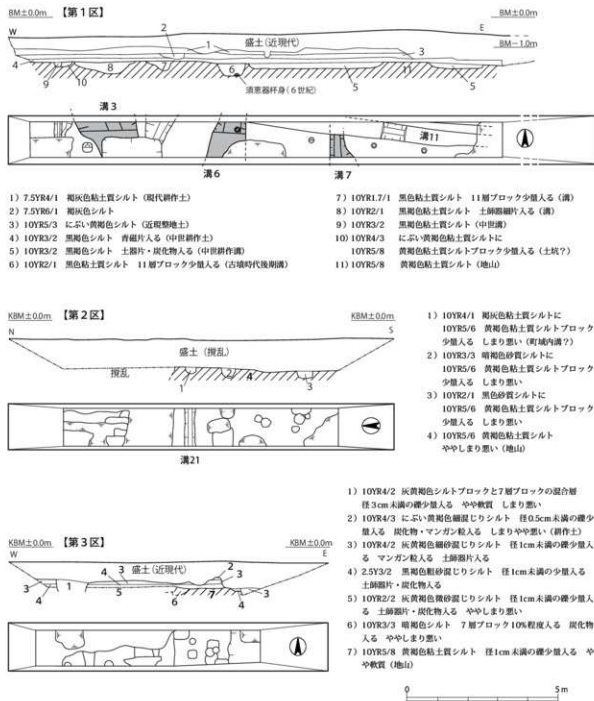


図31 第1~3区平・断面図(1:125)



第2区では近世後期以後の擾乱が著しく、これが地山直上まで及んでいた。時期不明の土坑2基、ピット、東西方向の小溝を1条検出した。ピットは隅丸方形を呈することから柱穴である可能性がある。小溝は条坊復原より町域の内溝となる可能性がある。



図32 出土遺物実測図(1:4)

**溝3** 第1区西端で検出した溝状遺構で、最大幅1.2m、最大深度0.3mを測る。断面形状は中央部が深く、西肩に比べて東肩が強く立ち上がる。埋土から土師器タタキ甕の破片が出土した。古墳時代前期の遺構である。

**溝6** 第1区西半部で検出した溝状遺構である。北北東-南南西に伸びており、最大幅1.2m、最大深度は0.35mを測る。断面形状は深い环形で、底面は平底である。底面より完形の須恵器杯身が出土した(図32)。また埋土からは、土師器甕(古墳時代)の破片が出土した。

図4-1は須恵器杯身で、口径12.7cm、器高4.8cmを測る完形品で外面上位はナデ、下位は回転ケズリを施す。内面口縁端部に沈線1条めぐらせる。内面底部はタタキ痕をナデ消すが、指圧痕が残るため一部が凹む。6世紀の製品である。遺構底面より逆位置で出土した。

**溝7** 溝6の東で検出した溝状遺構である。主軸は南北にのびるが、平面形状は不定形で、南端で東へ広がる。検出幅は0.4~0.7m、最大深度は0.13mである。埋土から土師器甕と須恵器杯、高杯の脚部が出土した。いずれも6世紀の製品である。

**溝11** 第1区東半部において検出した溝状遺構である。深度が浅いこと、また北側に並行する類似遺構があることから、耕作溝と判断した。方位西に対して8度北へ振る方向軸をもつ。埋土から青磁皿(14世紀)、土師器皿の破片が出土した。室町時代の遺構である。

**溝21** 第2区北半部で検出した小溝である。検出長1.2m、最大幅0.4mを測る。断面形状は楕形で、最大深度は0.25mを測る。東西方向にのびており、当該町域の北内溝となる可能性がある。埋土からは土師器の細片が出土したものの、時期は不明である。

### 3. まとめ

以上、右京四条三坊十四町跡の調査成果を記述した。今回の調査では、調査対象地のほぼ全域に、古墳時代~室町時代の遺構が広がることが明らかとなった。既往の調査成果を援用すると、第1区で検出した溝6は、古墳の周溝となる可能性がある。周辺の包蔵地範囲を再考する上で、重要な資料となるだろう。近年、西小路通(条坊復元では恵止利小路付近)では、小規模な調査においても遺構の発見が報告されている。注視すべき地域であることを付記しておくたい。

(黒須 亜希子)

#### 註・引用文献

調査① 株式会社京都平安文化財が発掘調査を実施。

調査② 西近畿文化財調査研究所『平安京右京四条三坊十四町跡・山ノ内遺跡・山ノ内赤山公園(仮称)埋蔵文化財発掘調査報告書』西近畿文化財調査研究所調査報告書5、2008年。

調査③ 京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』2019年

### Ⅲ-4 平安京右京六条三坊十二町跡 No.67

(21H220)

#### 1. 調査の経緯 (図33)

本件は、共同住宅新築工事に伴う試掘調査である。対象地は右京区西京極北庄境町に所在し、平安京右京六条三坊十二町跡の南辺及び六条大路跡、恵止利小路跡に該当する。対象地の中央に東西方向の六条大路北側溝、西端に恵止利小路東側溝が想定される。

対象地周辺では発掘調査や試掘調査が数多く行われている。対象地の東側で行われた発掘調査(図33-調査1)では、平安時代の遺構面である褐色または黄橙色砂泥上面にて、平安時代前期から中期の掘立柱建物群や土器埋納遺構が確認され、四町内の様相が明らかになっている。この調査では当初、調査区の南端に六条大路北側溝が想定されていたが、近代以降の攪乱により既に削平されており、確認するには至っていない。対象地北西側で行われた試掘調査(図33-調査2)では、対象地全体がシルトや泥土などの湿地状堆積が遺構面となっており、断片的ではあるが、楊梅小路の両側溝を確認しているものの、平安時代や遷都以前の遺物を含む落込みなどが確認されている。このように遷都以前の湿地を埋めて楊梅小路を施工していることや、遷都後も地盤が不安定である

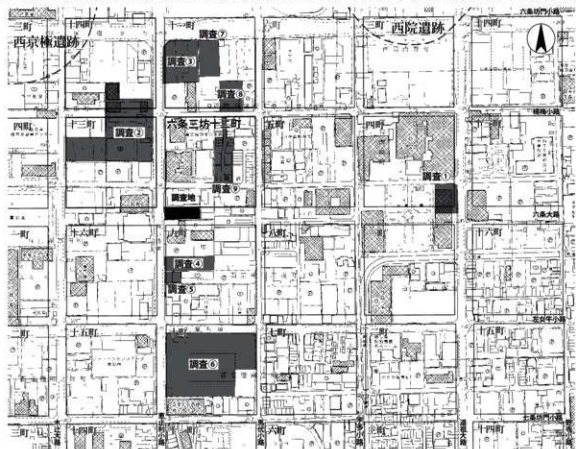


図33 調査位置図 (1:5,000)

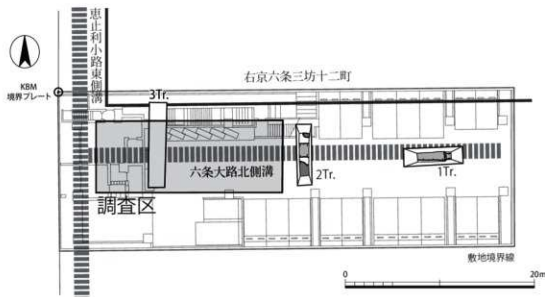


図34 調査区位置図 (1:400)

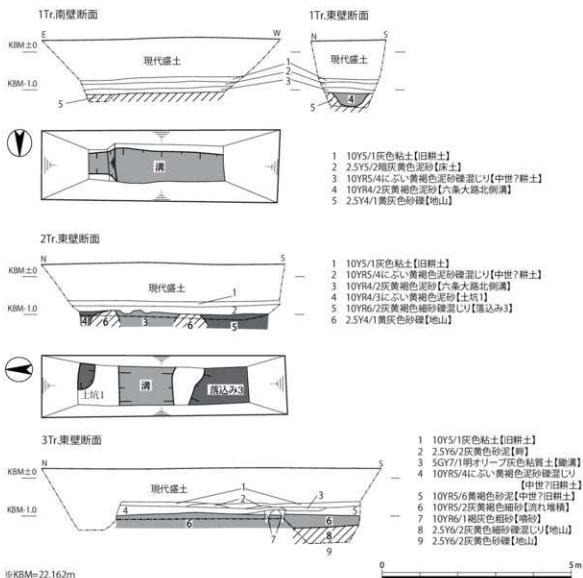


図35 平成26年度試掘調査平・断面図 (1:100)

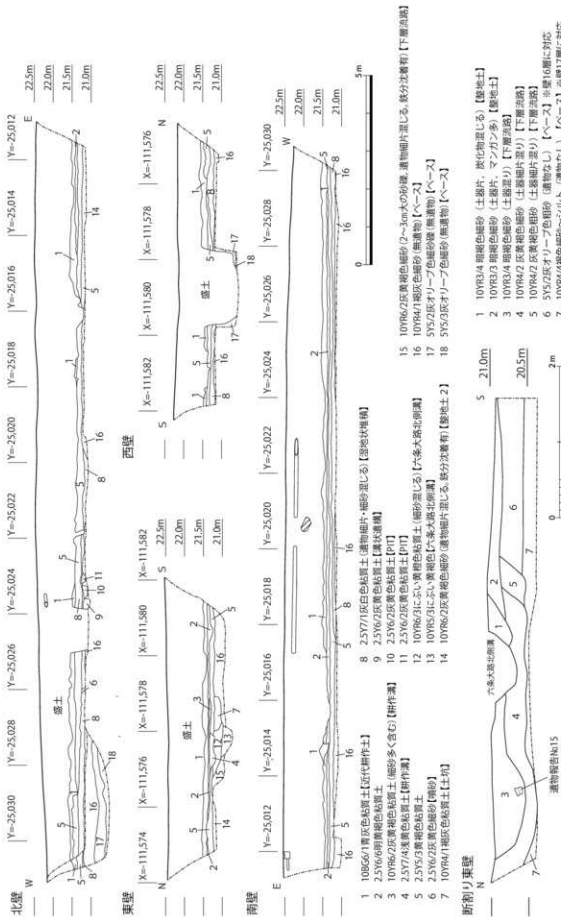


図36 調査区断面 (1:100) 及び断削り断面図 (1:50)

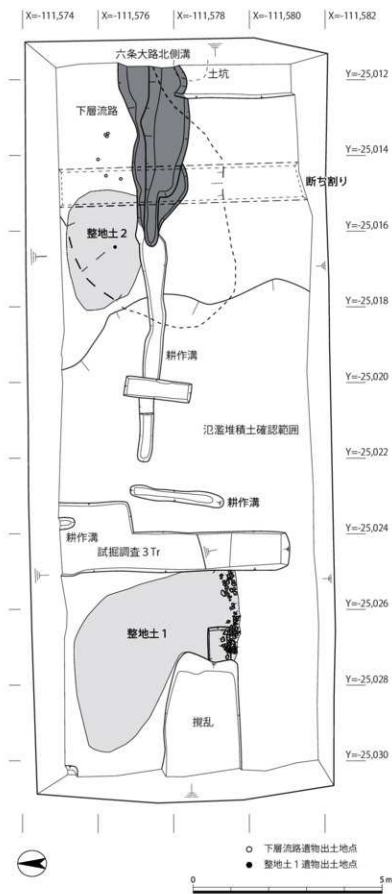


図37 調査区平面図 (1 : 100)

ことを確認している。また今回想定される恵止利小路東側溝については、周辺では平安時代に遡る遺構は五条通付近で確認しているのみで(図33-調査3), 対象地付近では、想定範囲では遷都以前の氾濫堆積土を確認することが多く、検出された事例はない(図33-調査4~6)。この他、周辺で行われた調査では、五条大路沿いの一部で黄褐色シルト~粘質土の地山を確認できるが(図33-調査3)、概ね、湿地状堆積や流路(図33-調査7・8・9)が広範囲に検出されており、五条通以南では複数の流路が合わさり、湿地や流路が広がる不安定な状況であったことが伺える。なお同町についての文献資料の記載はなく、土地利用の様相は不明である。

対象地は過去に建物計画がなされ、平成26年に試掘調査(図34:1~3Tr, 図37)を行っている。この調査で、GL-1.2mの黄灰色細砂上面で六条大路北側溝が確認されたことから、計画変更が行われ、遺跡の保護が図られていた。しかし今回、改めて新しい計画が立ち上がり、申請者と協議を重ねた結果、対象地西側を中心とした範囲(約160m)に対し、改めて試掘調査(図34:今回の調査区)を行うこととなった。

## 2. 層序と遺構 (図36・37)

今回の調査では、六条大路北側溝と恵止利小路東側溝の氾濫状況の確認を主に、対象地の西側を中心に調査区を設けた。

基本層序は、現代盛土以下、耕作土、中近世包含層の下、GL-1.1～-1.3mで鉄分沈着の著しい灰黄色～褐色細砂を確認した(図36)。その他、灰黄色～褐色細砂上面に、調査区西側を中心に氾濫堆積土と思われる土層を確認した(図36-8層)。遺構検出は灰黄色～褐色細砂上面で行った。この様相は、平成26年度試掘調査成果と同様である(図35)。

検出した遺構は、室町時代以降の耕作溝、平安時代の六条大路北側溝、整地土などである。またこれら下層で、北東から南西方向の古墳時代の流路の一部も確認した(図37)。また整地土と考えられる落ち込みは調査区内でいくつか確認できる。それぞれの規模は大きくなく、平安時代の土器の細片が認められる。その中でも恵止利小路東側溝と六条大路北側溝の交差点にあたる場所で拳大の礫を用いた整地土(整地土1)、六条大路北側溝の北側に広がる厚さ5～10cmの整地土(整地土2)がある。

**耕作溝** 南北方向2条、東西方向1条の計3条確認した。南北方向の溝は、幅0.3～0.5m、深さ0.2m、埋土は浅黄色粘質土。東西方向の耕作溝は、六条大路北側溝埋没後にその位置を踏襲して掘られたものと考えられる。幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.2m、埋土は浅黄色粘質土。遺物は細片が多いが、平安時代の土師器や須恵器細片のほか、瓦質土器が出土している。室町時代以降と考えられる。

**氾濫堆積土** 調査区西側を中心に確認した明黄褐色粘質土の堆積土である。土師器や須恵器片が認められるが、遺物は細片のうえ摩滅している。この堆積土が六条大路北側溝の西端を覆っていた。この氾濫堆積が形成された後、側溝は再施工された形跡はなく、維持管理が放棄されていた可能性が高い。

**六条大路北側溝** 調査区の東端から4.8m分を検出した。溝は東から1mほどから徐々に浅くなり始め、西端では浅くなり途切れる。幅1.3～1.8m、深さ0.6m。埋土は上下2層に区分でき、上層はにぶい黄褐色粘質土、下層はにぶい黄褐色粘質土である。埋土の様子から掘り直しが認められる。滞水痕跡などは認められなかった。東壁付近で、3個体分の長胴甕の破片がまとまって出土している。溝芯々の座標は、X=-111.576.8mである。恵止利小路東側溝や築地想定範囲にまで溝埋土を確認することができなかったことから、確認のため、溝延長線上で断割りを行い、断面観察を行ったが、河川堆積を認めるのみで、条坊関連の遺構は確認できず、交差点付近の状況は不明である。

**整地土1** 恵止利小路東側溝と六条大路北側溝の交差点にあたる場所で拳大の礫を用いた整地土である。南辺を拳大の礫で止めている様子を2.3m分確認した。ただ、石の下に粘土を張ったり、掘り込んで据えるなどの工法はされておらず、礫を東西方向に並べる簡単な構造であった。埋土は暗褐色細砂で、細砂が多く混じるものの、締まりはある。遺物は細片で詳細な時期は不明である。

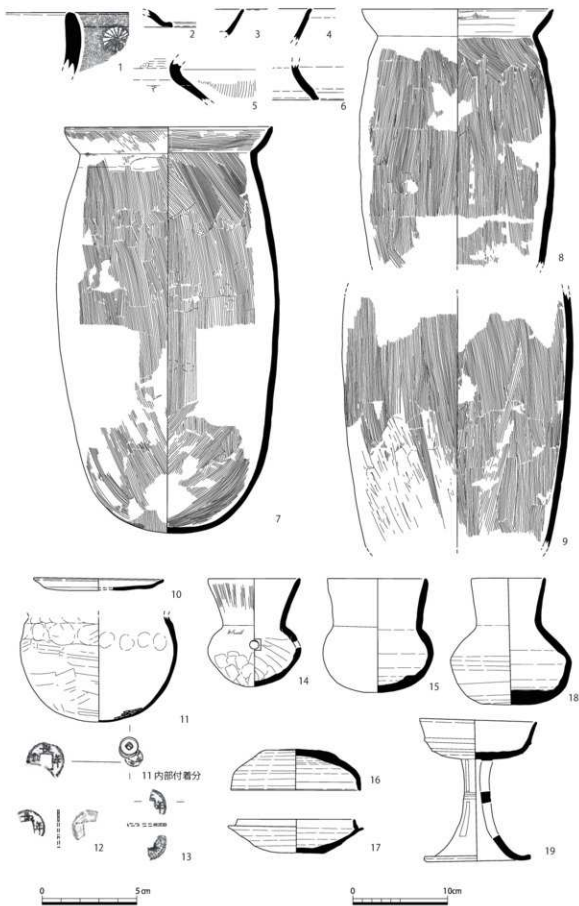


図38 出土遺物実測図 (1 : 4, 12・13のみ 1 : 2)

整地土2 六条大路北側溝の北側に広がる厚さ0.02～0.1mの整地土である。埋土は灰黄褐色粘質土で、細砂が多く混じる。上面には鉄分が沈着し、締まりはある。埋土より土師器皿1点と長年大宝が4枚以上入った土師器小壺が1点が出土した。出土時点で、形状を保てておらず、すでに細片であった。これらが埋納された可能性があったため、平面で掘形の確認をしたが認められなかった。いずれにしても祭祀にともなうものと考えられる。

下層流路 平安時代の整地土2の下層で確認した北東—南西方向の流路の一部である。灰黄褐色の細砂～粗砂が主体で、地山となる砂礫の堆積方向と向きがやや異なる。完形に近い土師器小壺や須恵器杯身、杯蓋、壺や高環などが出土した。

### 3. 遺物 (図38)

耕作溝(1)、六条大路北側溝(2～9)、整地土2(10～13)、下層流路(14～19)から出土した遺物を報告する。出土した大半が細片で、図化に耐えうるものができたもののみを図化し、報告する。

1は瓦質土器円形浅鉢の口縁部である。外面に菊文のスタンプが施される。室町時代のものと考えられる。

2～6は須恵器である。2は杯蓋の口縁部、3・4は杯の口縁部、5は壺の肩部、6は高環の脚部である。7～9は土師器長胴壺である。7は、口径22.0cm、器高43.0cmで、体部内外面にはハケが施される。8は口径20.2cm、器高27.1cmで、体部内外面にはハケが施される。7よりややハケの単位が細かい。9は体部のみであり、胴径は24.0cmで7と近い値を示す。体部内外面にハケ、体部外面下部にはケズリが施される。

10は土師器皿である。口径は13.6cm、器高は1.3cm。口縁部は短く外反し、端部は上方に丸く収める。11は土師器壺である。口縁部は欠損しているが、肩部から底部まで確認できる。指オサエの後板ナデを施し、体部の器壁を薄く仕上げている。底部内側に長年大宝が3枚重なっているのを確認した。うち一枚は銘が確認できる。12・13は、11の破片とともに出土した長年大宝の破片である。平安時代中期頃と考えられる。

14・15は土師器小壺である。14は口縁部外面に縦方向のミガキ、底部外面にはケズリが施され、内面には放射状のナデ痕が明瞭に残る。体部中央に穴が施される。15は磨滅により調整は不明瞭である。16～19は須恵器である。16は杯蓋で、口径13.8cm、器高4.3cmである。天井部外面にはヘラおこしの痕跡が残る。17は杯身で、口径14.4cm、器高3.5cmである。口縁部は短く立ち上がり、外面には自然軸がかかる。18は壺で、口径7.9cm、器高13.5cm。19は高環で、口径12.3cm、器高15.2cmである。脚部には、二段二方向の透かしが施される。これらは、TK43に相当し、古墳時代後期と考えられる。



## 4. まとめ

今回の調査では、調査区全体が灰黄色～褐色細砂の広がるやや不安定な遺構面が広がっていたが、六条大路北側溝、平安時代の整地上、古墳時代の下層流路を確認した。このことから、当該地は、遷都後、条坊が施工されたものの、幾度も補修と思われる整地を行い、維持管理がなされていたが、氾濫堆積により交差点付近の維持が放棄された可能性がある。特に確認した整地は、不定形に点在しており、不安定な状況をその都度、補修していた際の整地土と考えられるほか、側溝付近では祭祀と考えられる遺物が出土した。その後、室町時代に耕作痕跡が認められるが、近代以降に土地利用が認められるまで、目立った痕跡は確認できなかった。

(奥井 智子)

### 註

1) 以下、図1の調査№に対応。

調査1：「25 平安京右京六条三坊」『平成元年度 京都市内埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1994年。

調査2：「IV-3 平安京右京六条三坊十三・十四町跡 №79」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局，2004年。

調査3：「VI 調査一覧表 №100」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局，2019年。

調査4：「V 試掘調査一覧表 №39」『京都市内遺跡試掘調査概要 平成15年度』京都市文化市民局，2004年。

調査5：「表2 試掘調査一覧表 番号38」『京都市内遺跡試掘調査概要 平成11年度』京都市文化市民局，2000年。

調査6：「V 試掘調査一覧表 №40」『京都市内遺跡試掘調査概要 平成15年度』京都市文化市民局，2004年。

調査7：「V 試掘調査一覧表 №37」『京都市内遺跡試掘調査概要 平成15年度』京都市文化市民局，2004年。

調査8：「VI 試掘調査一覧表 №78」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局，2004年。

調査9：「VI 試掘調査一覧表 №68」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和2年度』京都市文化市民局，2021年。

## IV-1 史跡 仁和寺御所跡、名勝 仁和寺御所庭園

### No.73 (2N003)

#### 1. 調査の経緯

今回の調査は、令和2年度から3年度にかけて史跡仁和寺御所跡及び名勝仁和寺御所庭園でおこなわれた防災設備整備に伴う試掘・立会調査である。当該地では昭和44年度及び平成8年度に防災設備（自動火災報知設備、消火設備、避雷設備）が整備されていたが、老朽化していることから再整備が計画された。

消火栓管の埋設においては、原則的に昭和44年度と平成8年度のルートを踏襲する計画となっているが、一部新規掘削が生じることから、試掘調査をおこなった。また、既設ルートについても、埋蔵文化財の確認をおこなうために適宜、立会調査をおこなうこととした。掘削は境内（史跡指定地）全域におよぶ。

調査区は、新規掘削部分を中心に1Tr.から11Tr.まで設定した。1～5・7・8Tr.は試掘調査（調査面積20㎡）、6・9～11Tr.は立会調査としておこなった。

1～5Tr.は令和2年7月20日、6Tr.は令和3年1月25・29日、7Tr.は令和3年5月26日、8Tr.は令和3年5月26・28日、9Tr.は令和3年9月27・28日、10Tr.は令和3年10月7・8日、11Tr.は令和3年10月26日におこなった。なお、今回の報告における地区分けは宗教法人仁和寺『史跡仁和寺御所跡保存活用計画』2021年に則った。

#### 2. 史跡仁和寺御所跡・名勝仁和寺御所庭園の歴史と既往調査

##### (1) 歴史<sup>1)</sup>

仁和寺の創建は、通説では仁和2年(886)、光孝天皇の勅願により造営が着手された。その後、光孝天皇の崩御を受け、皇位を継承した宇多天皇が寺院の造営を進めた。仁和4年(888)8月には、金堂の供養がおこなわれ、創建時の年号「仁和」をとって寺号と定めた。



図39 調査位置図 (1:5,000)

さらに寺域の整備は進められ、延喜4年(904)には金堂の南西に御室(僧坊)を造営し、出家した宇多法皇が初代住職(第1世)となった。その後、仁和寺は御願寺として高い格式を守りつづけ、寛仁2年(1018)に性信(三条天皇皇子師明親王)が第2世となり、明治維新に至る第30世純仁法親王まで引き継がれた。

仁和寺が最も栄えたのは、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけてであり、歴代天皇の御願により建立された四円寺(円融寺、円教寺、円乗寺、円宗寺)をはじめ、およそ2里四方の寺域には一説に60余りといわれる多くの院家・子院が建立された。元永2年(1119)4月には金堂、東西廻廊、鐘楼等が焼失したが、同年12月に金堂の再建がなされ、保安2年(1121)に観音院等が復興された。

隆盛を極めた仁和寺も、その後、応仁2年(1468)の兵火で金堂をはじめとする主要伽藍および、子院にいたるまで焼亡した。以降、再興されるまでの間仁和寺の法灯は双々岡の西麓に所在する院家、真光院に移され継承された。

大永4年(1524)に仁和寺の再興が計画されたが、完成に至らず、寛永11年(1634)に第21世覚深法親王が3代將軍徳川家光に仁和寺の再興を申し入れ、幕府の寄進を受けて再興に着手した。

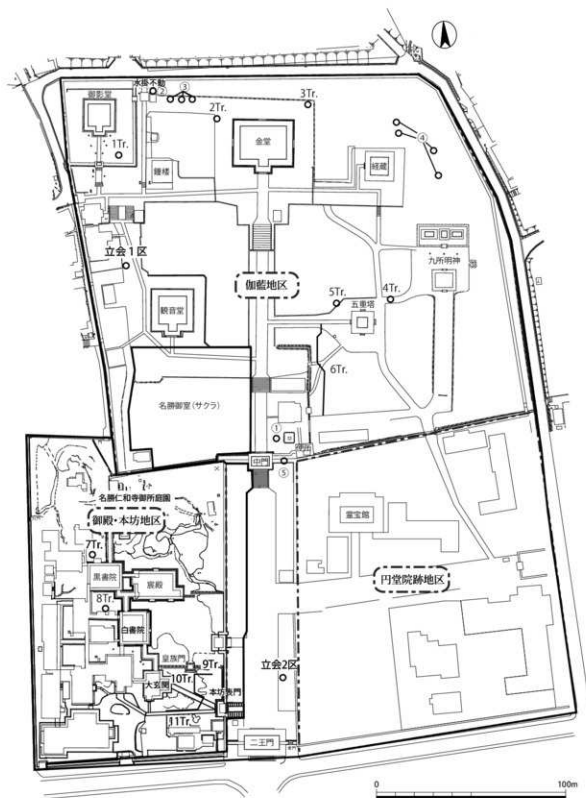
寛永～正保年間の再興は御所の造り替えの時期にあたり、寛永17年(1640)に後水尾天皇によって御所の紫宸殿、常御殿、台所門、清涼殿が下賜され、寛永18～20年(1641～1643)に移築、正保3年(1646)に完成した。現在の金堂は紫宸殿の遺構であり、御影堂は清涼殿の部材を用い再建されたものである。また、台所門は本坊表門として現存する。さらに、寛永18～正保4年(1641～1647)には二王門(南大門)、観音堂、五重塔、経蔵、中門、鐘楼、九所明神社殿が再建された。

仁和寺は代々皇族の継承が続いたが、明治維新のとき第30世純仁親王を最後に皇族の門跡は断絶した。明治23年(1890)真言宗御室派として独立したが、まもなく高野山、大覚寺と合併して古義真言宗となり、昭和21年(1946)再び分派して御室派の総本山となった。

明治20年(1887)には宸殿などが焼亡したが、明治23年(1890)に玄関と白書院(仮宸殿)が建設され、大正3年(1914)にかけて復興され、現在の建物配置となった。

明治33年(1900)に金堂及び五重塔が古社寺保存法による特別保護建造物の指定を受けて以降、現在までに国宝1棟、重要文化財14棟の計15棟が指定を受け、宸殿や勅使門など8棟が登録有形文化財となっている。

境内の一部は、大正13年(1924)12月9日に「御室(サクラ)」として国の名勝に、昭和13年(1938)8月8日に「仁和寺御所跡」として国の史跡に、令和3年(2021)3月26日に「仁和寺御所庭園」として国の名勝に指定されている。



- ①茶所絵馬・おみくじ掛け立会 1Tr.~11Tr. 立会1・2区 防災事業  
 ②水掛不動着板設置立会  
 ③水掛不動周辺排水整備立会  
 ④植栽立会  
 ⑤中門東土塀復旧立会

図40 境内調査位置図 (1:2,000)

## (2) 既往調査

史跡仁和寺御所跡の発掘調査はこれまで13地点でおこなわれている。多くが円堂院地区における建物建設に伴う調査と、土塀の保存修理に伴う調査である。

円堂院地区南半では、平安時代の遺構が良好な状態で残存していた。昭和37年(1962)の調査で八角円堂の基壇南辺、西辺がみつかり、基壇の一边が10.6m(約35尺)であることが明らかになった。調査では隅東石や裏込の玉石等もみつかった。

昭和47年度の霊宝館の増築及び密教学院の新築に伴う調査では、平安時代中期から末期とみられる築地塀や火葬の痕跡がみつかった。

昭和51～52年度の御室会館建設に伴う調査では、円堂院創建期の僧房がみつかった。僧房は桁行15間、梁行4間の南北棟総柱建物で、南が低く建物の南北で約1.2mの比高差があることが明らかとなった。出土遺物等から、僧房は円堂院創建期に遡るとみられるが、昭和37年にみつかった八角円堂の建設が若干遅れるものと考えられる。

御殿・本坊地区では、宗務庁舎等の建設に伴う調査が平成11・12年度におこなわれた。西面築

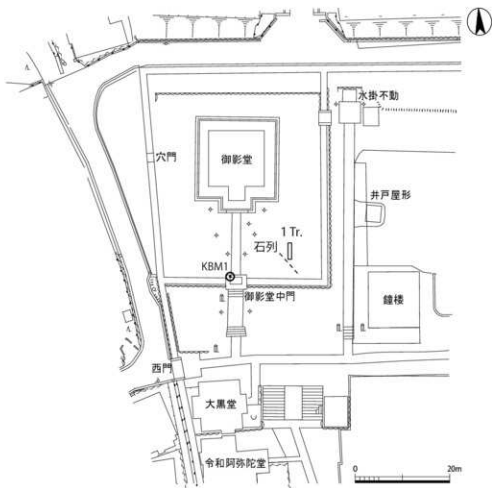


図41 1 Tr.配置図(1:800)

地については、現在の築地塀よりも約8m東側で埋藏された築地痕跡と雨落溝が見つかった。天和3年(1683)の絵図の検討などから、延宝3年(1675)から天和3年の間に築地塀が西へ移動したと考えられる。また、平成12年度の調査では、平安時代後期から鎌倉時代前期の門状遺構を伴う築地塀及び雨落溝を確認した。

平成20年度以降、境内西面と南面の土塀保存修理に伴う調査がおこなわれ、江戸時代以降の仁和寺における土塀の形態と変遷が明らかになった。特に平成24年度に二王門東側でおこなわれた調査では、江戸時代後期の路面や階段状遺構が検出された。これらの遺構は真乗院に伴うものと考えられ、天和期の版築土塀を開削して門が開かれ、門前の路面を整え、南に下る斜面に階段を設けたものと考えられる。

以上のとおり仁和寺における発掘調査は、境内の南半(円堂院地区、御殿・本坊地区)にほぼ限られ、中門より北側の伽藍地区では、平成26年度の観音堂保存修理に伴う調査と平成27年度の中門東側便所増築に伴う調査に限られる。

中門東側便所増築に伴う調査では、顕著な遺構は検出されなかったが、GL-50cm以下で中世以前の整地層を確認している。

### 3. 各調査区の遺構

1Tr. 1Tr.は御影堂南東部に設定した調査区である。南北約4m、東西約0.5mの約2㎡の調査をおこなった。基本層序は、現代盛土、橙色泥砂(遺物包含層)、明赤褐色シルト(地山)である。包含層はGL-10cm、地山はGL-30cmで検出した。調査区の南で石列を検出した。石列は、地表面に露出しており、14石確認した。抜き取られている部分もあるが約5m残存している。一辺20~30cm程度の石を北西から南東に並べる。北東面に石の側面を描えるが、底石や下段の石等はなく石組溝ではない。南東部にそのままのびれば土塀に達するが、その手前で途切れていた。したがって、土塀と石列の前後関係は不明である。

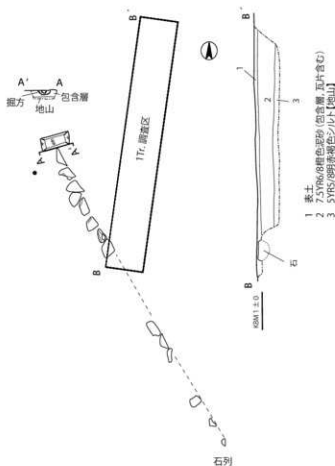


図42 1Tr.平・断面図(1:60)

確認した石列の北端で断割調査をおこない、石を据える掘方を包含層上面で検出した。その位置や設置状況など検討をおこなったが、石列の性格は不明である。

なお、防災設備については石列を保存したうえで施工をおこなった。

2・3Tr. 2Tr.は金堂北西部(約1.4㎡)、3Tr.は金堂北東部(約1.5㎡)に設定した調査区である。

基本層序は盛土直下(GL-20cm)で地山である。顕著な遺構や遺物はみられなかった。遺構面は大幅に削平されている可能性が高い。

4・5Tr. 4Tr.は五重塔北東部(約2.5㎡)、5Tr.は五重塔北西部(約2.6㎡)に設定した調査区である。

基本層序は盛土直下で地山である。4Tr.南半ではGL-10cm、北半ではGL-50cm、5Tr.ではGL-70cmで地山を確認した。地山検出面の深さは、現代植栽盛土等に影響されている。植栽部分については、およそ30cmの盛土がされており、それに加え20~40cm程度、地山が削平されている。顕著な遺構や遺物はみられなかった。

6Tr. 6Tr.は五重塔西から南西にかけての調査区である。既設

管及び樹木の根により遺構の残存状況が悪いことが予想されたため、立会調査をおこなった。

土層を確認したのはA~Dの4地点である。A~C地点の基本層序は現代盛土直下(GL-20~



図43 1Tr.全景写真(南から)

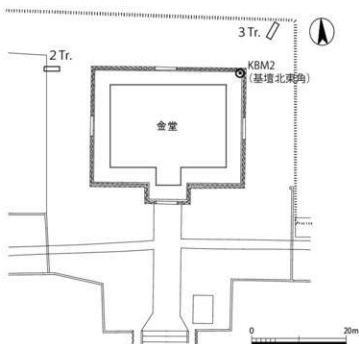


図44 2・3Tr.配置図(1:800)

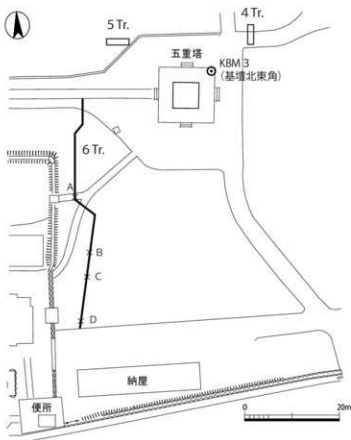


図45 4～6 Tr.配置図 (1 : 800)

30cm)で地山である。D地点の基本層序は現代盛土、明褐色泥砂 (GL-20cm, 近世包含層), 明赤褐色粘土 (GL-20～50cm, 地山) である。

A・B地点は遺構面が削平されているが、A地点で土坑1を検出した。土坑1は幅約1.1m、深さ約10cmであり、近世の瓦が出土した。C・D地点は根攪乱が多く、また、D地点は植栽のための盛土がされていることが明らかとなった。顕著な遺構や遺物は検出されなかった。

D地点の南西約20mの場所で平成27年度に便所増築に伴う発掘調査をおこなっており、GL-50cmで中世の整地層、-70cmで平安時代の整地層、-110cmで地山を検出している。D地点の南端では、GL-20cmで地山を検出していることから、便所までの間で地山が約90cm下る地形となる。6 Tr.では地山が削平されている可能性が高いことから、平安時代や中世に6 Tr.より北側の地山を削り、それより南側に整地をおこない、平坦面を形成したと考えられる。

7 Tr. 7 Tr.は黒書院北側の調査区である。



図46 6 Tr.全景写真 (北から)



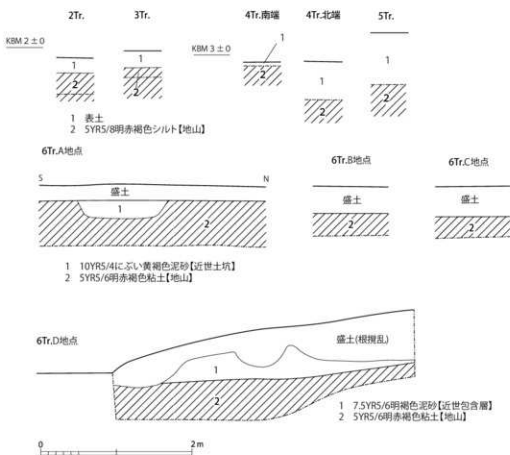


図47 2～6Tr.断面図 (1 : 50)

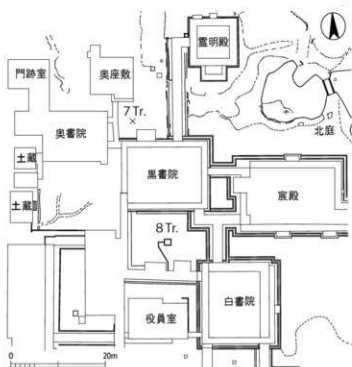


図48 7・8Tr.配置図 (1 : 800)

基本層序は現代盛土直下 (GL-40cm) でぶい黄褐色泥砂の地山である。顕著な遺構や遺物はみられなかった。

8 Tr. 8 Tr. は黒書院の南側の調査区である。

基本層序は現代盛土、橙色泥砂 (GL-10cm, 近代以降整地層), オリーブ褐色泥砂 (GL-15cm, 近世整地層), 黄褐色砂泥 (GL-30cm, 地山) である。

検出した遺構は, ビット1基と漆喰溝1条である。ビットは, 8 Tr. のA' 地点において検出した。近世の整地層を掘り込むことから近世以降のビットである。直径約20cmの円形とみられ, 残存している深さは約30cmである。

漆喰溝は調査区南半で検出した東西方向の溝である。幅 (内法) 20cm, 深さ 10cm であり, 側



図49 8 Tr. 漆喰溝検出写真 (西から)

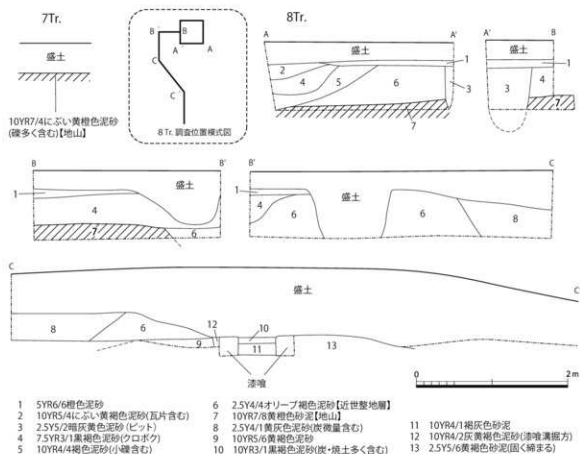


図50 7・8 Tr. 断面図 (1:50)

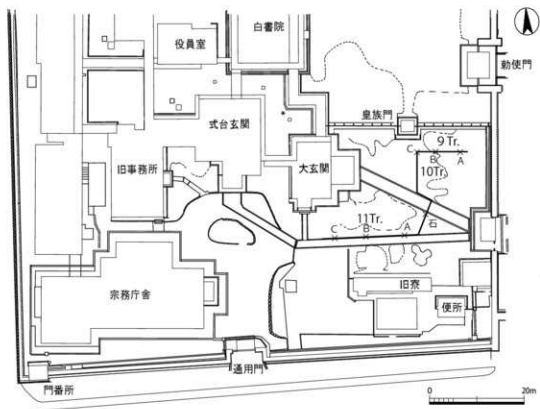


図51 9～11Tr.配置図(1:800)

面と底面に漆喰が施されている。埋土は上下2層に分けられ、上層は黒褐色泥砂で炭や焼土を多く含む。下層は褐灰色砂泥である。明治20年に御殿・本坊地区で大規模な火災があるが、そのときまで溝が機能しており、火災に伴う炭や焼土で最終的に埋められたと考えられる。炭や焼土を検出したのは、溝の埋土のみで7Tr.や9～11Tr.では一切みつからない。

宸殿一帯が焼亡するほどの大火であったが、火災処理に際しては非常に丁寧な施工が行われ、火災の痕跡を残していないものと考えられる。「仁和寺伽藍御所惣絵図」や明治20年に火災にあった建物が記されている「罹災之図」には宸殿西側に中小僧部屋、住職居間等が描かれており、今回検出した漆喰溝は、それら建物の雨落溝や排水溝の可能性ある。明治20年の遺構面は削平されず残存していること、火災処理は非常に丁寧におこなわれていることが明らかとなった。

9～11Tr. 9～11Tr.は大玄関東の前庭でおこなった立会調査である。

基本層序は、現代盛土、近世整地層、中世整地層である。GL-80cmまで掘削をおこなったが地山は確認できなかった。

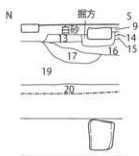
9Tr.では、東土堀から約6m西側で10～30cm大の石が集中して出土した。ただし、掘方は検出できず、石の平坦面を描いているわけではないことなどから、礎石据付痕跡や建物地業などの可能性は低く、根掘りに掘り込まれた石の可能性が高いと考えられる。当該地は「仁和寺伽藍御所惣絵図」天和3年(1683)に御興宿隨身所が描かれているが、建物にかかわる遺構などは検出されなかった。

9Tr.

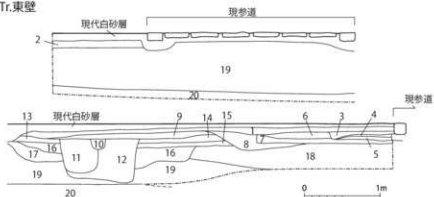


- 1 10YR3/3暗褐色泥砂(平安時代の土師器含む)  
2 7.5YR4/3褐色シルト(炭化粒, 土師器小片含む)

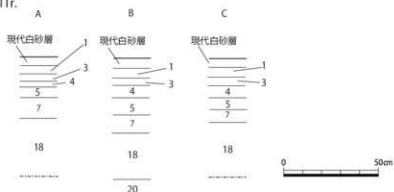
10Tr.



10Tr.東壁



11Tr.



- 1 現代白砂層の基礎層  
2 10YR4/2灰黄褐色泥砂【近代以降整地層】  
3 5YR5/6明赤褐色粘質土【現参道時整地層】  
4 7.5YR4/2灰褐色泥砂  
5 2.5YR5/3にぶい赤褐色粘質土  
6 2.5YR5/3にぶい赤褐色粘質土  
7 5YR6黄色粘質土  
8 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂(黒色炭化物多く含む)【参道2設置前の整地】  
9 10YR5/2灰黄褐色泥砂(瓦片多く含む)【参道3廃絶後の整地】  
10 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂  
11 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂【緑石抜取痕跡】  
12 10YR4/2灰黄褐色泥砂  
13 2.5Y6/6明黄褐色泥砂  
14 10YR6/4にぶい黄褐色シルト(隣まり良い, きれいな叩き面)  
15 2.5Y7/6明黄褐色泥砂  
16 7.5YR5/6明褐色泥砂  
17 2.5Y5/4黄褐色泥砂  
18 10YR6/6明黄褐色泥砂  
19 10YR6/6明黄褐色泥砂  
20 7.5YR4/3褐色シルト(瓦出土)
- 【参道2】  
【参道3】  
【参道3設置前の北辺部整地】  
【時期不明盛土】

図52 9・10Tr. 平・断面 (1:50) 及び 11Tr. 柱状断面図 (1:20)

10Tr.は現参道を横断する調査区である。現参道を含む3時期の参道を検出した。

現参道(参道1)は本坊表門と大玄関を結ぶもので幅約2.7mである。現代白砂層により整地したうえで石畳を敷設している。

参道2は本坊表門からまっすぐ西へ延びる現参道の北側で検出した参道である。参道2の石畳等は検出しなかったが、厚さ5~10cmの整地層を複数検出した。参道2の南端は現参道下へ延びるため未検出だが、北端から2.7m分検出した。参道3は参道1と参道2の間に位置する。参道3は上下2層に大別でき、上層はしまりの良い叩き面である。南端は参道2により壊されており不明であるが、北端は縁石抜取痕跡を検出した。したがって、参道3の幅は2m以上であることがわかる。

また、本坊表門と大玄関を結ぶ参道の約1m南で平坦面を上に据えた石を1石検出した。掘方は参道3を掘り込んでおり、参道3廃絶後の整地土が石にすりついている。この石の東西を平面検出したが、同様の石はみつからず性格等は不明である。

その他、検出した遺構は、参道3上面から掘り込まれた土坑3基である。

11Tr.の基本層序は現代白砂層、参道2の整地層、明黄褐色泥砂(GL-40cm、時期不明盛土)である。顕著な遺構や遺物はみられなかった。

立会1区 観音堂北西部における埋設管掘削時(令和3年2月10日)に立会調査をおこなった。GL-20cmまで現代盛土で、以下地山であることを確認した。

立会2区 参道西部部分における埋設管掘削時(令和3年2月18日)に立会調査をおこなった。GL-10cmまで盛土で、以下掘削底であるGL-70cmまで近世整地層であることを確認した。

## 4. 遺物

今回の調査では、6・8~11Tr.で遺物が出土した。そのほとんどが、整地層から出土する瓦で近世以降のものである。

1と2は9Tr.1層から出土した土師器皿である。1は口縁部が直立する皿Aで、口径は9.8cmである。2は皿Acで口縁部のみ残存していた。ともに12世紀前半頃とみられる。

3は6Tr.土坑から出土した近世の軒平瓦である。

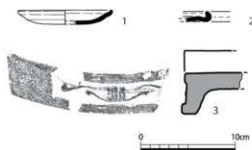


図53 出土遺物実測図(1:4)

## 5. 周辺における近年の調査

今回の防災設備整備に伴う調査とかかわるため、近年おこなわれた史跡仁和寺御所跡での立会調査を報告する。

①茶所絵馬・おみくじ掛け 茶所南方における絵馬・おみくじ掛け設置に伴う立会調査である。

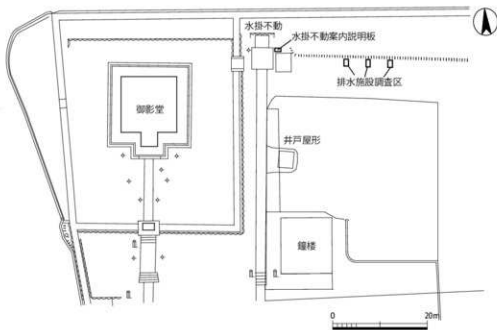


図54 水掛不動周辺調査配置図 (1:800)

令和元年7月26日におこなった。GL-12cmで時期不明整地層(赤褐色泥砂)を確認した。

調査範囲が狭小であり、顕著な遺構はみつからなかったが、6 Tr.D地点と便所調査地に近く、当該地周辺における整地の状況を知る重要な調査といえる。

#### ②・③水掛不動周辺 水

掛不動案内説明板設置及び、周辺排水施設設置に伴う立会調査である。令和3年1月25日におこなった。水掛不動案内説明板に伴う調査では、南北に長い延石の一部を検出した。水掛物置の下へのびる。部分的な検出であることから延石の規模や機能などは不明である。

排水施設設置に伴う調査では3箇所で断面確認をおこなった。盛土直下で地山を検出した。地山は最も浅いところでGL-15cmで検出しているが、その他のところでは、埋設管により攪乱されていたり、現代の整地により地山が削平されている部分が多い。

④経蔵周辺 サクラ植栽に伴う立会調査である。令和3年2月18日におこなった。平坦面で20cm大の石が散布することを確認し礎石の可能性があるため、周辺部でのサクラ植栽はおこなわなかった。当該地周辺は、調査がおこなわれておらず、地形的検討も含め、今後注意を要するところ

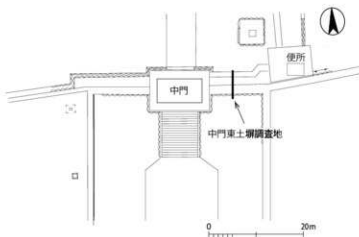


図55 中門東土堀調査配置図 (1:800)

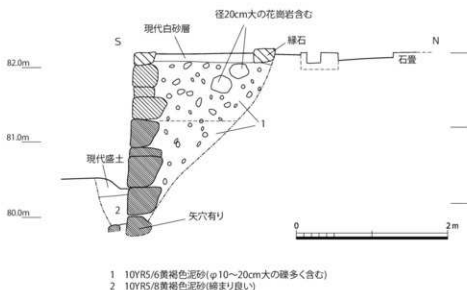


図56 中門東土塀石垣断面図(1:50)

ろである。

⑤中門東土塀 老朽化により北に傾倒していたため、解体修理を令和3年度におこなった。その作業が進められ6月には土塀の解体が終了したが、令和3年7月3日の豪雨により、土塀の基礎を構成する石垣が崩落した。土塀修理とあわせて石垣の修理がおこなわれることになり、石垣の裏込等を確認するための立会調査をおこなった。

調査は、令和3年9月10日におこなった。石垣は4時期分あり、何度か改修がおこなわれたとみられる。裏込は直径10～20cmの礫を多く含む黄褐色泥砂であり、上端で石垣面から最大2mまで確認したが、肩部はみつからず、さらに北側に広がるとみられる。

石垣の最上部の1石は現代の緑石である。その下の2～7石までは近世の石垣とみられ、上段と下段で石の積み方が異なっていた、施工差の可能性もあるが、裏込に入る石の大きさが上段のほうが大きく、瓦も多く含む。一方、下段については上段に比べ裏込に入る石が小さく、瓦がほとんど出土していないことから、江戸時代のある時期に上段だけ積みなおしている可能性がある。

下段の最下層の石は黄褐色泥砂で埋まっていた。さらに下層に1石積まれていることを確認した。確認した面積が狭小であることから、詳細は不明だが、最も下の石にのみ矢穴を確認したことから、さらに古い時期の石垣が残存している可能性がある。

石垣裏込から多くの瓦が出土した。

1～3は菊丸瓦である。小型円形の瓦当上面に細長い体部を接合する。1は単弁8葉花文である。

4・5は巴文軒丸瓦である。ともに右巻の三巴文で、周辺には大粒の珠文を配する。直径は約15cmである。

6～8は仁和寺文軒丸瓦である。いずれも字体は異なる。

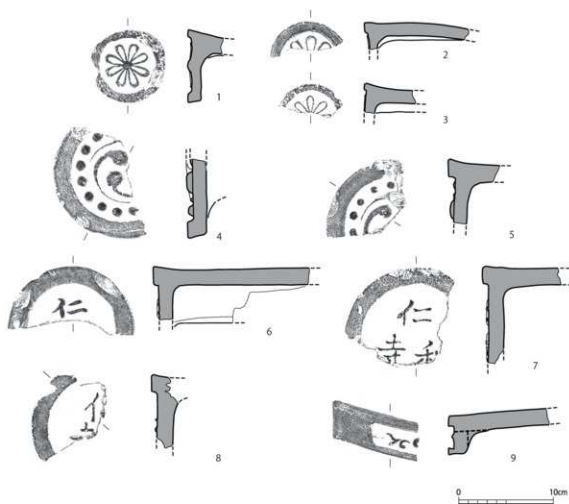


図57 中門東土堀出土遺物実測図1 (1 : 4)

9は唐草文軒平瓦である。

10・11は丸瓦である。長辺が24～25cmと短い。内面には布目が残る。

これらの瓦はいずれも近世以降のものであり、土堀に葺かれていたものが、石垣を積み直す際に裏込に混入したものと考えられる。

(家原 圭太)

#### ◎観音堂

寛永21年(1644)頃に再建された重要文化財観音堂において、建物の経年による破損が進行していたため、平成24年度から京都府教育委員会が保存のための半解体修理事業を実施した。建物の南及び東柱列の礎石を中心に不同沈下が生じていたことから、礎石の据え直しをおこなうとともに、一部で基礎補強をおこなう必要が生じたことから、礎石を取り外したうえで、下部構造の調査を実施した。

発掘調査は、外陣と内陣あわせて15箇所で実施した。礎石据付掘方の平面形は、1.2から1.6mほどの隅丸方形を呈し、深さ約0.8mから1.4m程度掘り込まれており、礎石据付掘方内部に



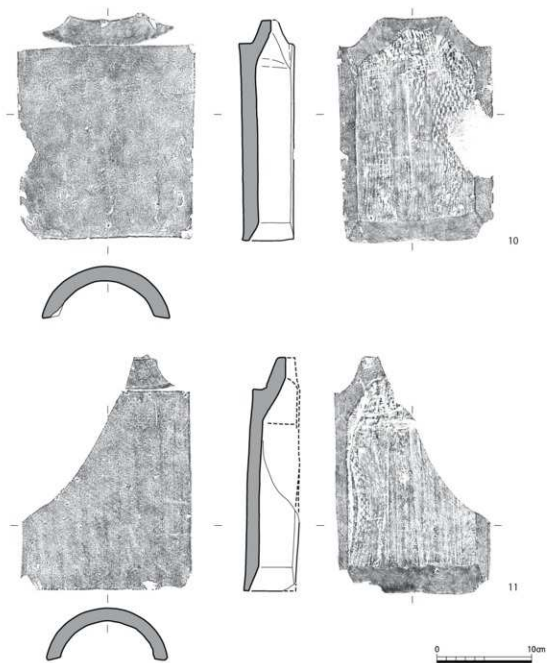


図58 中門東土堀出土遺物実測図2（1：4）

は礎石の周囲も含め小児人頭大の礫が隙間無く詰められていた。建物を支える礎石のうち23基については、遺構保存の観点から、据え直さず現状のまま修理がおこなわれた。（藤井 整）

## 6. まとめ

造成 仁和寺は北が高く、南が低い地形である。この場所に寺院を建立しようとする平坦面を確保するため、造成が必要となる。

現在の仁和寺は、北から①御影堂・金堂・経蔵。②観音堂・五重塔・九所明神。③中門。④御殿・本坊地区・円堂院跡地区。の4つの平坦面がある。この平坦面がいつ形成されたのかが課題となっている。今回の一連の調査結果は顕著な遺構が検出されていなくても、これら仁和寺の造成を考えるうえで重要な成果を得られた。

特に①御影堂・金堂・経蔵。②観音堂・五重塔・九所明神。の平坦面の調査である1～5 Tr.と6 Tr.A～C地点および立会1区、水掛不動周辺の調査では、盛土直下10～20cm程度で地山を検出している。6 Tr.A地点で検出された土坑のありかたから、遺構面は近世以降に削平されている可能性が高い。現在のような伽藍と平坦面は天和3年(1683)の「仁和寺伽藍御所惣絵図」にはみられることから、寛永～正保の再興時に少なくとも①と②の平坦面は切土によって形成されたと考えられる。

③中門の平坦面の調査では、6 Tr.D地点および便所改修にともなう調査、茶所絵馬・おみくじ掛けの調査で包含層もしくは整地層を確認している。いずれも調査区が狭小であり詳細な時期などは不明であるが、明らかに①・②の平坦面のありかたとは異なる。

たとえば6 Tr.D地点の包含層は明褐色泥砂であり、地山に近い土色・質であることから、①・②の平坦面形成時の切土を③の平坦面形成に使用した可能性がある。

④御殿・本坊地区についても、現代盛土と地山の間にいくつかの整地層がみられる。9 Tr.1層から平安時代の土師器2点が出土しているが、1層が平安時代の整地層なのか、近世に平安時代の遺構面を削平したうえでおこなった整地なのか判断できない。ただし、円堂院地区では、昭和37年度、昭和51～52年度の発掘調査で平安時代の遺構を浅いところで検出している。境内南半では、平安時代の遺構面が残っている可能性がある。

今回、境内の広い範囲で調査をおこない、造成のおおまかな傾向をつかむことができたことは、重要な調査成果といえる。

御殿・本坊地区 今回、はじめて御殿・本坊地区の中心部分で調査をおこなった<sup>2)</sup>。

御殿・本坊地区は明治20年(1887)の大火により、主要建物群が焼亡している。今回の調査では火災後の状況が明らかになった。火災痕跡を確認したのは、8 Tr.で検出した漆喰溝の埋土のみで、その他の場所では焼土や焼瓦などは一切みつからなかった。

火災後、宸殿などの再建に際して火災処理が徹底しておこなわれたことがわかる。御所空間に対する仁和寺の姿勢を知る重要な調査成果といえよう。

一方で、漆喰溝を検出したことも重要な成果である。部分的な検出のため、その性格などは不明であるが、火災以前の遺構が良好な状態で遺存しており、建物配置などを復元する定点となる。

「仁和寺伽藍御所惣絵図」や「罹災之図」には、宸殿の西側に中小僧部屋、住職居間等が描かれており、御所における居住施設の雨落溝もしくは排水溝とみられる。

溝の北側には高まり状に残る近世の整地層（6層）がある。この層は約7m北側まで広がっており、北端では地山を掘り込む。建物地業もしくは亀腹状の遺構の可能性を視野に入れて確認をおこなったが、確証は得られなかった。少なくとも漆喰溝が機能しているときには溝よりも北は高く、南が低くなっていた。したがって、北からの水を東か西へ流す機能が漆喰溝にあったと考えられる。

なお、この漆喰溝は養生したうえで、防災設備の施工をおこなった。

今回の防災設備に伴う調査は、史跡仁和寺御所跡の全域におよび、重要な調査成果を得ることができた。これまでデータが不足していた伽藍地区、御殿・本坊地区で整地層や地山の状況を確認できたことで、造成のありかた等を知ることができた。今後の調査に資するところが大きく、また、今後の現状変更における掘削深の参考となる。

一方で、中世以前に遡る遺構が検出されなかったことは課題として残った。仁和寺の歴史から、当該地に伽藍があったことは確実であるが、今回の広範囲に及ぶ調査において9Tr.で平安時代の土師器小片が整地層から出土した程度で、顕著な遺構やその片鱗を見出すことはできなかった。

寛永～正保の再興において、大規模な造成がおこなわれた可能性が高い。円堂院跡地区における八角円堂や僧坊の出土状況も勘案した境内全体の復元が必要だが、今後の課題である。

（家原 圭太）

#### 註

- 1) 宗教法人仁和寺『史跡仁和寺御所跡保存活用計画』2021年。
- 2) 御殿・本坊地区では、これまで平成11・12年に宗務庁舎、平成20年度以降に境内西面と南面の土塀で調査をおこなっている。

## IV-2 大覚寺古墳群 No.10 (20S393)

### 1. 調査の経緯 (図59～61)

本件は宅地造成及び共同住宅建設のための調査である。調査地は右京区嵯峨大覚寺門前堂ノ前町に位置し周知の埋蔵文化財包蔵地「大覚寺古墳群」に該当する。

当該地の中央部には大覚寺4号墳(図59-4)の墳丘が部分的に遺存している。今回の計画では、所有者の意向で現存墳丘部分については開発地から外れ現状のまま保存される。このため試掘調査は、開発範囲内を対象として行った。主な目的は、周濠を検出し古墳の規模を確認すること、敷地内に4号墳以外の遺構が展開するか否かを確認することであった。

試掘調査は令和3年1月4～7日・2月1～3日に実施した。この結果、上部は削平されているものの周濠底部は遺存していることが確認された。そこで、計画建物の基礎が遺構に抵触しないよう協議をし、設計変更がなされることとなった。このため周濠は地中に保存されている。なお、擁壁部分については詳細分布調査を同年5月14～18日、7月12～28日に実施した。これらの成果をあわせて報告する。

大覚寺古墳群は市内中心部の西に位置する「嵯峨野」に造られた古墳群で、4基の古墳からなる。最も大きいものは北端に位置する1号墳(円山古墳、図59-1)で径約55mの規模を誇る円墳である。「嵯峨野」は嵯峨天皇と関係が深い土地であったことから、淳和天皇の皇后正子内親王(嵯峨天皇の娘)墓の候補として、明治32年(1899)に陵墓参考地に指定された。2号墳(入道塚古墳、図59-2)



図59 調査位置図(1:5,000)



図60 調査前風景(東から)



図61 調査前風景(北東から)

もまた明治32年に陵墓参考地に指定されている。昭和50年度の京都府の調査では、墳丘を馬蹄形にめぐる周濠が確認され、25×30mの不整形な方墳であることがわかった。墳丘は削平されているが横穴式石室が残る。3号墳(南天塚古墳, 図59-3)は府立北嵯峨高等学校の建設に伴って昭和50年度に京都府が発掘調査を行っている。墳丘は大きく削平され上部構造は破壊されているものの横穴式石室であることが確認された。

4号墳(図59-4)は孤塚古墳とよばれており、長く竹林であった。部分的に墳丘が残り、横穴式石室が現在も遺存している。現存墳丘の調査は1970年に京都大学考古学研究会によって墳丘の測量と横穴式石室の実測が行われた(『嵯峨野の古墳時代』)。また2014年から龍谷大学考古学実習室・研究室によって2020年まで継続的に測量・調査が行われていた。

## 2. 遺構 (図62～68)

### 1) 試掘調査(図62～65)

試掘調査では11区のトレンチを入れて確認調査を行った(図62)。また詳細分布調査で6地点の地層を確認した。このうち遺構が確認できたのは1・4・7～10区(図63・64)で2・3・5・6・11区では遺構・遺物は検出されなかった(図65)。これらの調査区では表土をめくるとすぐ

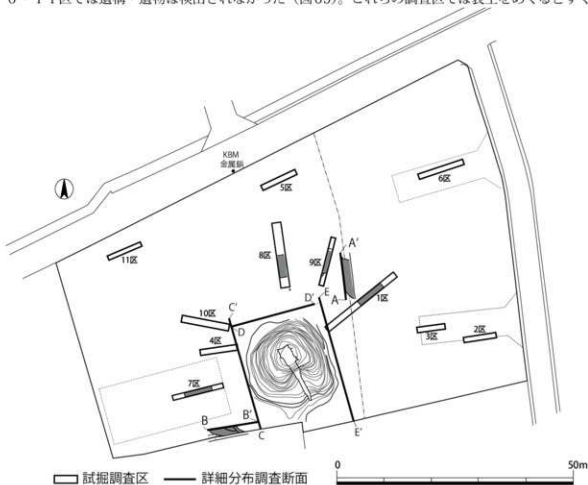


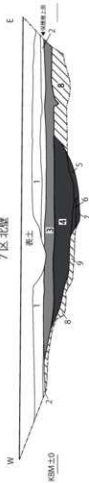
図62 調査区位置図(1:800)

1区 北壁



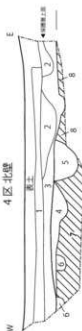
- 1 10YR2/1 黒色細砂混シルト (2層のブロック・小礫含む)
- 2 2.5Y3/2 黒褐色細砂混シルト (1層ブロック含む)
- 3 2.5Y6/4 にふい黄色細砂混シルト (小礫含む)
- 4 2.5Y6/4 にふい黄色微細シルト
- 5 2.5Y5/3 黄褐色微細シルト (2.5Y3/1 黒色シルトのブロック含む)
- 6 2.5Y5/6 黄褐色微細シルト (小礫多量に含む)
- 7 2.5Y7/4 淡黄色微細混シルト (小礫多量に含む)
- 8 2.5Y4/4 オリーブ褐色微細質シルト (小礫多量に含む)
- 9 10YR2/2 黒褐色極細砂混シルト (小礫少量含む)
- 10 10YR2/2 黒褐色極細砂混シルト (地山ブロック含む)
- 11 2.5Y6/4 にふい黄色シルト (粗砂〜小礫含む) 【地山】

7区 北壁



- 1 10YR5/4 にふい黄褐色砂泥
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (礫多量に含む)
- 3 10YR3/3 黄褐色砂泥 (小礫多量に含む、土胡麻片含む)
- 4 10YR3/3 黄褐色砂泥 (小礫含む)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (小礫含む)
- 6 10YR3/3 黄褐色砂泥 (小礫含む)
- 7 10YR3/3 黄褐色砂泥 (8層ブロック・小礫含む)
- 8 2.5Y6/4 にふい黄色極細砂混シルト 【地山】
- 9 2.5Y6/3 にふい黄色砂泥 【地山】

4区 北壁



- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
- 2 10YR4/1 褐色砂泥 (8層のブロック含む)
- 3 10YR4/1 褐色砂泥
- 4 10YR3/2 黒褐色泥砂 (小礫多量に含む)
- 5 10YR3/1 黄褐色泥土 (小礫含む)
- 6 10YR3/1 黄褐色泥土に2.5Y7/3 淡黄色砂泥含む
- 7 2.5Y7/3 淡黄色砂泥 【地山】
- 8 2.5Y6/8 黄色シルト〜極細砂 【地山】



7区

- 1 10YR5/4 にふい黄褐色砂泥
- 2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (礫多量に含む)
- 3 10YR3/3 黄褐色砂泥 (小礫多量に含む、土胡麻片含む)
- 4 10YR3/3 黄褐色砂泥 (小礫含む)
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (小礫含む)
- 6 10YR3/3 黄褐色砂泥 (小礫含む)
- 7 10YR3/3 黄褐色砂泥 (8層ブロック・小礫含む)
- 8 2.5Y6/4 にふい黄色極細砂混シルト 【地山】
- 9 2.5Y6/3 にふい黄色砂泥 【地山】

図63 1・4区断面及び7区平・断面図 (1:100)

に暗灰黄色シルト～細砂および砂礫の地山が検出されたのみであった。

1区 墳丘東裾部から放射方向にトレンチを設けた。トレンチ南西端から約9mの地点で周濠と推定される溝を検出した。調査区内の上層は近現代耕作で攪乱されていた。墳丘側ではGL-0.6m以下で砂礫の地山を検出した。北東側にはにぶい黄色シルトからなる地山が遺存していた。墳丘側の地山の直上で黒褐色細砂混シルトのブロック土とにぶい黄色粗砂混シルトが混ざった土(層2)を部分的に確認した。墳丘盛土の可能性がある。

周濠だと推定される溝は残存幅6m、深さ0.4m以上、耕作によって肩部はやや削平を受けている。埋土は黒褐色極細砂混シルト(層9・10)であった。

4・7区 墳丘の西側に設けたトレンチで、4区から掘削したが当初想定していたよりも墳径が大きき可能性が出てきたため、解体ガラと攪乱をさせて7区を掘削した。7区ではGL-0.9mで周濠を検出した。検出した溝幅は6m、残存深さは0.4mであった。埋土は主に暗褐色砂泥(層4)で下部は地山ブロックを含む灰黄褐色砂泥であった(層6・7)。層5および平面の検出状況から溝は2段掘りになっていたと考えられ、溝底東側(墳丘側)は幅1.9m深さ0.1mでさらに低くなっ

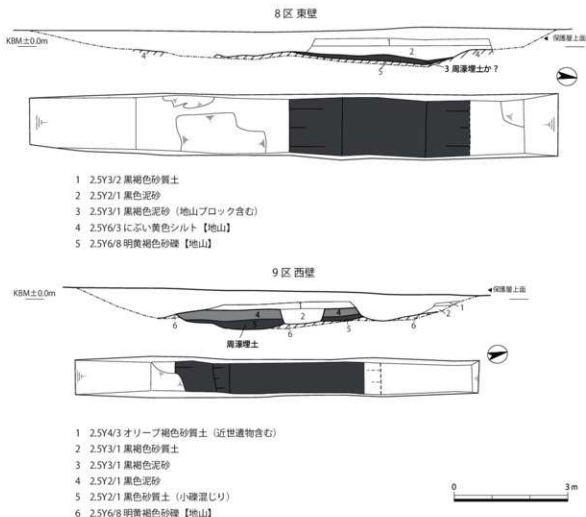


図64 8・9区区・断面図(1:100)

ていた。4・7区ではGL-0.9m付近まで近現代耕作の影響を受けており、周濠の上に堆積する黒褐色あるいは褐灰色の砂泥層からは近世土人形などが出土した。このため4区側、填丘部分は削平されていると推定される。

8区 8区は現地表面が一段低くなっているためか遺存状態が悪かった。周濠底の可能性のある黒褐色泥砂を検出したのみである。位置の検討から周濠底と推定する。

9区 9区も上部が近現代耕作土層などで攪乱されていた。周濠底と考えられる黒色砂質土を深さ0.1m検出した。

## 2) 詳細分布調査 (図66・67)

詳細分布調査でも2地点で周濠を確認した。

A-A'間では周濠を平面的に検出した。検出幅は8mである。工事掘削深までの確認調査のため確認できた深さは0.1mで、埋土は黒褐色泥砂であった。

B-B'間では幅2mと0.8mの2本の不整形な溝を検出した。深さ0.1mを確認した。埋土は黄褐色

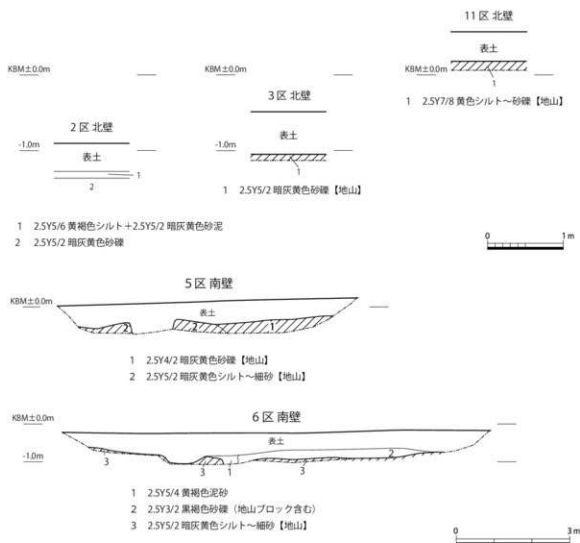


図65 2・3・11区柱状断面(1:50)及び5・6区断面図(1:100)



粘質土である。両溝に挟まれた層3は地山と類似した土のため地山の可能性があるが、2本の溝と層3をすべて周濠の最終埋土と考えると幅6mとなり周濠推定線内に収まることから層3をブロック土と考え周濠の一部を確認していると推測する。ただし深度は0.1mしか確認しておらず決定的なことは分からない。

C-C'間、D-D'間、E-E'間は現存墳丘の周辺を囲う塀の基礎掘削にともなう工事である。C-C'間、E-E'間地点で墳丘盛土の可能性がある灰黄色小礫混細砂、黒褐色粘質土と灰黄色小礫混細砂の混合層などの地層を検出した。いずれにしても墳丘盛土は近現代の耕作をうけ遺存状態は良くない。

以上の成果から、周濠を復元すると直径約45mの円を描くと推定される(図68)。調査にあたっては龍谷大学の國下多美樹先生や古墳時代を専門とする当課の熊井と検討し、円墳か方墳かの問題意識を持ってあつたが、隅の検出を狙って入れた10区が攪乱されていたため決め手に欠ける結果となった。現状では大覚寺4号墳(狐塚)は直径が45m以上ある円墳の可能性が最も妥当と考えられる。所有者の協力により墳丘は現状のまま残り、周濠は地中に保存される。方墳か円墳かは将来に託したい。

(赤松 佳奈)

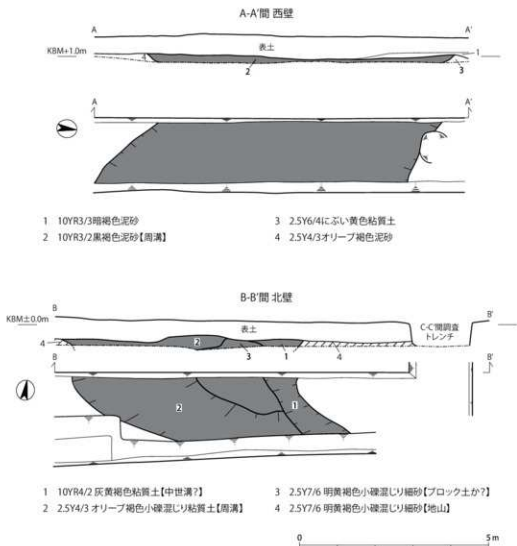


図66 詳細分布調査A-A'・B-B'平・断面図(1:100)

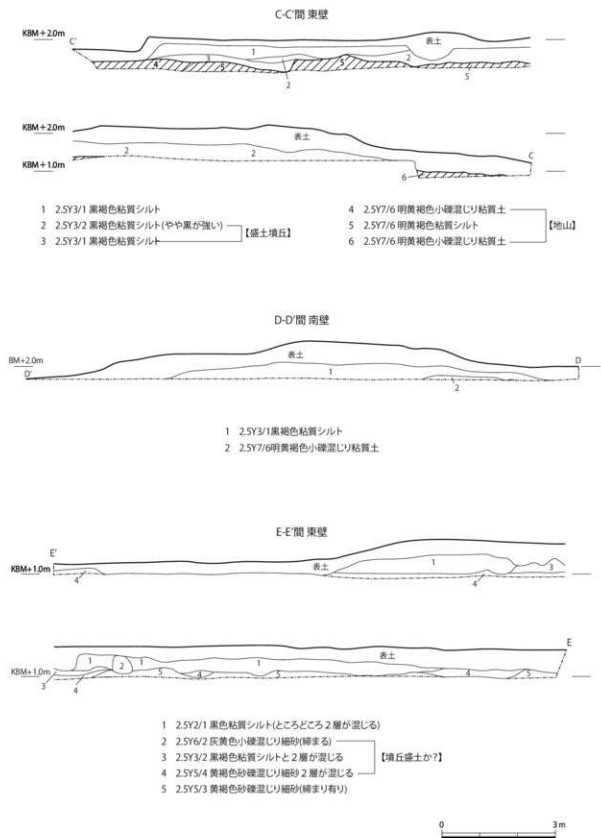


図67 詳細分布調査C-C'・D-D'・E-E'断面図(1:100)

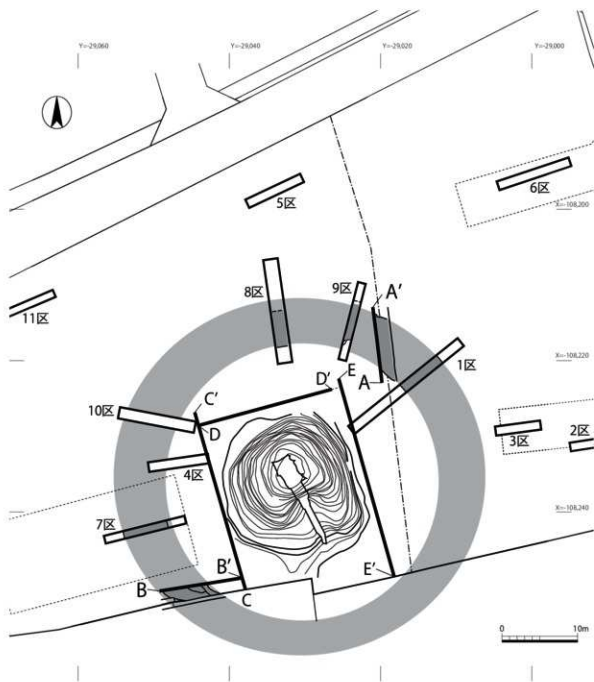


図68 周濠推定復元図 (1:500)

### 3. まとめ 大覚寺古墳群における狐塚古墳の位置付け

これまでに京都市域では800基以上の古墳・古墳群が確認されているが、これらの分布状況は「西高東低」と表現され、現在の右京区・西京区に多くの古墳が所在する。その内、太秦・嵯峨野付近では170基以上の古墳が確認されている。また、京都市域で確認されている前方後円墳の約1/3が太秦・嵯峨野に存在することを踏まえるならば、北山城における古墳時代の中心地の1つがこの付近に所在したといえる。

この地域で古墳の造営が開始されるのは5世紀末からであり、以降は7世紀前葉まで続く。これ

らの古墳は、墳形・規模から、a 前方後円墳、b 大型円墳、c 中型円墳、d 中型方墳、e 小型円墳、f 小型方墳の6つのグループに大きく分けられ、aが扇状地、b・c・dが低位段丘、e・fが高位段丘から嵯峨野北方の丘陵部に立地する傾向が認められる<sup>1)</sup>。この墳形と規模そして立地により、太秦・嵯峨野地域の古墳はピラミッド状の階層構成を示しているものと解されている。

この階層構成の頂点である首長墓としてはaの古墳が該当する。すなわち、5世紀末の垂真山古墳を嚆矢として、その後には天塚古墳、清水山古墳、そして7世紀前葉に蛇塚古墳の順に造営される<sup>2)</sup>。ただし、清水山古墳と蛇塚古墳の間に空白期が認められることから、大型円墳である円山古墳や双ヶ岡1号墳、甲山古墳がそれを埋める首長墓の可能性も想定できる。

今回、報告した狐塚古墳は大覚寺古墳群に含まれる。出土遺物や石室の様相から、まず円山古墳が築造され、次に南天塚古墳(3号墳)、狐塚古墳(4号墳)、入道塚古墳(2号墳)の順に築造されたものと想定される<sup>3)</sup>。前述の区分のうち円山古墳が大型円墳(b)、南天塚古墳が中型円墳(c)、入道塚古墳が中型方墳(d)に分類できる。また、本調査成果から狐塚古墳は中型円墳(c)に位置付けられることから、本古墳群は首長墓クラスの可能性があるものとそれに次ぐ中位クラスの古墳で構成される古墳群と捉えられる。これらを総合すると、大覚寺古墳群では大型円墳である円山古墳が6世紀後葉にまず造成され、それ以降は規模を縮小し、墳形も円墳から方墳に変化していく状況が想定でき、これは太秦・嵯峨野地域の勢力内における一集団の動向を示すものと考えられ興味深い。また、円山古墳を当地域の首長墓と考えた場合、首長墓を輩出した集団の勢力の盛衰という観点から評価できる可能性もあり、この地域の古墳時代史を復元するうえで重要な調査成果である。ただし、この地域には削平古墳や埋没古墳が未だ存在する可能性が高いことから、今後の調査の進展による実態の把握がまず望まれる。(熊井 亮介)

調査にあたっては龍谷大学の國下多美樹先生にご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

#### 註

- 1) これらの首長墓系譜に段ノ山古墳が加えられることもあるが、既往の調査などで古墳に関する遺構・遺物は確認されていないことから、本稿では除外している。また常磐柏ノ木古墳群についても同様の理由で除外する。
- 2) 和田晴吾「京都・嵯峨野の古墳と他界観」『京の地宝と考古学』2011年。
- 3) 花熊祐基「6 考察」『龍谷大学 考古学実習』№12 龍谷大学文学部考古学実習室、2016年。  
なお、当論考でも指摘されている通り、入道塚古墳と狐塚古墳の築造順については、資料的な制約があるため、今後の調査の進展により逆転する可能性も残されている。

#### 引用・参考文献

- 「Ⅱ 考古学実習調査報告 1 大覚寺4号墳(狐塚古墳)第5次発掘調査報告」『考古学実習・文化財実習報告書第3集』龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻、2020年。
- 「4 大覚寺古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘概報(1976)』京都府教育庁指導部文化財保護課、1976年。

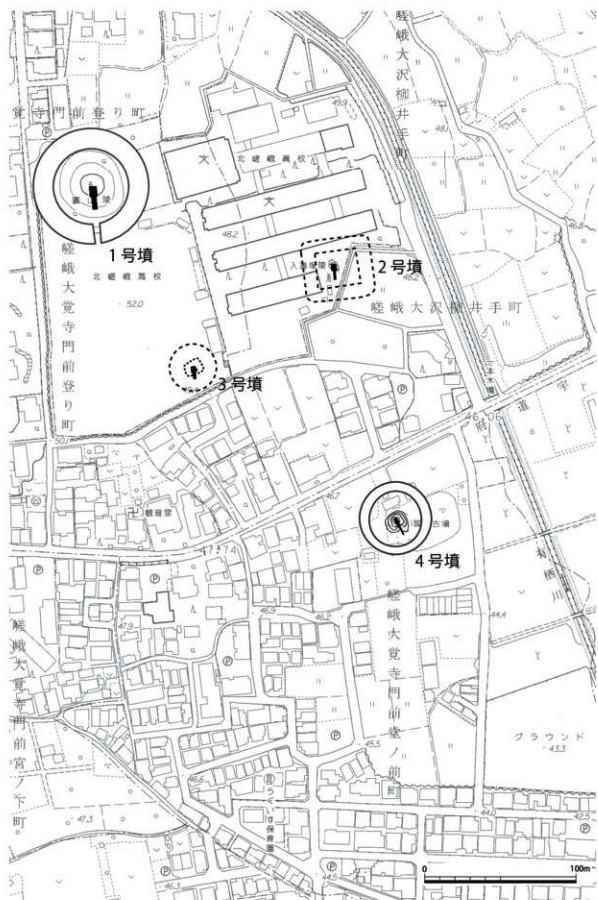


図69 大覚寺古墳群の位置関係と周辺推定線図 (1 : 2500)

## IV-3 室町殿跡（花の御所）

No.83 (20S337)

### 1. 調査経過（図71）

本件は共同住宅に伴う試掘調査である。調査地は室町殿跡（花の御所）に該当する。

室町殿は永徳元年（1381）足利義満により造営された邸宅で、別名「花の御所」とも称される。その後、足利義教や足利義政により再築などが繰り返され、長祿4年（1460）に完成した。文明8年（1476）に焼失したが、再建されることなく町屋として変化していく。

今回の調査地は、すでに令和2年度に発掘調査を実施し、南北方向の石垣を確認した。石垣が調査区北側へ続くことが判明したため、施主と協議を重ねた結果、令和2年度の発掘調査に引き続き、石垣の延長を確認する追加調査を実施することとなった。

調査期間は令和3年6月14日～25日の10日間で、調査面積は30㎡である。

調査区は令和2年度調査区のすぐ北側に設定した（図71）。

### 2. 周辺調査（図70）

室町殿跡は、調査①で安土桃山時代から江戸時代の建物や石組み遺構、室町時代の漆や庭園遺構などを確認している<sup>1)</sup>。調査②では、室町殿の区画に関連する南北方向の濠などが確認され<sup>2)</sup>、調査③では、室町殿跡に関連する義政期の庭園遺構などが確認されている<sup>3)</sup>。

令和2年度の調査では、江戸時代から安土桃山時代と室町時代の遺構面を確認した。江戸時代の遺構として、石垣50や井戸6などが確認されている。石垣50は西側に面を持ち、14.8mの規模で確認された。3段組みの石垣であり、石の規模は長辺0.4～0.8mで、一部の石材には矢穴が存在する。石垣の年代は上層の遺構や裏込め埋土の遺物から18世紀頃に築造したものと想定されている。

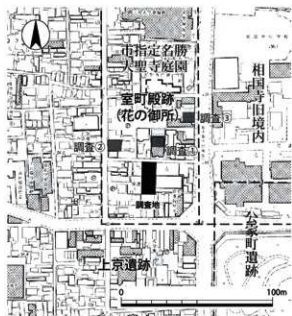


図70 調査位置図（1：2,500）



図71 調査区位置図（1：2,000）

また、室町時代の遺構は敷地を区画すると想定される東西溝や土取りの土坑群などが確認されている<sup>1)</sup>。

### 3. 調査 (図71～75)

層序は、現代盛土以下、GL-0.25mの明黄褐色泥砂で江戸時代後期(図73 D-D'5層)、-0.6mの  
 にぶい黄褐色泥砂で江戸時代中期(図73 D-D'7層)、-0.8mの灰褐色泥砂で江戸時代前期(図73C-

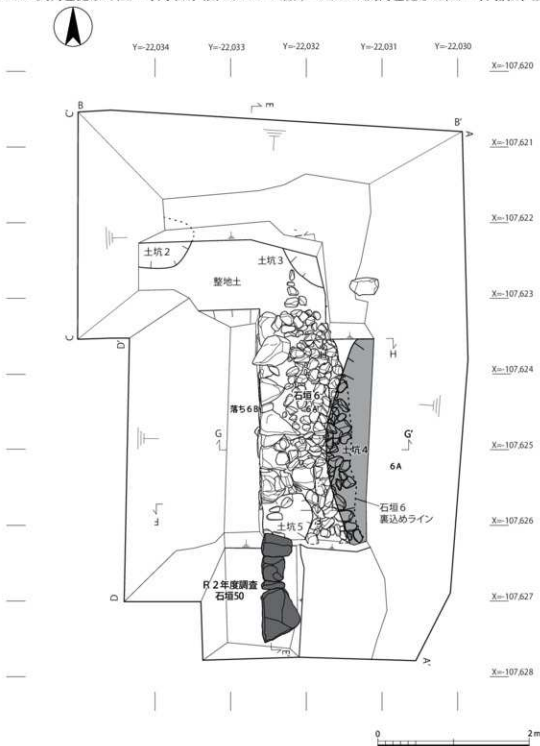


図72 調査区平面図 (1:50)

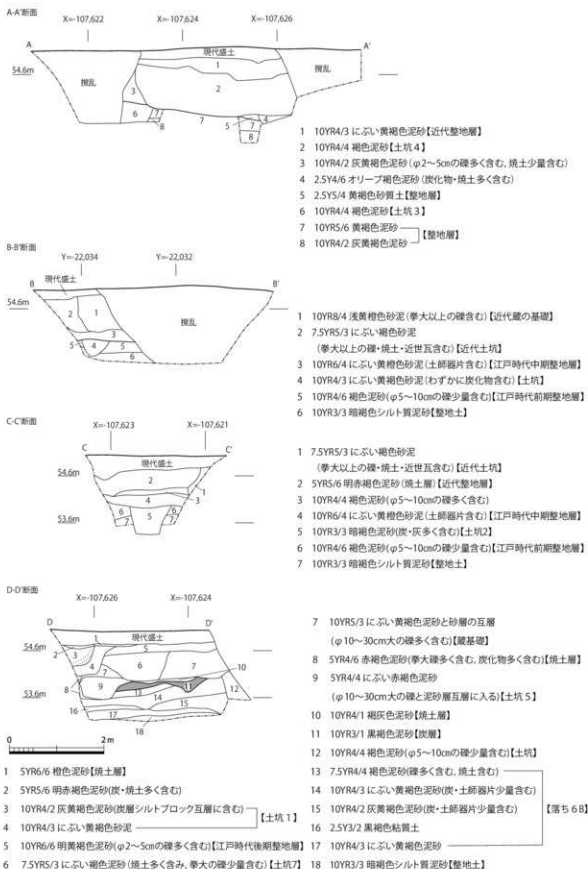


図73 調査区断面図1 (1:80)



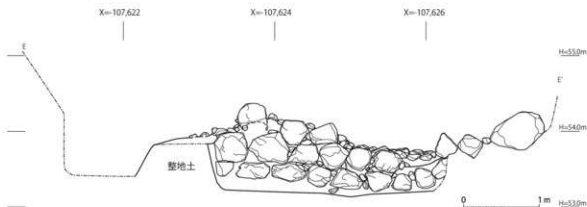


図74 石垣6立面図(1:50)

C'6層), -1.2mの暗褐色シルト質泥砂で整地層(図73C-C'7層)である。確認した遺構は土坑6基、石垣1条である。

【土坑1】 調査区南西隅で検出した(図73D-D'3・4層)。東西0.3m以上、南北1.0m以上で、深さは0.5mである。埋土は炭・焼土を含む赤褐色泥砂、にぶい黄褐色泥砂の2層に区分できる。

【土坑2】 調査区北西側で検出した(図73C-C'5層)。東西0.3m以上、南北0.8mで、深さは0.6mである。埋土は1層で、炭や灰を含む暗褐色泥砂である。土師器や施釉陶器などが出土した。時期は17世紀頃と考えられる。

【土坑3】 調査区北東側で検出した(図75I-I'2層)。石垣成立前の整地層を切りこむ。東西0.3m以上、南北0.7m以上で、深さは0.4mである。埋土は褐色泥砂で土師器片が出土した。

【土坑4】 調査区東側で検出した。石垣埋没後に成立する(図73A-A'2層)。東西0.7m以上、南北2.7m以上、深さ0.8mである。埋土は褐色泥砂の1層で、拳大の礫が敷き詰められて埋められていた。後述する石垣6の裏込めの石を再利用した土坑と考えられる。埋土に含まれる石は裏込めに使用されている石と類似する。一見すると裏込め埋土のように見えるものの断面を見ると、東へ落ちる土坑状の落ち込みが確認できる(図75H-H'1層)。この落ち込みを確認したことから、石垣掘方に類似した別遺構であると判断した。時期は18世紀後半頃と考えられる。

【土坑5】 調査区南側付近で検出した。(図75F-F'1~4層)東西1.8m以上、南北1.1m、深さは0.5mである。埋土はにぶい赤褐色泥砂、黄褐色砂礫、にぶい赤褐色泥砂、炭を多く含む黒褐色泥砂の4層に区分できる。

【石垣6】 調査区中央付近で検出した。令和2年度に確認した石垣50の延長部である。石垣の西は周辺より約1m低くなり、その段差に対して面をもつ。石垣部を6A、西側の落ちを6Bとして報告する。石垣6A:南北2.9mを検出した。石垣南側は土坑5により一部壊され上段の石材は消失している。中央部では3段の石が遺存する。長辺0.2~0.5m、高さ0.2~0.4mの石材を使用し、高さ0.9mを検出した(図74E-E')。石材には花崗岩やチャートを使用している。矢穴を確認し、幅は0.05~0.07mである。裏込めは検出幅0.7m、φ0.1~0.2mの拳大の礫を詰める。深さ0.9mを確認した。最下段は裏込め幅0.2mであった。埋土はオリブ褐色細砂である(図75G-G')。

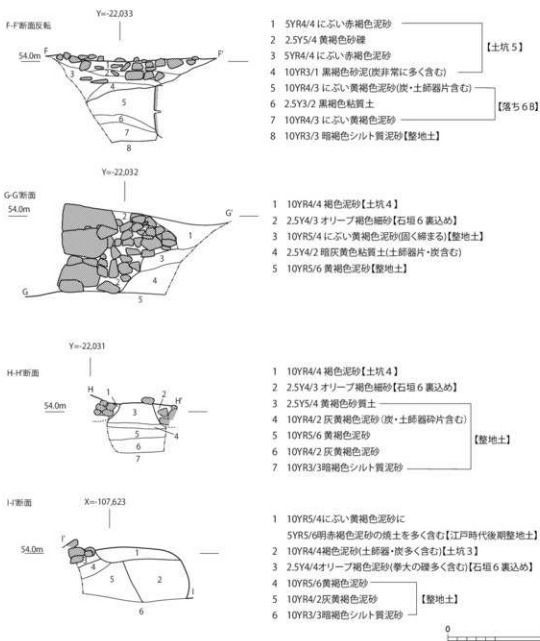


図75 調査区断面図2 (1:40)

石垣は調査区南から4.6m地点のX=-107623付近で途切れる。北側で石垣の延長部の検出を試みたが、調査区内で石垣の延長を確認できなかった。また、石垣の積み方は上段と下段の目地が並ばないよう積まれているが、石垣の北端を確認すると上段と下段が揃うように積まれている。石垣の掘方が整地土(図75I-I'4~6層)を切って成立していることから、石垣は落ち6Bの護岸のために造られたと考えられる。落ち6B:石垣より西側で検出した。幅0.7m以上、深さ0.6mである。埋土は3層に分けられ、上層が炭・土師器片を含むにぶい黄褐色泥砂、中層が黒褐色粘質土、下層が黄褐色泥砂である。(図75F-F')。17世紀後半から18世紀頃の遺物が出土したことから、埋土は石垣廃絶後の整地層と考えられ、石垣使用時には段差(落ち)であったと推定される。

**【土坑7】** 調査区西壁で検出した(図73D-D'6層)。南北1.4m以上、深さは0.5mである。埋土は焼土を多く含む、拳大の礫が少量含むにぶい褐色泥砂である。土師器片や焼け壁土が出土した。

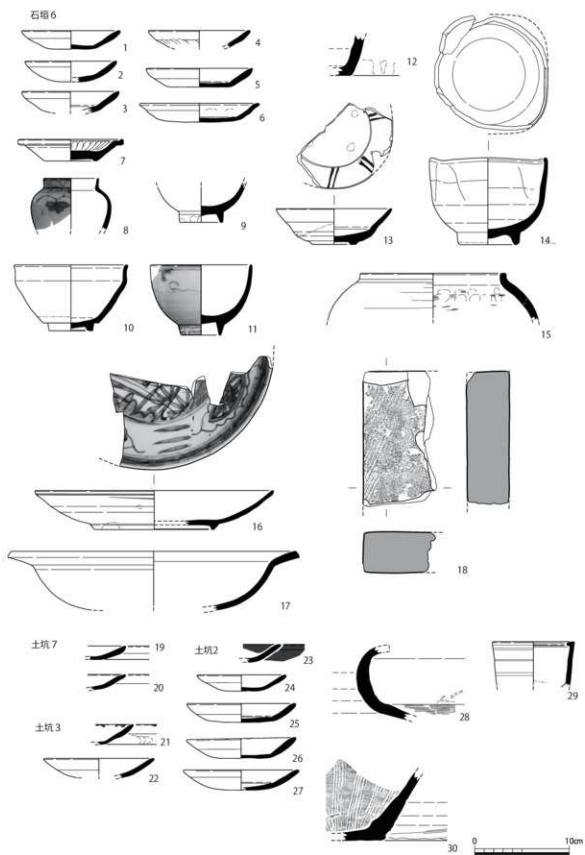


图76 出土遺物実測図(1:4)

## 遺物 (図76・図版32)

遺物は土師器、陶磁器、動物遺体、焼壁土などが出土した。遺物は江戸時代のものが主体である。

### 土器・陶磁器・瓦 (図76)

**落し6B** 1～6が土師器皿である。口径は9.6cm～12.6cmに収まる。時期は12A段階に属する。7は美濃産のソギ皿である。8は染付の小壺である。9は白磁の椀である。10は天目茶碗である。削り出し高台で口縁端部は外反させる。11は染付椀である。12は施軸陶器の筒型鉢の底部である。13は唐津焼の皿で、内面に鉄絵を施す。14は唐津焼の椀である。高台の底部に胎土目の痕跡が3箇所確認できる。15は瓦質土器の壺である。16は染付の皿である。17は焙烙鍋である。口縁部が胴部から外側に開く。18は埴である。上下面、側面にナデを施す。これらの遺物は17世紀後半から18世紀頃のものと考えられる。

**土坑7** 19・20は土師器皿である。時期は12B段階に属する。18世紀中頃と考えられる。

**土坑3** 21・22は土師器皿である。21は口縁部に煤が付着する。時期は11B段階に属する。17世紀中頃から後半と考えられる。

**土坑2** 23～27は土師器皿である。口径は8.5cm～12.0cmに収まる。時期は11B段階に属する。23は口縁部に煤が付着する灯明皿である。28は瓦質土器の甕の頸部である。29は施軸陶器の香炉である。口縁が内側に折れる。30は信楽焼播鉢の底部である。内側のすり目は5本1単位である。時期は17世紀中頃から後半のものと考えられる。

### 骨・貝・焼け壁土 (図版32)

**落し6B** 31はネコの下顎骨である。歯が残存する。32はハモの前頭骨である。33は貝のゴウハラである。

**土坑7** 34は焼け壁土片である。表面は被熱を受けており、赤くなる。裏面は藁が付着する。

## 4. まとめ (図78)

今回の調査で、土坑6基と石垣1条を確認した。本調査区と令和2年度の調査区を

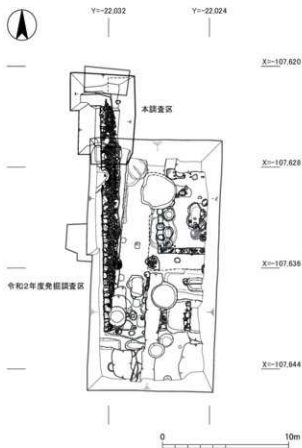


図77 遺構位置関係図 (1:300)

重ね合わせると、今回確認した石垣6は令和2年度に確認した石垣50の延長であることが分かる。また、令和2年度と本調査で確認した石垣を合わせると、18m分残存している。今回の調査で確認した石垣6は令和2年度の調査と同様に石が3段分残存していることを確認した。さらに、石垣は本調査区から北側へ延びず、調査区中央のX=-107.623m付近で止まることを確認した。また、石垣は東側にも折れないことを確認した。さらに、今回確認した石垣の積み方は上段と下段の目地が並ばないように積まれるが、北端の石垣の積み方は上段と下段が北に揃うように積まれている。石垣の築造年代については、本調査区内の裏込めから遺物が出土しなかったが、令和2年度の調査成果では裏込めから18世紀頃の遺物が出土し、築造は18世紀と報告されている。同じ石垣であることから、築造の時期は同じ18世紀と考えられる。また、石垣6からは17世紀後半から18世紀の遺物が出土していることから、18世紀には埋没しているものと考えられる。元禄十四年(1701)の「元禄十四年実測大絵図」では、対象地は江戸時代の勤修寺家の敷地内であることがわかる。令和2年度の発掘調査報告で、石垣50は勤修寺家の敷地境界に伴うものであると指摘されている。今回確認した石垣はその延長であることから、同様に勤修寺家の敷地境界の石垣と考えられる。

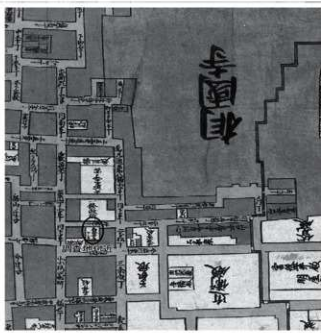


図78 「元禄十四年実測大絵図」から見る調査地

今回の調査で勤修寺家の屋敷地の一部を確認することができた。今回の調査地周辺は近世以降に公家屋敷として土地利用されていることが絵図から読み取れる。今後、江戸時代の土地利用について明らかになるよう資料の増加に期待する。

(清水 早織)

註

- 1) 堀内明博「室町殿跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
- 2) 熊井亮介「VI室町殿跡(花の御所)・上京遺跡」『京都市遺跡発掘調査報告 平成30年度』文化市民局、2019年。
- 3) 松永修平「室町殿跡・上京遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020-1』京都市埋蔵文化財研究所、2020年。
- 4) 西田倫子「室町殿跡・上京遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020-11』京都市埋蔵文化財研究所、2021年。

## IV-4 山科本願寺南殿跡 No.19 (20S648)

### 1. 調査の経緯 (図79)

本件は共同住宅新築にともなう試掘調査である。

対象地は建物建築の際に平成31年3月26日に文化財保護法93条第1項に基づく届出が提出され、平成31年3月29日に試掘調査を実施し、山科本願寺南殿と考えられる遺構面を確認し、遺構は地中保存される措置が取られた。その後、外構工事の計画が追加された。その計画では遺構を地中保存することが困難であるため、外構工事範囲で遺構が大きく削平される南端を中心に再度試掘調査を行い、記録保存することとなった。調査は令和3年1月29日に実施し、面積は計10㎡である。

周辺では小規模ながら、複数の調査が実施されている。調査①では、山科本願寺南殿の内郭の土塁と堀が屈曲し、延びることを確認している。この調査成果によって内郭の規模が確定した<sup>1)</sup>。調査②は、時期不明の整地層と井戸を確認しているが、山科本願寺南殿期と断定できる遺構遺物は確認されていない<sup>2)</sup>。調査③は、江戸時代以降の溝4条、土坑2基を確認した。室町時代の遺構は溝2条、掘立柱建物1棟、土坑3基を確認した。そのうち、建物と同時期と考えられている土坑は底部に石を据えられており、構造物の基礎遺構と報告されている。また、多くの柱穴や根石土坑を検出し、建物の建て替えなどが行われていることが判明した。南殿の内郭の前面は同様の遺構が展開していると考えられており、調査終了後、設計変更によりこれらの遺構は地中保存されている<sup>3)</sup>。調査④は対象地の南に面する道路が山科本願寺南殿の外郭線と推定されており、南限の可能性が高いラインである。この調査は掘削深度が浅く、時期不明のビット2基、土坑1基を確認するとどまっている<sup>4)</sup>。調査⑤はGL-0.5mでぶい黄褐色シルトの地山を確認したものの、遺構・遺物の確認には至らなかつ



図79 調査位置図 (1:5,000)

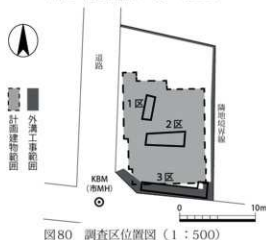


図80 調査区位置図 (1:500)

た<sup>5)</sup>。調査⑥はGL-0.4～-0.65mで山科本願寺南殿にともなう包含層及び遺構の埋土と考えられる地層を確認し、遺構は地中保存されている<sup>6)</sup>。調査⑦は南殿外郭内部の区画溝の可能性のある溝を確認している(本書IV-5章)<sup>7)</sup>。

## 2. 層序と遺構(図80・81)

建物部分を対象とした1・2区ではGL-0.7m(KBM-0.2m)で褐色砂質土の遺構面を確認し、その上面で流路の東肩口と考えられる落ち込みやピットなどを確認した。

今回報告する外構工事部分を対象とした3区は東西方向に調査区を設定した。基本層序はGL-0.35m(KBM±0m)で黒褐色粗砂混じりシルト、-0.45m(KBM-0.2m)でにぶい黄褐色粗砂混じりシルトの地山である。地山上面で遺構検出を行ったところ、土坑を1基、柱穴を3基、ピットを3基確認した。

**土坑1** 調査区東端で検出した。東西0.6m以上、南北1.2m以上で方形を呈する。深さは0.8mで埋土は3層に区分される。上層が暗褐色細砂混りシルト、中層が炭化物を含む黄褐色粗砂混りシルト、下層がオリーブ褐色泥砂である。上層から唐津焼の茶碗片や染付片、煙管の細片などが出土した。遺物が小片で、詳細な時期は不明だが、1・2区の成果を踏まえると、時期は江戸時代と考えられる。

**柱穴2** 東西0.6m、南北0.3m以上の柱穴である。深さは0.3mで埋土は8層(図81-8層)である。柱穴底からφ0.2mほどの根石を検出した。

**柱穴4** 東西0.45m、南北0.2m以上で円形を呈する。深さ0.25mで埋土は9層(図81-9層)と同様である。φ0.2mの石が埋土に含まれる。

**柱穴6** 径0.5mの円形で、深さは0.25mである。埋土は2層で1層は黒褐色礫混じりシルト、2層は暗褐色礫混じりシルトである。1層は柱抜き取りの埋土と想定される。

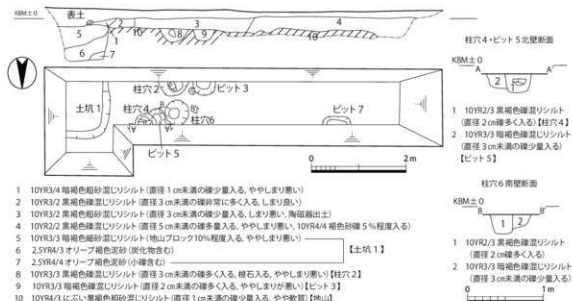


図81 1区平・断面(1:80)及び遺構断面図(1:50)

ビット3・5・7 東西0.45～0.55mのビットである。深さは0.25～0.3mに取まり、埋土はいずれもビット3（図81-9層）と同様である。

### 3. まとめ

今回の調査では、地山直上で江戸時代の遺構を確認した。遺物が出土した遺構は土坑1のみで他の遺構の時期は不明である。土坑1と同時期の可能性もあるが、1・2区で

山科本願寺南殿期の可能性がある遺構が確認されているため、山科本願寺南殿の時期の可能性も考えられる。

周辺は山科本願寺南殿が衰退して以降、土地利用が不明な点が多く、周辺の調査も狭小の範囲であることから部分的な確認にとどまる。今回の調査範囲では工事範囲が小規模で山科本願寺南殿に直接関係する遺構は認められなかったが、山科本願寺南殿期～江戸時代の遺構を確認することができた。また、今回の調査地は「光照寺絵図」によると、内堀の建物が想定されている付近である（図82）。今後、面的に調査することができれば、絵図に描かれている建物に関連する遺構が確認される可能性が考えられる。なお、対象地の建物部分については設計変更により、遺構の地中保存がなされている。今後の南殿に伴う資料の増加を待った上で、本調査の成果を再評価したい。

（清水 早織）

#### 註

- 1) 赤松佳奈「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成26年度』京都市文化市民局、2015年。
- 2) 黒須亜希子・廣富亮太「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局、2019年。
- 3) 京都市文化財保護課「IV山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』2007年、京都市文化市民局。
- 4) 京都市文化財保護課「試掘調査一覧表-86」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局、2009年。（08S264）
- 5) 京都市文化財保護課「試掘調査一覧表-93」『京都市内遺跡試掘調査報告平成27年度』京都市文化市民局、2015年。（15S047）
- 6) 京都市文化財保護課「試掘調査一覧表-111」『京都市内遺跡試掘調査報告平成28年度』京都市文化市民局、2016年。（16S497）
- 7) 調査⑦本書IV-5章



図82 「光照寺絵図」と今回の調査地の位置関係図



## IV-5 山科本願寺南殿跡 No.92 (21S043)

### 1. はじめに

本件は個人住宅建築のための調査である。調査地は山科区音羽伊勢宿町に位置し周知の埋蔵文化財包蔵地である「山科本願寺南殿跡」に該当する(図83)。

山科本願寺南殿は15世紀末に建てられた浄土真宗本願寺第八世宗主蓮如の隠居所である。山科本願寺及び南殿跡は天文元年(1532)に六角氏と法華宗徒の連合軍に攻撃を受けて焼亡したが、当地には南殿跡地の一部を引き継いで法灯を守った光照寺(光称寺)が残る。光照寺に伝わる文書によれば南殿は二重の土塁・堀で囲まれており、土塁の一部は光照寺の東縁に残されている。これまでの調査によって4ヶ所で堀が確認された(図84)。

本件は南殿跡の外郭部分に該当し、東隣接地では南殿跡にともなう包含層を検出したことから、設計変更により遺跡が地中保存されている<sup>1)</sup>。今回の計画は遺構面に抵触する可能性が高いことから、令和3年6月23日に試掘調査を実施した。



図83 調査位置図(1:5,000)

### 2. 遺構(図30~33)

調査地の東半に3区の調査区を設けて遺構の確認を行った。この結果、現地地表下(以下「GL-」)0.8mで南北方向に延びる溝を1条検出した。

**基本層序** 当該地の基本層序は現代盛土以下GL-0.4mで黒褐色細砂混じり粘土質シルト、-0.6mで黒褐色粗砂混じりシルト、-0.8mで黒褐色細砂混じりシルト、-1.3mで暗灰黄色砂礫の地山であった。

**溝1** 2区で東肩を検出したため3区を設定し、3区の平・断面で溝であることを確認した。検出した幅は約1.4mで深さは0.5mである。埋

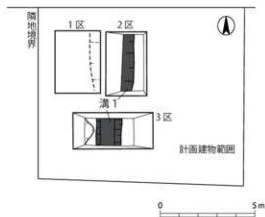


図84 調査区位置図(1:200)

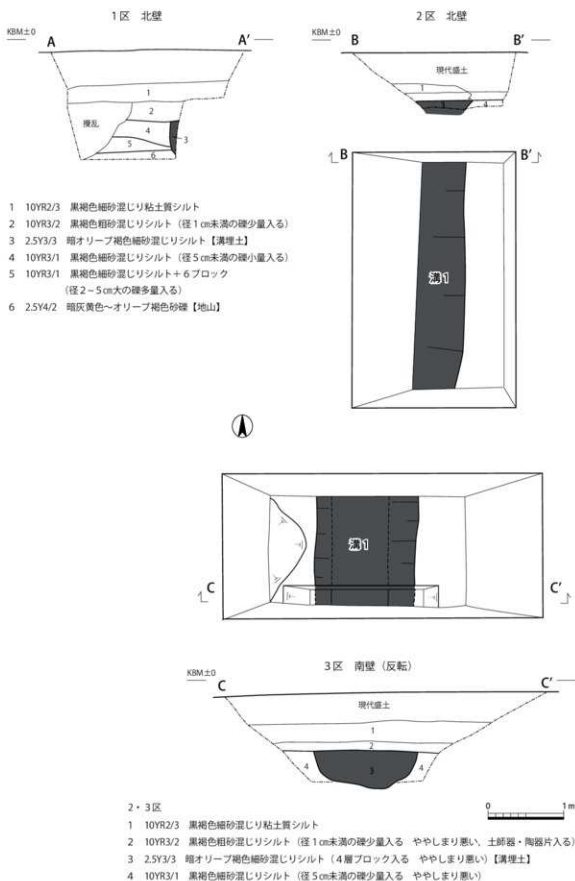


図85 1~3区平・断面図 (1:50)

土は暗オリーブ褐色細砂混じりシルトである。遺物等は出土しなかった。

溝1の正確な時期は不明だが、周辺の調査成果から各調査区の層2上面が江戸時代後期に相当すると推定される。このため溝は山科本願寺南殿の時期か江戸時代の遺構と考えられる。今回検出した溝は絵図に残る堀とは無関係であるものの、南殿外郭内部の区画溝の可能性はある。今後の周辺の調査成果に期待したい。

(赤松 佳奈)

註

1)『京都市内遺跡試掘調査報告平成28年度』京都市文化市民局2017一覧表(16S497)

参考文献

「Ⅶ 山科本願寺南殿跡第(6～8次)」『京都市内遺跡発掘調査報告』令和元年度 京都市文化市民局2020



図86 2区遺構検出状況(南東から)



図87 3区溝1(北西から)

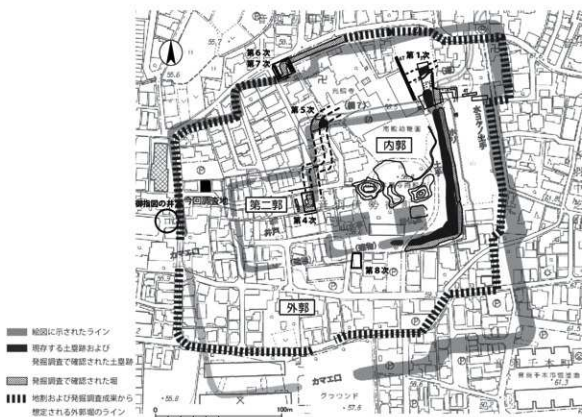


図88 山科本願寺南殿復元案(1:3,000)

## IV-6 長岡京左京二条四坊五・十二町跡

### No.26 (20NG043)

#### 1. 調査の経緯 (図89)

本件は駐車場の造成工事に伴う試掘調査である。対象地は桂川PAの南東にあたる伏見区久我西出町に所在する。当該地は、長岡京左京二条四坊五・十二町跡及び東四坊坊間小路跡に該当する。周辺では、桂川PAが建設されて以来、工場誘致などが進み、発掘調査(調査①・②・④)や試掘調査(調査③・⑤～⑪)、詳細分布調査(調査⑫)が行われている(図89)<sup>1)</sup>。調査①・②では、長岡京期の建物群や、条坊遺構の他、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の水路、水田などが確認されている。また対象地の南東隣接道路(調査④)は平成26年に発掘調査が行われ、東四坊坊間小路が確認されている。調査⑦～⑫でも長岡京期の建物群や条坊遺構が確認されたことから、設計変更が行われ、遺構は地中保存されている。

当該町の状況は、条坊関係遺構のほかに宅地内南半で遺構が確認されているが、当該地を含む北半では顕著な遺構は確認されず、不明な点が多い。

今回の調査は、盛土を主体とした造成工事であるため、遺構面の深さの把握を主目的とし、東四坊坊間小路の確認及び宅地内の様相を把握するため、令和3年1月14・15日に行った。

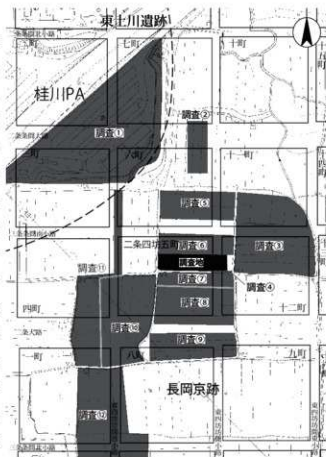


図89 調査位置図(1:5,000)

#### 2. 層序と遺構 (図90・91)

今回の調査では、対象地全体を把握するため、条坊道路想定範囲を中心に東西方向の調査区を3箇所(1・2・4区)、敷地西半に南北方向の調査区を1箇所(3区)、設定した(図90)。

宅地内想定範囲の2・3区の基本層序は、現代耕作土、床土、中世遺物を含む褐色粘質シルト(3区-1層)、GL-0.4～-0.5m(KBM-0.63～-0.85m)でマンガンが多く含まれ、著しく表層が硬

化しているにぶい黄褐色粘質シルト（3区-2層）である。3層以下は、GL.0.45～-0.6mで灰色粘土（3区-3層）や黄灰色粘土（2区-4層）の無遺物層の湿地状堆積が続く。にぶい黄褐色粘

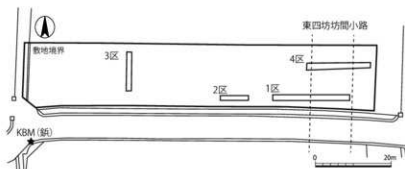


図90 調査区位置図（1：1,000）

質シルト（3区-2層）上面で遺構検出を行い中世耕作溝を検出したが、これ以外の明確な遺構は確認できなかった。

東四坊坊間小路の想定位置である1・4区では耕作溝や条坊側溝を確認した。1区の基本層序は2・3区と同じ様相を示す。南隣接地で行われている発掘調査（調査④）では中世耕作溝と条坊関連遺構が同一面で確認されていたことから、オリーブ色シルト（3層）上面で遺構検出を行った。結果、中世耕作溝を検出したのみで条坊関連遺構を確認することはできなかった。これを踏まえ、4区ではマンガンを多量に含む灰黄色粘質シルト（11層）以下を主に調査を行なった。4区の基本層序は、現代耕作土、中世の包含層、GL.0.5～-0.55 m（KBM-0.78 m）でマンガンを多く含む灰黄褐色粘質土や灰黄色粘質シルトの中世包含層2（4・5層）、-0.6～-0.7 m（KBM-1.03 m）でマンガンを含む灰黄色粘質シルト（11層）や、にぶい黄褐色粘質シルト（14層）、以下、にぶい黄色粘質シルトや黄灰色粘質シルトの湿地状堆積が続く。遺構検出は中世包含層2の上面にて中世耕作溝、11・14層上面にて溝2条（溝1・2）と柱穴1基（ピット3）を確認した。

溝1は幅1.2m、深さ0.6m以上の南北溝で、埋土は大きく2層に区分出来る。溝2は幅2.0m、深さ0.35m以上の南北溝で、埋土は単層で、ともに黄灰色や灰色シルトである。ピット3は直径0.7mの円形と考えられ、深さ0.25m以上である。底部に礎板の可能性のある木板を確認した。いずれからも遺物は出土しなかったが、遺構の配置から溝1は東四坊坊間小路西側溝、溝2は東四坊坊間小路東側溝と考えられる。またピット3の埋土が溝1・2と類似していることから、同じく長岡京期の遺構と考えられる。

4区の調査では、1～3区で確認できなかった中世包含層2（4区-4・5層）を確認したことから、周辺調査成果で示されていた1面2時期でなく、遺構面が2面存在することが明らかとなった。ただし調査成果から、この中世包含層2は、対象地の北東部にのみ存在すると推測される。

### 3. まとめ（図92）

今回の調査では、東四坊坊間小路の両側溝と考えられる南北方向の溝を2条確認した。これらの溝は、調査④・⑦・⑧でも確認されている東四坊坊間小路の延長と考えられるが、対象地北側に位置する調査⑤・⑥では、条坊側溝は確認されていない（図92）。また今回の調査でも条坊関係以外の遺構は希薄で、宅地内の様相は不明である。宅地北側が長岡京期から遺構が希薄であるのか、中

### 1 区北壁断面図

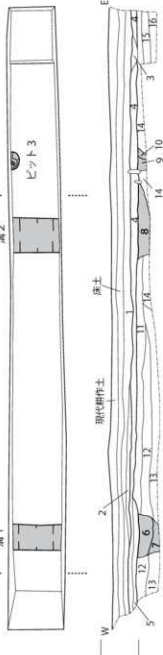


- 1 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (マンガン多く含む)【中世包含層】
- 2 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (マンガン多く含む)【中世包含層】
- 3 5Y5/6 オリーブ色シルト (マンガン含む)【ベース】
- 4 2.5Y5/1 黄灰色粘土【湿地状堆積】

### 4 区平面図・北壁断面図



東四坊間小路  
東四坊間線定ライン



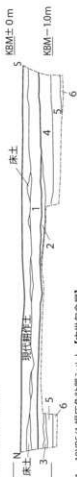
- 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質土【中世包含層】
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (マンガン多く含む)【中世包含層】
- 3 10YR5/1 黄灰色粘質土【中世耕作層】
- 4 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (マンガン多く含む)【中世包含層 2】
- 5 2.5Y6/2 灰黄褐色粘質シルト (マンガン多く含む)【中世包含層 2】
- 6 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト【溝 1：東四坊間小路西側部溝】

### 2 区北壁断面図



- 1 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (マンガン多く含む)【中世包含層】
- 2 5Y5/2 灰オリーブ色シルト (マンガン多く含む)【中世包含層】
- 3 5Y5/4 オリーブ色シルト【中世耕作層】
- 4 2.5Y5/1 黄灰色粘土【湿地状堆積】

### 3 区東壁断面図



- 1 10YR5/1 黄褐色粘質シルト【中世包含層】
- 2 10YR5/1 にふい黄褐色粘質シルト (マンガン多く含む)【ベース】
- 3 7.5Y4/1 灰色粘土【湿地状堆積】
- 4 7.5Y6/1 灰色粘土に3層がマーブル状に混じる【湿地状堆積】
- 5 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト【湿地状堆積】
- 6 7.5Y7/2 灰白色層砂〜シルト【湿地状堆積】

- 7 5Y5/1 灰色粘質シルト (微砂混じる)【溝 1：東四坊間小路西側部溝】
- 8 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト (微砂混じる)【溝 2：東四坊間小路東側部溝】
- 9 2.5Y5/1 黄灰色粘質シルト【ピット 3】
- 10 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト【ピット 3】
- 11 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト (マンガン多く含む)
- 12 10YR5/1 黄灰色粘質土 (粘性強い)
- 13 2.5Y5/4 黄褐色粘土 (粘性強い)
- 14 10YR6/4 にふい黄褐色粘質シルト (粘性強い、マンガン多く含む)
- 15 2.5Y6/4 にふい黄褐色粘質シルト (マンガン多く含む)【湿地状堆積】
- 16 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト (粘性強い)【湿地状堆積】

図91 1～3区断面及び4区平面・断面図 (1:100)

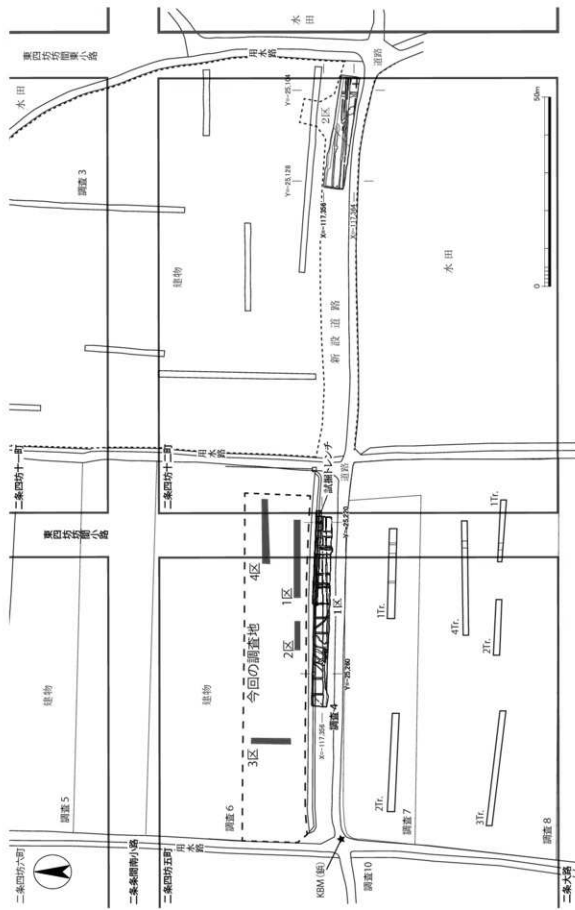


図92 周辺調査成果と調査地（1：1,000）

世以降の削平を受けたために遺構が希薄となっているのかについては、周辺調査からも判断がつかず、今後も注視する必要がある。

なお、本件は協議の結果、設計変更を行い、地中保存が図られている。(奥井 智子)



図93 4区全景(南西から)



図94 4区東四坊間小路東側溝とピット3  
(南東から)

註

1) 以下、図1の調査№に対応。

調査1:「長岡京跡左京二条三・四坊、東土川遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第28冊、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、2000年。

調査2:「長岡京左京二条四坊六・七町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書2008-13、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2009年。

調査3:「VI 試掘調査一覧表: №21 (13NG553)」『京都市内遺跡試掘調査報告平成26年度』京都市文化市民局、2015年。

調査4:「長岡京左京二条四坊五・十二町跡」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書2014-5、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2014年。

調査5:「VI 試掘調査一覧表: №104 (08NG267)」『京都市内遺跡試掘調査報告平成20年度』京都市文化市民局、2009年。

調査6:「V 試掘調査一覧表: №142 (19NG013)」『京都市内遺跡試掘調査報告令和元年度』京都市文化市民局、2020年。

調査7:「VI 試掘調査一覧表: №118 (20NG083)」『京都市内遺跡試掘調査報告令和2年度』京都市文化市民局、2021年。

調査8:「VI 試掘調査一覧表: №117 (20NG084)」『京都市内遺跡試掘調査報告令和2年度』京都市文化市民局、2021年。

調査9:「VI 試掘調査一覧表: №119 (20NG258)」『京都市内遺跡試掘調査報告令和2年度』京都市文化市民局、2021年。

調査10:「V 試掘調査一覧表: №27 (10NG151)」『京都市内遺跡試掘調査報告平成23年度』京都市文化市民局、2012年。

調査11:「IV 試掘調査一覧表: №85 (08NG394)」『京都市内遺跡試掘調査報告平成21年度』京都市文化市民局、2010年。

調査12:「VI 調査一覧: NG360 (19NG062)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告令和元年度』京都市文化市民局、2020年。



## IV-7 長岡京左京二条四坊十一・十三・十四町跡

### No.113 (21NG019)

#### 1. はじめに (図95・96)

本件は物流倉庫建設事に伴う試掘調査である。計画地は伏見区久我御旅町内で周知の埋蔵文化財包蔵地である「長岡京跡」に該当する。当該地は長岡京条坊復元によれば、左京二条四坊十一・十三・十四町及び二条条間南小路・東四坊坊間東小路にまたがり、周辺の試掘・発掘調査(調査①・②)によって、長岡京期に活発な土地利用が行われていたことが明らかにされている<sup>1)</sup>。したがって、本調査においても長岡京期の遺構の確認が予想された。ただし、現況の地割に乱れが認められることから、当該地北西を流れる西羽東師川の影響も想定された。

以上の状況を勘案して、本調査の目的を長岡京期の遺構面の把握とし、計画建物に合わせて、10箇所(1～10区)に調査区を設定した。調査は令和3年6月2日から開始し、9日に終了し

た。なお、5区にて中世に属する建物跡などを確認したことから、遺構の展開状況を把握するために隣接して9・10区を設けた。調査面積は合計で234㎡である。

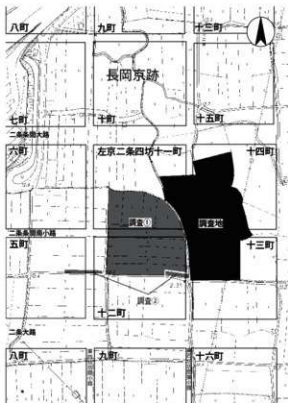


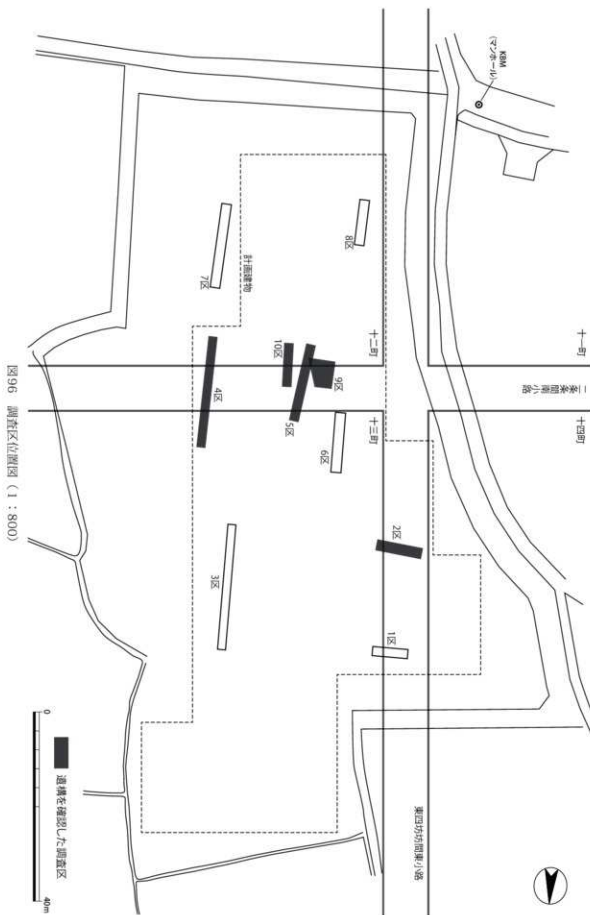
図95 調査位置図 (1:5,000)

#### 2. 遺構 (図97～100)

層序 1～10区の基本層序は概ね共通しており5区西壁を代表して述べる。現代盛土直下のGL-0.94mで旧耕作土(図97-①層)、-1.1mで中世遺物包含層(図97-②層)、-1.26mで地山(図97-③層)となる。遺構検出は地山直上で実施し、溝(2・10区)・落込み(4・5・10区)・柱穴(5区・9区)・土坑(9区)を確認した。

溝1(図98) 2区中央で検出した溝である。溝は北に対して僅かに西に振り、検出幅が約1m、深さは約0.2mである。溝2に切られる。

溝2(図98) 2区中央で検出した南北溝である。検出幅が約1.8m、深さは約0.2mである。溝



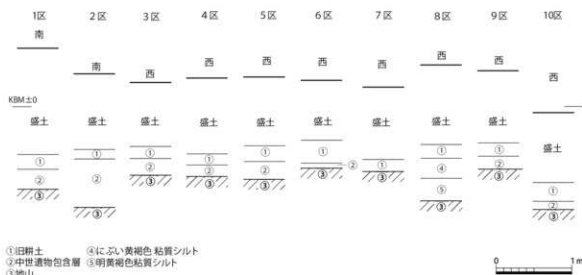


図97 各調査区基本層序柱状断面図（1：50）

2と同様に蛇行する。埋土から平安時代後期～鎌倉時代の遺物が出土した。

溝10（図98）10区北側で検出した東西溝である。検出幅が約1m以上あり調査区外に展開する。深さは約0.1mである。埋土から瓦器小片が出土した。

落込み3（図98）4・5・10区で検出した落込みである。各調査区の南側に位置し、ほぼ東西方向に並ぶことから、同一遺構の可能性が高い。また、検出位置が十二町の北側内溝付近に当たることから内溝とも考えたが、幅が4.5m以上もあることから内溝の可能性は除外した。規模は検出面で南北約2.5～4.5m以上、東西約23m以上、深さは約0.5～0.7mである。埋土から瓦器小片が出土した。

柱穴4（図98・100）5区中央で検出した柱穴である。一辺0.4mの隅丸方形で、深さは約0.3mである。最下層に礎板状の木製の板が据えられている。柱穴4-4層（図100）から13世紀頃の瓦器椀が出土した。

柱穴5（図98）5区中央東側で検出した柱穴である。直径約0.12mの円形で、深さは約0.04mである。柱穴4と5は直線で並ぶが柱穴規模が大きく異なり、柱穴規模に対して柱間が約3.7mもあることから、それぞれ別の施設に伴うものと推測する。

柱穴6（図99・100）9区で検出した柱穴である。柱穴6は直径約0.2mの円形で、深さは約0.2mである。埋土から2期に属する土師器小片が出土した。平安時代の遺構の可能性があるが、後述する土坑8からも9世紀中頃～10世紀中頃の灰軸陶器と共に11世紀後半頃の瓦器と白磁が出土していることから、柱穴6も11世紀後半以降に埋没した際に平安時代の遺物が混じり込んだと考える。

柱穴7（図99・100）9区西端で検出した柱穴である。一辺が約0.5mの方形で、深さは約0.2mである。柱穴6と7は東西方向に並び、芯々間で約1.7mとなる。柱穴規模が近似し柱間が約1.7mであることから同一施設に伴う柱穴と推測する。

土坑8（図99）9区南端で検出した土坑である。東西約2.8m、南北1.9m以上、深さは約0.76

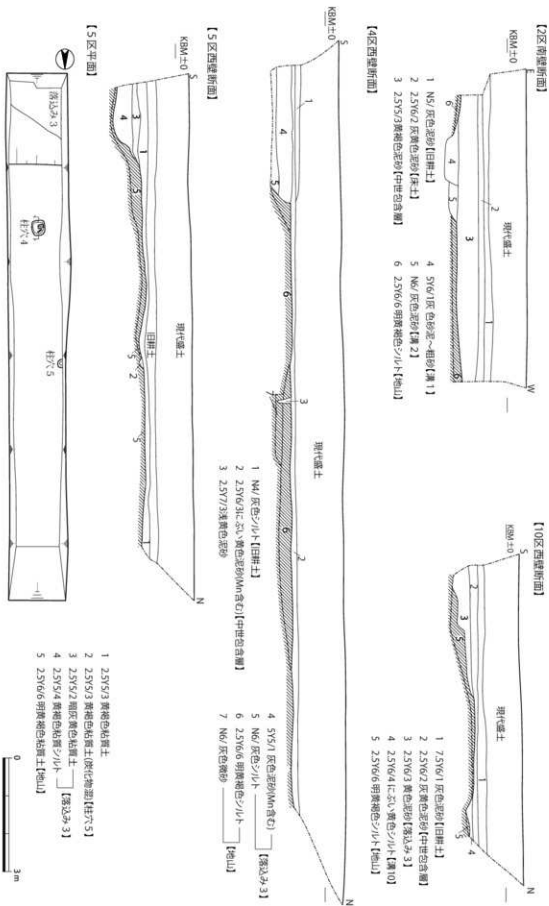


図98 2・4・10区断面及び5区平面・断面図 (1:100)

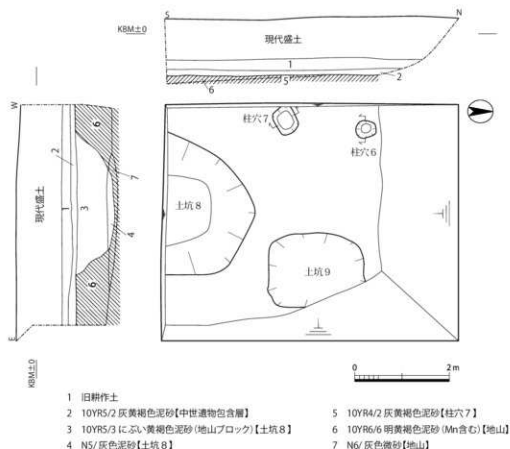


図99 9区平・断面図 (1:80)

mである。埋土から9世紀中頃～10世紀中頃の灰軸陶器, 11世紀後半頃～13世紀代の瓦器・白磁などが出土した。

土坑9 (図99) 9区東側で検出した土坑である。東西約1.6m以上, 南北約2mである。

### 3. 遺物 (図101)

遺物は各調査区から出土しているが, ほとんどが細片で図化することができなかった。図化できたのは9区から出土した遺物のみである。

1～4は土師器皿である。1・2は2期, 3・4は4Cに属する。1・2は柱穴6, 3・4は柱穴7から出土した。5は灰軸陶器碗である。内外面に僅かに軸が残る。9世紀中頃～10世紀中頃に属する。6は瓦器碗である。摩耗が著しく磨きは不明である。13世紀に属する。7は白磁碗である。11世紀後半頃に属する。5～7は土坑8から出土した。



図100 柱穴4・6・7平・断面図 (1:50)

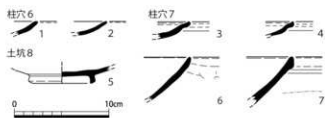


図101 出土遺物実測図 (1:4)

## 4. まとめ

本調査では予想に反して長岡京に関する遺構は確認できず、限定的ではあるが平安時代後期～中世にかけての遺構が展開していることが明らかになった。

遺構は敷地中央部（4・5・9・10区）に集中しており、詳細な建物復元には至らなかったが、2棟以上の建物があった可能性が高い。一方、出土遺物は平安時代中期頃のもの、平安時代後期～鎌倉時代のものであり、このうち後者の遺物が主体となる。周辺調査でも僅かではあるが中世の土器類が出土する<sup>2)</sup>。このように、当該地は長岡京の京域にあたるが、長岡京期における土地利用はなく、平安時代前期においても同様の状況が継続する。平安時代中期頃になり、徐々に周辺部の土地利用が進み、平安時代後期～鎌倉時代にかけて当該地にまで土地利用が及んだものと想定できる。

これまで、当該地を含めた周辺では中世に属する土器類が出土していたものの、建物などの遺構は確認できず、中世の詳細な土地利用方法や範囲は不明であったが、本調査によって明確な土地利用状況を把握することができたことは大きな成果と考える。

また、調査前に予想した西羽東師川の影響は認められなかったが、2区溝2や4・5・10区で検出した落込み3などは、西羽東師川支流などの影響で成立した落込みの可能性があり、仮にこれらの遺構が河川に関連するものだとすれば、当該地の西側に河川が位置していたことになる。または、上述した遺構が河川の影響でないとしたら、当該地の北東付近を流れていた可能性もあり、今後の周辺調査で注意する必要がある。

（鈴木 久史）

### 註

- 1) 試掘調査で、掘立柱建物跡や二条間南小路両側溝、東四坊坊間小路両側溝などを確認している。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課「IV 調査一覧表No.21」『京都市内遺跡試掘調査報告平成26年度』、2015年。
- 2) 布川豊治「長岡京左京二条四坊五・十二町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-5』（公財）京都市埋蔵文化財研究所、2014年。

## IV-8 史跡・特別名勝 西芳寺庭園 No.122 (3N006)



図102 調査位置図 (1:5,000)

### 1. はじめに (図102・103)

本件は、史跡及び特別名勝西芳寺庭園及び隣接地における試掘調査である。

西芳寺の立地は、西山に源を持ち、桂川に注ぐ西芳寺川が山地から平野部へと流れ出す扇状地上にあり、北側には山が迫る。

西芳寺の歴史は、応永七年(1400)の奥書がある『西芳寺池庭縁起』によると、聖徳太子がこの地に別荘を設け、池を作ったとある。天平年間に行基が寺に改め、寺号を「西方寺」と名付けたが、その後荒廃し、鎌倉時代に入り幕府評定衆の中原師員が法然上人を請じ、浄土宗に改め、寺観を整えたとされる。その後、兵乱によって荒廃したため、暦応二年(1339)に師員の子孫にあたる撰津

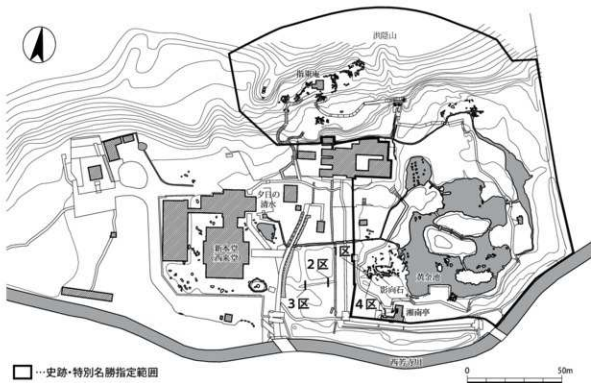


図103 史跡・特別名勝西芳寺庭園指定範囲図 (1:2,000)



図104 影向石付近の石組（北から）



図105 1区調査前風景（南西から）



図106 3区付近の導水路跡の凹み（西から）



図107 2区調査前風景（西から）

右近大夫将監藤原親秀が夢窓国師を勧請、再興を託した。国師は、中国洪州の西山に隠棲していた唐代の亮座主を慕っていたことから、西山に位置する西方寺に縁を感じ、これを喜んで引き受け、「祖師西來五葉聯芳」の義から寺号を「西芳寺」とし、禪宗に改めている。

さらに池を黄金池と名づけ、畔に本堂の西來堂、樓閣の無縫塔、合同亭、湘南亭、潭北軒のほか、多数の仏閣僧舎を建てたことが記されている。

西芳寺は現在、庭園の全域を苔が覆い、「苔寺」の名で知られているが、苔が庭園を覆うようになったのは江戸時代後期以降であり、国師入寺当初は、白砂青松の庭園として知られ、桜花と紅葉が特に著名であり、光明上皇のほか、足利尊氏・直義兄弟や歴代の足利将軍が幾たびも訪れている。中でも8代義政は、東山殿造営にあたり、範を西芳寺に求めたことで知られている。

しかし、応仁文明の乱の最中、文明元年（1469）西軍による焼き討ちを受け、湘南亭を除く寺内の建物はほとんどが焼亡する。その後、義政によって指東庵の再興が図られるものの<sup>31</sup>、他の建物は跡が残るのみとされた<sup>32</sup>。加えて、背景に山を抱え、扇状地上に位置する立地の特性から、度々山崩れや洪水の被害を受けている。記録に残るだけでも、文明十七年（1485）に洪水、寛永年間（1624～1644）に洪水で大破、元禄元年（1688）洪水によって池庭が流出したとある<sup>33</sup>。享保十九年（1734）発行の『山城志』には「近世山潰れ水溢れ半ば荒廃す」と記され、同二十年刊行の『築山庭造傳』に描かれた西芳寺庭園の池は極めて小さく、近世には大きく荒廃した状況を示している。

西芳寺では、2031年に開山1,300年の節目を迎えるにあたり、境内の整備を検討する中で、庭



園を覆う苔が近年の温暖化による湿度の低下によって衰弱が進んでいることが懸念され、湿度を一定に保つための対策を講じる必要が生じていた。

そこで寺側では、新たに導水路を設けるにあたり、応仁・文明の乱以前の庭園の姿を克明に記した『日本栖芳寺遇真記』<sup>4)</sup>に「寺の中、溪流を林表に引き、之を准らして池となす」との記載に基づき、史跡・特別名勝指定地西側に凹みとして残るかつての導水路を活用することを計画した。この凹みは、現本堂の建立（昭和51年築）まで、西芳寺川上流へ向かってさらに延びていたことが森蘊氏が昭和30年（1955年）に作成した測量図に残されている（図108）。昭和13年（1938）に重森三怜氏が作成した測量図（以下、「重森図」という）には、石組の導水路として描かれ、暗渠となって築地下を通り、影向石付近の石組に注ぎ込むように描かれている。重森図には導水路について「溝底粘土築石 水源枯涸」と記載されているものの、当時は導水路跡が露出していたことを示しており、近代まで使用されていたと想定された。

上記の計画に対し、導水路跡は指定地外に位置し、埋蔵文化財包蔵地外であるが、庭園に密接に関わる遺構であるため、試掘調査を実施することとなった。調査区は、導水路の遺構を確認するため2箇所を設定（2・3区）（図106・107）、さらに重森図に描かれた暗渠から出た水が影向石西側の石組への注口付近に設定した（1区）（図105）。

調査は5月31日から開始し、6月10日まで実施した。6月4日に文化庁文化財第二課名勝部門青木達司調査官、京都芸術大学尼崎博正教授、8日に尼崎教授、9日に京都産業大学鈴木久男教授の指導を受け、1区で水が流れた明瞭な痕跡が認められなかったため、1区南東に新たに4区を設定した。調査面積は計9㎡である。

調査の結果、2・3区にて新旧2時期の溝を確認したこと、江戸時代後期に大規模な盛土を行う

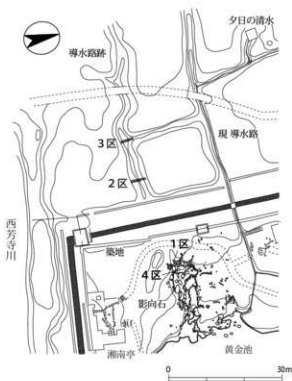


図108 旧地形と調査区位置図（1：1,000）



図109 1区測量図（1：20）

造成があったことなどを明らかにし得た。

## 2. 遺構 (図108～115, 図版33)

調査区は、重森図に描かれた西からの暗渠が影向石付近の石組西端に注ぐ箇所に1区、導水路を確認するため、庭園西側の掘乱を利用して2区、夕日の清水からの導水路跡との合流地点に3区、2区で確認した下層の溝(溝2)との関係を探るため影向西側の石組付近に4区を設定した。

**1区(図109)** 表土直下、GL-5cmで現在の庭園基盤層である明黄褐色砂泥層となり、石組の掘方を確認した。水が流れていた痕跡は認められなかった。滝石組上部の標高は44.35mである。

**2区(図110・111)** 層序は、表土以下GL-0.1mで褐色砂泥等の近世造成土、-1.2mで中世整地

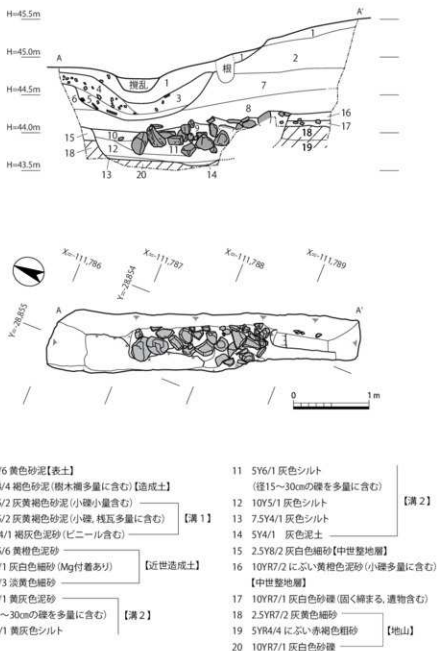


図110 2区平・断面図(1:50)



図111 2区全景（北から）



図112 3区全景（北から）

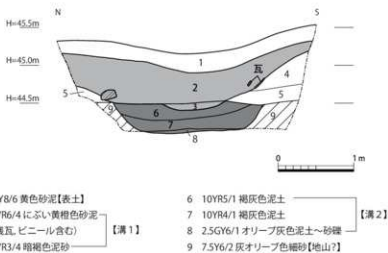


図113 3区東壁断面図（1：50）

層、-1.4 mで灰黄色細砂の地山となる。遺構は、中世整地層、近世造成土のほか、近世造成土上面で成立する溝（溝1）、中世整地層上面で下層の溝（溝2）を確認した。

中世整地層は、地山直上に層厚10cm弱で2層認められた。砂礫を多く含み、固く締まる。整地層上面の高さは44.25 mである。土師器細片と古瀬戸碗の破片が出土した。近世造成土は、中世整地層上面から均質な約1mの厚さで積み上げられている。造成土は遺物を含まない精良な土で3層認め

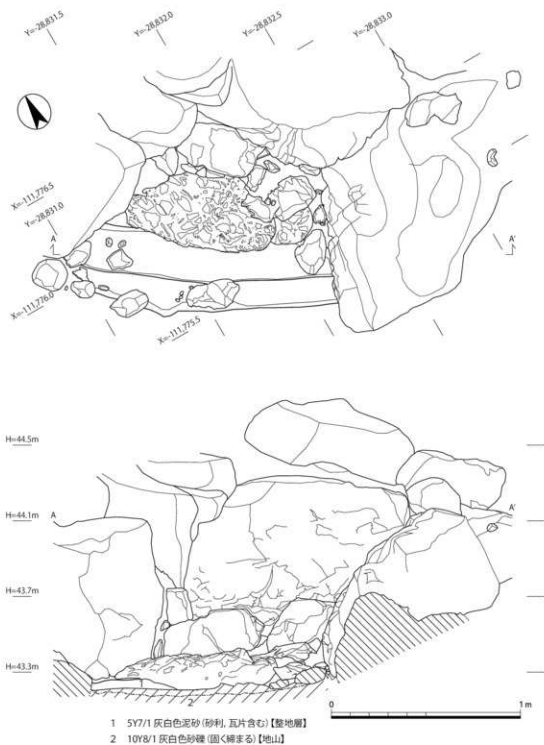


図114 4区平・立面図(1:20)

られるが、造成の単位と考えられる。後述する溝2から江戸時代初頭の信楽焼、溝1から江戸時代後期の棧瓦が出土していること、18世紀には庭園の荒廃が記されていることから、江戸時代後期の仕事と捉えられる。

溝1は、幅2m以上、深さ0.6mの東西溝で、溝底の標高は44.15mである。埋土には砂礫を含



図115 4区全景(東から)

む堆積が認められ、流水があったことがわかる。小礫や椀瓦、ビニールが出土した。西側は攪乱で削平を受けているが、延長線上には凹みが残り、西に続く。重森図等に描かれた導水路と考えられるが、石組護岸は認められなかった。

溝2は、幅2.8m、深さ0.7mを測る。2区の西延長線上に設けた3区でも東西溝(溝2)を確認していることから、同一の溝と捉えられる。溝

底の標高は43.55mである。埋土上層には、径15~30cmの人頭大の礫を多量に含み、下層は泥土が堆積し、滞水していたことを示している。上層の多量の石には組み合わせさった痕跡はなく、埋めるために人為的に投げ入れられたものと判断した。遺物は中世の須恵器系陶器の壺や近世初頭の信楽焼の壺が出土した。

**3区(図112・113)** 層序は、表土以下GL-0.4mで明黄褐色泥砂の近世造成土となり、-1.1mで地山の可能性のある灰オリーブ色細砂となる。遺構は、2区でも認めた近世造成土のほか、造成土上面で溝1、灰オリーブ色細砂上面で溝2を確認した。

溝1は、幅3.2m以上、深さ0.9mを測る。溝底の標高は、44.4mである。2区溝1と同一のものであり、さらに西へ延びるが、北肩は確認できず、埋土が続くことから、夕日の清水からの現導水路へと続いていると考えられる。遺物は、椀瓦のほか、ビニール等が出土した。溝2は、幅2m、深さ0.4mを測る。溝底の標高は44.1mである。遺物は出土しなかった。

**4区(図114・115, 図版33)** 滝口と想定していた1区で、水が流れた痕跡は認められなかったこと、石組上部の標高(44.35m)が2区溝1底(44.15m)よりも高かったことから、1区南東で滝石組と捉えられる箇所に4区を設定した。

4区は石組を覆う苔を除去したところ、石組底部で長さ0.8mの風化したチャートが地山直上に据えられていることを確認した。石を覆う整地層からは、中世の瓦、土師器が出土した。

### 3. 遺物(図116)

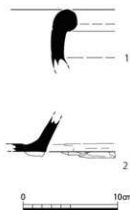


図116 遺物実測図(1:4)

遺物は、2区溝1で近世後半の椀瓦、溝2で焼締陶器、中世整地層から時期不明の土師器、古瀬戸の椀、3区で掘削中に近世の瓦や焼締陶器、4区断削にて地山直上の整地層から中世の土師器、瓦が出土した。いずれも細片が多く、図化出来たものは少ない。

1・2は、2区溝2から出土した。1は、須恵器系陶器の大型壺の口縁部である。端部が肥厚している。2は、信楽の壺底部である。底部外面には重ね焼きの痕跡と思われる織着が認められ、近世初頭に位置づけられる。

## 4. まとめ

今回の調査では、当初の目的であった導水路跡を確認したことに加え、新たな知見を得ることができた。ここでは調査成果を踏まえて課題を提示し、まとめとしたい。

導水路跡は、2・3区で確認した(溝1・2)。溝1は、近世造成土上面を成立面とする溝で、現在もその痕跡を地表面に留めている。3区での堆積状況は、溝がさらに西方向に延びることに加え、現在も凹みとして残るように夕日の清水から黄金池に注ぐ水路からの水も合わせていたことを示している。埋土からは、椀瓦やビニール片が出土しており、その成立面から近世後期に掘削されたものが近現代にかけて埋没したことがわかる。重森図に描かれた導水路と同一のものと考えられるが、図で描かれている石組は認められなかった。溝2は、溝1の前身と捉えられる東西溝で、中世整地層上面で成立している。整地層からは古瀬戸碗の破片が出土しており、室町時代の記録に残る導水路の可能性が高い。

溝1・2ともに西から東へ下る勾配を持ち、黄金池へ注いでいたことは間違いない。しかし、溝1の注口と想定した1区では、石組上部の標高(44.35m)が2区溝1底(44.2m)と僅かながら逆勾配になること、溝2の注口と想定した4区では、石組底に水受石の可能性があるチャートの大石は存在するものの、明確な注口の痕跡を認めることが出来なかった。今後、指定地西限の築地付近での暗渠を確認し、その方向性を見定めた上で、影向石付近の石組を注意深く観察し、溝1、溝2からの通水した水の注口を確定させることが必要である。

2・3区で確認した近世造成土は、精良な土で厚さ約1mに及び、当該期に大規模造成が行われたことが明らかになった。西芳寺では、17世紀に大規模な洪水を受け、池庭が流出したと記されている。しかし、天保十二年(1841)に発行された『西芳寺放生會重興略記』の挿図では、庭園は現在の姿に近く、江戸時代後半に池の浚渫を含めた整備が行われたことがわかる。造成の範囲は不明であるが、度重なる洪水を受け、上流側を大きく嵩上げすることで、庭園の保全を図ろうとしたものと考えられる。今後、造成の範囲を把握することで、庭園の変遷を具体的に明らかにする一助となろう。

(西森 正晃)

### 註

- 1) 『蔭涼軒日録』文明十九年四月二十四日条「指東庵立駐上棟之日取。」
- 2) 『鹿苑日録』明応八年十二月十六日条「西來堂、瑠璃殿、湘南亭、合同船遺址存耳」
- 3) 『西芳寺池庭縁起』の追記にある。
- 4) 著者である申叔舟は、李氏朝鮮からの使者として嘉吉三年(1443)に来朝し、西芳寺を訪れている。久恒秀治『京都名園記』下巻、(株)誠文堂新光社、1969年に全文が掲載されている。

表1 出土遺物概要表

	Aランク点数 (箱数)	内訳	Bランク点数 (箱数)	Cランク点数 (箱数)	出土箱数 合計
点数 及び 箱数	144点 (8箱)	土師器 50点, 須恵器 20点, 黒色土器 1点, 緑釉陶器 10点, 灰釉陶器 3点, 瓦器 4点, 施釉陶器 6点, 焼締陶器 2点, 肥前磁器 8点, 輸入陶磁器 2点, 軒丸瓦 18点, 軒平瓦 3点, 平瓦 3点, 丸瓦 4点, 石製品 1点, 土製品 1点, 金属製品 2点, 銭貨 3点, その他 3点	3箱	8箱	19箱

## V 試掘調査一覧表

令和2年度 1～3月

平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
1	一条四坊十町跡・ 公家町遺跡・京都新城跡	上京区京都御苑2	3/23・ 24	GL-0.2mで近世整地層1、-0.35mで近世整地層2、-0.5mで近世整地層3、-1.5mで整地層4となる。本文8ページ。	25㎡	20H631
2	三条三坊十町跡・ 二条殿御池城跡・ 烏丸御池遺跡	中京区両替町通押小路下の金吹町454、 455、457-5	2/26	GL-0.9mで中世末～近世初頭遺構面、-1.15m、-1.25mで中世遺構面、-1.55mで平安時代後期遺構面、-2.05mで浅黄色シルトの地山を確認。発掘調査を指導。	77㎡	20H581
3	四条四坊一町跡・ 烏丸御池遺跡	中京区高倉通三条下 丸屋町160-2ほか	1/27	近現代盛土以下、GL-1.06mで江戸時代初頭整地土、-1.3mで中世整地土、-1.74mで古代整地層。発掘調査を指導。	90㎡	20H046
4	五条二坊十六町跡・ 烏丸綾小路遺跡	下京区石井筒町 536-1	2/17	GL-0.6mで室町時代の遺物を含む黒褐色泥砂、-1.6mで地山の褐色シルトを確認。遺構面を5面確認。発掘調査を指導。	35㎡	20H590
5	八条一坊八町跡	下京区観喜寺町 8-11、8-19、821、 8-40、8-41	3/4・5	GL-0.15～-0.6mで七条大路南側溝もしくは町域の内溝、ビット、土坑を検出。発掘調査を指導。	135㎡	20H490
6	八条四坊十四町跡	下京区川端町、下之町、 東之町、西之町、 上之町	3/10	GL-0.96～-1.47mで河川堆積と考えられるにふい黄褐色砂礫。	44㎡	20H204
7	九条四坊十四町跡	南区東九条南河原町 5-1他	3/8	近世包含層、近世耕作土の下、GL-1.0mで河川堆積土を確認。遺構や遺物は確認できず。	19㎡	20H719

平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
8	四条四坊十四町跡	右京区山ノ内苗町37	3/17 ～19	GL-0.76mで近世～室町時代の遺物包含層、-1.1mで暗灰黄色細砂混じりシルト、-1.5mで平安～中世遺物包含層。一部、発掘調査を指導。	152㎡	20H529
9	八条二坊七町跡・ 衣田町遺跡	下京区西七条石井町 8-1他3筆	1/19	GL-0.55mでにふい黄褐色細砂（古墳時代遺物包含層）、-0.8mで地山の砂礫層。にふい黄褐色細砂の上面で成立する土坑や溝、ビットを確認。発掘調査を指導。	37㎡	20H580

大秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
10	大覚寺古墳群 (大覚寺4号墳：狐塚古墳)	右京区嵯峨大覚寺門 前堂ノ前町10-1、 10-4	1/5～7・ 2/1～3	墳丘は現状保存、周壕は設計変更による地中保存。古墳範囲外は遺構・遺物なし。本文52ページ。	119㎡	20S393



11	一ノ井遺跡	右京区太秦垣内町3-7他	2/8	GL-0.1mで中世包含層、-0.4mで明黄褐色砂泥～砂礫の地山を確認。地山直上で中世のビット、溝、土坑などを確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	31㎡	20S582
----	-------	--------------	-----	--	-----	--------

#### 洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
12	史跡 賀茂別雷神社境内	北区上賀茂本山西339ほか	3/11	GL-0.1mで近代遺構面。	5㎡	2N004
13	植物園北遺跡	北区上賀茂梅ヶ辻町7他8筆・同区上賀茂岡本町36	3/22	GL-0.5mでオリープ褐色粘質土の地山。ビットや土坑群を確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	41㎡	20S533
14	史跡 賀茂御祖神社境内(下鴨神社)	左京区下鴨泉川町59	3/15	1区GL-0.3mで近世包含層、-0.5m以下自然積層。2区GL-0.1～-0.3mで褐灰色砂泥の近世包含層。顕著な遺構・遺物なし。	23㎡	2N069
15	聚楽第跡・上京遺跡	上京区一条通松屋町西入鏡石町1-1、1-2	2/9	盛土以下、GL-1.2mで明黄褐色粘質土の地山に至る。	27㎡	20S568

#### 北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
16	法成寺跡	上京区河原町通広小路下東桜町25-3	1/25・26	現代盛土以下、GL-1.4mで黄色泥砂の近代盛土、-1.7mで砂礫の鴨川氾濫堆積土。	93㎡	20S145

#### 洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
17	寺町旧城	中京区榎木町451-1ほか	3/16	GL-0.94mで灰黄褐色泥砂の近世整地層、-1.08mでにぶい黄褐色泥砂、-1.4mで褐色泥砂(礫泥)(中世遺物包含層)、-1.8mで黄色細砂～砂礫の河川堆積。	22㎡	20S704
18	法住寺殿跡・六波羅政庁跡	東山区茶屋町527	1/18	視乱により遺構・遺物は確認できず。	7㎡	20S579
19	山科本願寺南殿跡	山科区首羽伊勢宿町32-54、32-85	1/29	GL-0.35mで黒褐色シルト(礫泥)、-0.45mでにぶい黄褐色シルトの地山を確認。 <b>本文70ページ。</b>	10㎡	20S648
20	大塚遺跡	山科区大塚野満町86-2、86-3、86-21、86-50、86-103、86-104、89-3、102	2/16	現代盛土の下、GL-1.3～-1.9mで褐色や黒褐色の泥土の無遺物層に至る。遺構・遺物なし。	34㎡	20S544
21	山科本願寺跡	山科区西野山南町11-2	3/12	GL-0.4～-0.6mで整地土、-0.6～-0.8mでオリープ褐色シルトの地山。遺構面は整地土上面と地山上面の2面確認。東西方向の溝、堀、土坑、柱穴などを確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	26㎡	20S644

伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
22	日野谷寺町遺跡	伏見区日野谷寺町 81-1, 82-1	3/25	GL-0.25mで中世の遺物包含層、-0.3mで明黄褐色砂礫の地山。発掘調査を指導。	45㎡	20S584

鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
23	鳥羽離宮跡	伏見区竹田真幡木町 91, 92	1/28	GL-0.97mで黒褐色泥砂の旧耕作土、-1.1mで暗灰黄色泥砂、-1.27mで黄灰色シルト、-1.54mで灰色砂礫、-1.68mで灰色砂を確認。	25㎡	20T206
24	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区中島御所ノ内 町20, 21, 22	3/3	GL-1.2mで旧耕作土、-1.8mで細砂混じりシルトの耕作土、以下、-2.5mまで微砂混じり粘土質シルトの湿地状堆積。	24㎡	20T489
25	横大路城跡	伏見区横大路東裏町 地内	1/12・ 13	盛土、耕作土など以下、GL-0.8～-1.4mで滞水を示す灰色や灰オリーブ色の粘土。	51㎡	20S289

長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
26	左京二条四坊五町・十二町跡	伏見区久我西出町 1-7, 1-8, 1-41, 1-44	1/14・ 15	GL-0.5～-0.55mで中世耕作溝、-0.6～-0.7mで東四坊坊間小路の両側溝と柱穴1基を確認。地中保存。本文76ページ。	74㎡	20NG043
27	左京三条三坊十四・十五町跡	伏見区久我西出町 10-4, 10-5	2/24・ 25	GL-1.5mでオリーブ灰色粘土の地山を確認。地山上面で中世耕作溝を検出。	76㎡	20NG519

南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
28	史跡・名勝 嵐山	西京区嵐山東一川町 17-8, 18-7, 21-4	2/12	顕著な遺構・遺物なし。	6㎡	2N088
29	史跡・名勝 嵐山	西京区嵐山中尾下町 20-38	1/22	GL-1.0mまで攪乱であることを確認。	6㎡	2N103
30	史跡・名勝 嵐山・嵐山谷ヶ辻子町遺跡	西京区嵐山谷ヶ辻子 町29, 29-1	3/29	GL-1.0mで基盤層を確認。顕著な遺構・遺物なし。	10㎡	2N112

## 令和3年度 4～12月

## 平安宮

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
31	大蔵省跡	上京区浄福寺通一条下る東西俵屋町662-1	10/20	GL-1.6mで褐色シルトの地山を確認。	9㎡	21K346
32	内蔵寮跡	上京区下長者町通土屋町西入二本松町2	4/6	北半部でGL-0.6m、南半部で-1.8mで地山。近世以後の削平により、遺構は確認できず。	15㎡	20K673
33	中和院跡・聚楽道跡	上京区小山町899他2筆	4/7・8	GL-1.6mまで近世堆積層。以下、地山を確認。千本通付近では、地山上面でビット、土坑を検出。 <b>発掘調査を指導。</b>	38㎡	20K481
34	寛松原跡・鳳瑞道跡	中京区聚楽廻西町66、67、69	9/9	GL-1.3mまで近現代擾乱。以下明黄褐色砂礫の地山。	49㎡	21K382
35	豊楽院跡・鳳瑞道跡	中京区聚楽廻西町186-20	10/14	GL-1.6mで近世瓦を含む灰色泥土、-1.9mで暗灰黄色泥砂、-2.0mで明黄褐色シルトの地山。	13㎡	21K469
36	朝堂院跡・聚楽道跡	上京区千本通二条下る聚楽町850他3筆	10/19	GL-1.0mで土取り穴を検出。平安宮に関する遺構は遺存していない。	19㎡	21K408

## 平安京左京

番号	遺跡名	所在地	調査日	概略	面積	受付番号
37	北辺三坊三町跡・内膳町道跡	上京区室町通中立売下る花立町469	11/5	GL-0.5mで近代盛土（にぶい黄褐色泥砂）、-0.78mで火災面（褐色泥砂）、-1.1mで近世整地層、-1.5mで中世遺物包含層（にぶい黄褐色泥砂）、-2.0mで地山もしくは平安時代遺構面（黒褐色泥砂）となる。	56㎡	21H177
38	北辺四坊二町跡・公家町道跡	上京区京都御苑	7/14～21・8/23・24	耐震装置設置範囲について <b>発掘調査を指導。</b>	5㎡	21H219
39	一条三坊八町跡	上京区新町通上長者町下る元頂妙寺町302他	9/27	GL-0.9mで近世包含層、-1.9mで地山。近世後期を遡る顕著な遺構は確認できず。	47㎡	20H690
40	東京極大路跡・公家町道跡・京都新城跡・寺町旧城・烏丸丸太町道跡	中京区関東屋町	9/3・6	江戸時代、桃山時代、鎌倉時代、平安時代の遺構面が良好に遺存。 <b>発掘調査を指導。</b>	23㎡	20H502
41	三条二坊十五町跡・妙顕寺城跡	中京区御池通西洞院西入石橋町438-5外1筆	10/13	GL-0.6mでにぶい黄褐色泥砂の近世包含層、-0.8mで褐灰色砂泥の中世？包含層、-1.0mで暗灰黄色砂礫（固くしまる。平安か？）、-1.3m以下黄褐色砂礫が部分的に遺存。	18㎡	21H083

42	三条二坊十六町跡・妙顕寺城跡	中京区二条西洞院町637-1他	9/1	GL-1.9mで地山を確認。	13㎡	21H120
43	三条四坊一町跡	中京区間之町通二条下る糺屋町488・492・同区押小路通高倉西入左京町135	7/5	GL-0.7mで暗灰黄色泥砂、-1.1mで灰黄褐色砂泥、-1.25mでオリブ褐色砂泥（鎌倉時代）、-1.55mで黄褐色シルトの地山を確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	33㎡	21H182
44	三条四坊十三町（東京極大路）跡・三条せと物や町跡	中京区弁慶石町63	6/18	GL-1.41mで室町時代の遺構面を確認。 <b>設計変更により、遺構を地中保存。</b>	14㎡	21H112
45	四条一坊十五町跡・旧本能寺の構え跡	中京区大宮通六角下る六角大宮町217、219、219-1	4/15	GL-1.3mまで現代盛土、-1.4mまで現代耕作土以下、-1.6mまで砂礫・シルトがつづくことを確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	8㎡	21H033
46	五条一坊十三町跡	下京区高辻通大宮西入坊門町843-1、843-2	4/20	GL-0.65mで明黄褐色シルト～微砂の地山を確認。	49㎡	21H005
47	五条一坊十五町跡	下京区大宮通綾小路下る綾大宮町41	9/13	GL-0.91mで暗灰黄色砂礫、-1.09mで黄褐色細砂含む砂礫の地山。	26㎡	21H114
48	五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡	下京区油小路弘光寺下る太子山町602-1	11/10・11	GL-0.8mで近世盛土、-1.3mで中世整地土2（オリブ褐色泥砂）、-1.52mで中世整地土1（灰オリブ色シルト～泥砂）、-1.68mで平安時代後期整地土（浅黄色シルト）となる。	10㎡	21H491
49	六条一坊十町跡	下京区中堂寺柳町7-9、36-1	7/27	GL-0.5mで近世包合層、-0.9mで地山。地山上面で東西溝、ヒット、不定形土坑を検出。 <b>本文14ページ。</b>	21㎡	21H021
50	六条四坊六・七町跡	下京区五条通堀町東入堀籠町377ほか	12/1	GL-1.5mでにぶい黄色粘質土、-1.5～-1.7mで灰白色～浅黄色細砂の河川堆積を確認。	50㎡	21H002
51	六条四坊八町跡	下京区鍛冶屋町254	11/8・9	平安時代～近世の遺構面残存を確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	77㎡	21H388
52	七条一坊十二町跡	下京区西酒屋16	7/12・13	GL-0.67mで地山を確認。地山直上で井戸などを検出。 <b>発掘調査を指導。</b>	41㎡	21H218
53	九条四坊九・十六町跡	南区東九条東岩本町19-1、21-5、25-21	10/25～27	遺構・遺物は確認できず。	174㎡	21H326

#### 平安京右京

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
54	一条三坊十三町跡	右京区花園蔵ノ下町9	12/20	GL-0.5mで柱穴を検出。 <b>発掘調査指導。</b>	21㎡	21H320

55	二条二坊八町跡	中京区西ノ京上平町 55	7/9	GL-1.2mで黄褐色シルト～泥砂の近世整地層、-1.25mで石を多く含む灰黄褐色シルト、-1.4mで明黄褐色粗砂の地山を確認。	40㎡	21H081
56	二条三坊七町跡・西ノ京道跡	中京区西ノ京春日町 16-1	11/12	GL-0.1mで灰色シルトの地山。	41㎡	21H062
57	二条四坊六町跡・ 安井馬塚古墳群	右京区太秦安井馬塚 町10-2	10/4	GL-0.23mで旧耕作土と思われる黒褐色粘質土、-0.6m前後で明黄褐色シルトの地山を確認。地山上面で中世以降の溝及び土坑を各1基確認。遺存状態は不良。	18㎡	21H418
58	三条一坊五町跡・壬生道跡	中京区西ノ京小倉町 3-8, 3-9	4/26	GL-0.4mで黄灰色泥砂、-0.6mで黄灰色泥砂(土師器片含む)の中～近世の耕作土、-0.7m～-1.28mまで灰白色砂礫、淡黄色砂礫、黄灰色砂礫の地山。	20㎡	21H025
59	三条一坊七・十町跡	中京区西ノ京永本町 14-59, 14-60	6/17	GL-0.5mで明黄褐色砂礫～粗砂の地山を確認。	40㎡	21H163
60	三条一坊十四町跡・ 三条坊門小路跡	中京区西ノ京西月光 町1-13ほか	6/7	GL-0.3mで三条坊門小路の南側溝及び町域の内溝を検出。本文16ページ。	49㎡	21H103
61	三条二坊十二町跡・ 西ノ京道跡	中京区西ノ京新建町 7	5/14	GL-1.25m以下で地山を確認。顕著な遺構・遺物は確認できず。	27㎡	21H063
62	四条一坊九町跡・壬生道跡	中京区壬生神明町 1-3	8/18	GL-1.2～-1.3mで近世～近代の包含層、-1.3～-1.5mで灰白色シルトや灰白色粘土の地山。地山上面で皇嘉門大路の内溝の名残と考えられる落込みを確認。	31㎡	20H610
63	四条三坊十四町跡	右京区山ノ内赤山町 7-1, 7-2, 8, 39-1	9/30	調査地のほぼ全域で古墳時代後期～平安時代後期の遺構群を確認。設計変更により、遺構を地中保存。本文23ページ。	65㎡	21H117
64	五条一坊十六町跡	中京区壬生仙念町 2-1, 3-2, 1-1の一部	8/6	GL-1.9mで明黄褐色砂礫の地山を確認。	33㎡	21H147
65	五条三坊十二町跡	右京区西院太田町 60-1, 60-2	7/8	GL-0.91～-1.27mで黄褐色砂礫の地山。遺構・遺物なし。	48㎡	20H762
66	六条三坊一・二町跡・ 西院道跡	右京区西院西寿町 23-1, 23, 24-1	5/21	GL-0.8mで灰色細砂で樋口小路の築地の内溝・南側溝を確認。発掘調査を指導。	14㎡	20H662
67	六条三坊十二町跡	右京区西極北庄境町 31	11/1 ～12	GL-1.1～-1.3mで鉄分沈着の著しい灰黄色～褐色細砂の遺構面を確認。本文26ページ。	160㎡	21H220

68	七条一坊二町跡・御土居跡	下京区朱雀分木町80の一部	11/16 ・17	GL-0.7mで旧耕作土の暗灰黄色泥砂、-0.8mで床土の黄褐色シルト、-0.9mで地山のぶい黄褐色シルト。遺構・遺物は確認できず。	14㎡	21H470
69	七条一坊七町跡・御土居跡	下京区朱雀分木町80の一部	7/6	GL-0.65mで褐灰色シルトの地山を確認。	29㎡	21H165
70	七条二坊九町跡	下京区西七条掛越町56	9/15	GL-0.85mで灰黄褐色泥砂の旧耕作土、-0.95mで黄褐色砂泥の地山。	31㎡	21H257
71	八条四坊一町跡	右京区西京極中沢町9-1の一部、18、18-5、19-1、73、74	6/30	GL-0.9mで河川堆積。遺構・遺物なし。	12㎡	21H086
72	九条四坊三町跡	南区吉祥院中河原里北町11ほか	4/27	現代盛土以下GL-0.7mで灰白色粗砂、-1.1mで灰黄色微砂、-1.36mで暗灰黄色粗砂～微砂、-1.44mで黄褐色砂。現代盛土直下が桂川の氾濫層と推測する。	14㎡	20H609

#### 太秦地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
73	史跡 仁和寺御所跡・名勝 仁和寺御所庭園	右京区御室大内3	5/26・28	境内の広範囲に11Tr.を設定。造成土を確認。 <b>本文34ページ。</b>	10㎡	2N003
74	史跡・名勝 嵐山	右京区嵯峨島居本化野町12-45、44	9/6	GL-1.3～-1.6mで地山を検出。顕著な遺構・遺物なし。	16㎡	3N026
75	嵯峨遺跡	右京区嵯峨天龍寺若宮町24の一部、24-2の一部	6/16	GL-0.65mで室町時代の遺構面を確認。 <b>設計変更により、遺構を地中保存。</b>	16㎡	21S073
76	史跡・名勝 嵐山・臨川寺境内	右京区嵯峨天龍寺造路町30-27、30-12	6/28・7/16	GL-0.7m以下で近世と中世の遺構面を確認。 <b>設計変更により、遺構を地中保存。</b>	21㎡	3N001

#### 洛北地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
77	上賀茂中山町遺跡	北区上賀茂中山町12他4筆	6/21	GL-0.5mで地山。顕著な遺構・遺物なし。	79㎡	21S036
78	大深町須恵器窯跡	北区西賀茂大深町20-1	7/26	GL-2.0m付近まで盛土。地山を検出できず。	15㎡	21S125
79	植物園北遺跡・芝本瓦窯跡	左京区松ヶ崎東池ノ内町2ほか	7/28・29	対象地北半部でGL-1.0～-1.2mより時期不明のピット、溝、土坑を複数検出。	56㎡	21S200
80	史跡 大徳寺境内	北区紫野大徳寺町101	4/6	GL-0.1mで近世の整地層。	3㎡	2N119

81	上京遺跡・寺ノ内旧城	上京区寺ノ内通新町 西入妙顕寺前町515 -14	11/19	GL-0.6mで褐灰色細砂、-0.75mで灰黄褐色泥砂、-0.9mで室町時代の遺物を含む黄褐色泥砂、-1.2mで地山の明黄褐色シルト。室町時代の遺構・遺物を確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	38㎡	21S097
82	上京遺跡	上京区今出川通大宮 西元元北小路町 146-1他4筆	10/11	GL-1.0mでにぶい黄褐色泥砂、-1.3mで明黄褐色シルトの地山。	34㎡	21S065
83	室町殿跡(花の御所)	上京区烏丸通今出川 上る岡松町255	6/14 ～25	GL-1.0mで江戸時代中期の遺構面を確認。18世紀ごろの石垣を確認。 <b>本文62ページ。</b>	30㎡	20S337

#### 北白川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	発掘面積	受付番号
84	白河北殿跡・白河街区跡	左京区丸太町通川端 東入東丸太町23-4	4/28	1区は現代盛土以下、GL-1.16mでにぶい黄色泥砂(土師器細片含む・遺物包含層)、-1.32mでオリブ褐色粗砂の地山。	8㎡	21R009
85	白河街区跡	左京区聖護院山王町 44他10筆	4/12 ～14・ 5/24	GL-0.8mで平安時代後期の整地層を検出。 <b>発掘調査を指導。</b>	71㎡	21S014
86	白河街区跡	左京区聖護院山王町 44	6/24	GL-0.95mで暗褐色砂泥、-1.13mで浅黄色粗砂、-1.5mで暗灰黄色砂泥、-1.77mで灰白色微砂～シルトの地山を確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	29㎡	21S115
87	白河南殿跡・白河街区跡	左京区聖護院通華 蔵町31	12/22 ～24	GL-1.1mで褐灰色粘質土、-1.2～-1.6mで黄褐色砂礫の河川堆積を確認。攪乱を受けているところも多く、遺構は確認できず。	33㎡	21R403
88	禅林寺旧境内	左京区永観堂町48 他8筆	11/1	GL-1.25mまで攪乱。以下、地山。削平により遺構は確認できず。	22㎡	21S123

#### 洛東地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
89	芝町遺跡	山科区四ノ宮芝畑町 15他	10/21 ・22・ 12/16 ・17	GL-0.15～-1.1mで明黄褐色粘土質の地山。遺構・遺物は確認できず。	93㎡	21S466
90	法住寺殿跡	東山区今熊野北日吉 町17	8/10 ・11	GL-0.3mで地山を確認。	139㎡	21S032
91	旭山古墳群	山科区上花山旭山町 地先	5/11 ～13	<b>本工事が影響を与える3～6号墳について発掘調査を指導。</b>	44㎡	21S039
92	山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町 33-43	6/23	GL-0.75mで南北方向の溝を検出。 <b>本文73ページ。</b>	25㎡	21S043

93	法性寺跡	東山区本町十一丁目 208-1, 209-1, 209-2, 725-3	12/13	GL-1.5mで黒色粘質土、-2.0mで明緑灰色粗砂の地山を確認。	28㎡	21S374
94	法性寺跡	東山区本町十五丁目 787-1	5/10	GL-0.65m以下で地山のふい黄色細砂～粗砂を確認。遺構・遺物は確認できず。	19㎡	20S737
95	法性寺跡	東山区福稲上高松町 60	6/10	GL-1.5～2.0mまで覆瓦、以下地山。遺構・遺物は削平により確認できず。	30㎡	21S107

#### 伏見・醍醐地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
96	深草寺跡・深草坊町遺跡・ 安楽行院跡・貞観寺跡	伏見区深草僧坊町 46-1, 46-8, 51, 54-3, 56-3	5/7	GL-0.8～-0.9mで灰オリーブ色や明黄褐色のシルトの地山。地山上面で中世の土坑1基を確認。	22㎡	20S691
97	貞観寺跡・深草坊町遺跡	伏見区深草僧坊町 93-1他5筆	4/9	GL-2.2mで地山。顕著な遺構は確認できず。	29㎡	20S516
98	伏見城跡	伏見区桃山水野左近 東町76-4, 76-5	12/15	GL-1.39mまで現代盛土。以下、砂礫の地山。顕著な遺構・遺物は確認できず。	35㎡	21F393
99	伏見城跡	伏見区桃山町正宗 39-6, 36-42, 51- 4, 51-5	12/3	現地確認及び写真記録。次年度へ継続。	0㎡	21F485
100	伏見城跡	伏見区桃山町永井久 太郎63-4他 地内	7/1	近現代盛土以下、GL-0.85～-1.5mで明褐色～褐色シルトの地山。目立った遺構・遺物は確認できず。	14㎡	20F556
101	伏見城跡	伏見区福島太夫北町 52 (呉竹総合支援学 校)	8/3	GL-0.5mで伏見城期の整地層を確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	47㎡	19F791
102	伏見城跡	伏見区銀座三丁目 309-1の一部	8/5	GL-0.8mで黄褐色シルトの地山を確認。	30㎡	21F087
103	伏見城跡	伏見区西大寺町 318-5, 318-6	5/28	GL-1.0m以下河川堆積の粗砂を確認。	22㎡	21F102
104	伏見城跡	伏見区桃山町銀島 7-1・同区桃山町立 売1-5ほか	5/18・19	GL-0.3mでふい黄褐色粗砂、-0.5mで黄褐色粗砂、-0.6mで明黄褐色細砂～粗砂、-0.9mでふい黄褐色シルトブロックを含む粗砂を確認。伏見城期～江戸時代の遺構面を2面確認。 <b>発掘調査を指導。</b>	32㎡	20F557
105	伏見城跡・指月城跡	伏見区桃山町立売 4-7・同区桃山町泰 長老13-3	9/29	GL-0.4mまでふい黄褐色粗砂混じり粘土質シルトと黒褐色シルトブロックの混合層、-0.6mまでしまりの悪い黄灰色～灰黄色砂礫、以下、地山。遺構・遺物は確認できず。	14㎡	21F329
106	伏見城跡	伏見区桃山町本多上 野74-1, -2, -3	5/26	GL-0.5mで褐色礫混じりシルトの地山を検出。顕著な遺構・遺物は確認できず。	60㎡	21F104



## 鳥羽地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
107	鳥羽離宮跡	伏見区竹田真幡木町 85	9/14	GL-1.23mで灰色シルトの耕作土、-1.48mで灰色砂礫を確認。	15㎡	21T332
108	鳥羽離宮跡	伏見区中島秋ノ山町 102-1	8/19	GL-0.39mで黄灰色泥砂の盛土、-0.83m以下、灰色粘土を確認。池埋土の可能性があるので、 <b>設計変更により、遺構を地中保存。</b>	27㎡	21T204
109	鳥羽離宮跡	伏見区中島前山町 117, 118	8/2	GL-1.21mでオリブ黒色粘質シルトの湿地状堆積、-1.90mで暗オリブ黒色粘質シルト(砂礫混じり)の地山を確認。	11㎡	21T209
110	吉祥院竹尻城跡	南区吉祥院西ノ内町 37-1, 39, 40-1, 40-2	9/7	現代盛土下GL-0.7mで氾濫堆積。顕著な遺構・遺物は確認できず。	61㎡	21S349

## 長岡京地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
111	左京一条四坊十六町跡・ 北一条大路跡	南区久世築山町 313, 314	6/28	GL-0.5～-0.7mで明黄褐色シルトの地山。地山上面で鎌倉時代の耕作溝などを確認。	66㎡	21NG096
112	左京一条三坊十四町跡・ 東土川遺跡	南区久世東土川町 243, 575	4/16	GL-1.5mまで現代盛土・耕作土、以下湿地状堆積。	18㎡	21NG004
113	左京二条四坊十一町・十三 ・十四町跡	伏見区久我御旅町 9-8他11筆	6/2～9	GL-0.82mで旧耕作土、-1.16mで中世遺物包含層、-1.26mで地山。 <b>本文81ページ。</b>	234㎡	21NG019
114	左京三条四坊十・十一町跡	伏見区久我西出町 13-6	4/19	GL-1.3mで灰黄色粘土の地山を確認。	26㎡	21NG018
115	東京極大路跡	伏見区久我森ノ宮 町14-19, 14-20	9/16	GL-0.15mで浅黄色砂泥の旧耕土、-0.3mで鉄分を含む灰オリブ砂泥、-0.55mで灰黄色砂泥、-0.7mで灰黄色微砂含むシルト、-0.8mで灰色粘土の湿地状堆積。	44㎡	21NG131
116	左京四条三坊十四町跡	伏見区羽束師菱川町 544-1	4/5	GL-0.3～-0.5mで平安時代末～鎌倉時代遺構面、-0.6mで長岡京期遺構面を確認。調査区南端では羽束師菱川城北堀の北祠を検出。北半部では平安～鎌倉時代のピットを検出。 <b>発掘調査を指導。</b>	64㎡	20NG535
117	左京五条四坊十一町跡	伏見区羽束師古川町 49-1	10/18	GL-1.4mで褐色シルト～細砂の水成堆積を確認。	19㎡	21NG282
118	左京九条三坊十三町跡・ 淀城跡	伏見区淀池上町128	8/30・ 31	現代盛土及び掘戻以下、部分的に旧耕作土が残り、GL-0.5～-0.54mで整地土1、-0.6mで整地土2、-1.0～-1.2mで造成土3となる。 <b>発掘調査を指導。</b>	39㎡	21NG(S) 037

## 南桂川地区

番号	遺跡名	所在地	調査日	調査概要	面積	受付番号
119	史跡・名勝 嵐山	西京区嵐山中尾下町 22-1, 22-10	10/27	顕著な遺構・遺物は確認できず。	5㎡	3N043
120	史跡・名勝 嵐山	西京区嵐山東一川町	4/13	GL-1.0mで時期不明の整地層。顕著な遺構・遺物は確認できず。	12㎡	2N115
121	史跡・名勝 嵐山・ 嵐山谷ヶ辻子町遺跡	西京区嵐山上海道町 46-1	12/15	GL-0.4mで時期不明のピットを検出。	4㎡	3C068
122	史跡・特別名勝 西芳寺庭園	西京区松尾神谷町 56	5/31 ～6/10	滝石組上部と想定した1区で水が流れた痕跡は認められず。凹みとして残る導水路跡に設けた2・3区で、新旧2時代の導水路跡を確認。4区では石組底に地山に据えられたチャートを確認した。本文87ページ。	9㎡	3N006
123	大蔵遺跡・下久世構跡・ 中久世遺跡	南区久世殿城町518	5/6	現代盛土、近代盛土の下、中世包含層を挟み、GL-0.75mで黄褐色シルトの地山上面で柱穴や溝などを検出。	29㎡	20S605
124	大蔵遺跡・大蔵城跡	南区久世大蔵町 377-1他7筆	4/21	GL-1.0mでにぶい黄褐色粘質土の地山を確認。	17㎡	21S012

# 報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきくつちょうさほうこく れいわさんねんど							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 令和3年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正晃・鈴木久史・奥井智子・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・赤松佳奈・黒須亜希子・清水早織・松本千裕・藤井整・上茶谷美保							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京左京北辺 四坊六町跡、 公家町遺跡	京都市上京区 京都御苑3	26100	1 241	35度 01分 26秒	135度 45分 54秒	2020/9/16	37㎡	休憩施設
平安京左京一条 四坊十町跡、 公家町遺跡、 京都新城跡	京都市上京区 京都御苑2の一部	26100	1 241 249	35度 01分 15秒	135度 45分 58秒	2021/3/23 ～24	25㎡	埋設管敷設
平安京左京六条 一坊十町跡	京都市下京区 中堂寺藤清町 7-9, 36-1	26100	1	34度 59分 47秒	135度 44分 48秒	2021/7/27	21㎡	店舗
平安京右京三条 一坊十四町跡	京都市中京区 西ノ京西月光町1-13地	26100	1	35度 00分 39秒	135度 44分 13秒	2021/6/7	49㎡	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京北辺 四坊六町跡、 公家町遺跡	都城跡 邸宅跡	江戸時代後期	柱穴・整地土・土壇	土師器・陶磁器・軒丸瓦 軒平瓦・丸瓦・平瓦		地中保存		
平安京左京一条 四坊十町跡、 公家町遺跡、 京都新城跡	都城跡 邸宅跡 平城跡	江戸時代	石組遺構・土坑	土師器・金属製品				
平安京左京六条 一坊十町跡	都城跡	室町時代	溝・ヒット・土坑	土師器・陶磁器		四行八門に附する 区画溝を検出		
平安京右京三条 一坊十四町跡	都城跡	平安時代	溝・ヒット	土師器・須恵器 瓦・緑釉陶器		三条坊門小路南側溝と 十四町域の内溝を検出		

# 報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせききつちょうさほうこく れいいわさんねんど								
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 令和3年度								
副書名									
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正見・鈴木久史・奥井智子・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・赤松佳奈・黒須亜希子・清水早織・松本千裕・藤井整・上茶谷美保								
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課								
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地								
発行機関	京都市文化市民局								
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地								
発行年月日	西暦2022年3月31日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
平安京右京四条一坊十町跡、壬生遺跡	京都市中京区壬生神明町1-61	26100	1 462	35度 01分 06秒	135度 44分 03秒	2020/11/26 ～27	106㎡	共同住宅	
平安京右京四条三坊十四町跡	京都市右京区山ノ内赤山町7-1, 7-2, 8, 39-1	26100	1	35度 00分 20秒	135度 43分 30秒	2021/9/30	65㎡	店舗	
平安京右京六条三坊十二町跡	京都市右京区西京極北庄境町31	26100	1	34度 59分 38秒	135度 43分 33秒	2021/11/1 ～12	160㎡	共同住宅	
史跡仁和寺御所跡、名勝仁和寺御所庭園	京都市右京区御室大内33	26100	A 803	35度 01分 46秒	135度 42分 46秒	2020/7/20, 2021/5/26・28	10㎡	防災設備	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
平安京右京四条一坊十町跡、壬生遺跡	都城跡 散布地	平安時代後期	湿地状堆積	土師器・緑輪陶器 瓦・石製品					
平安京右京四条三坊十四町跡	都城跡	古墳時代 平安時代 室町時代	溝 ピット 土坑	土師器 須恵器 青磁		溝内から須恵器坏身が 完形で出土			
平安京右京六条三坊十二町跡	都城跡	平安時代	溝・流路・整地土など	土師器・須恵器 瓦質土器・銭					
史跡仁和寺御所跡、名勝仁和寺御所庭園	史跡 名勝	江戸時代 明治時代	土坑・溝	土師器・瓦・石列					

# 報告書抄録

ふりがな	きょうとしないいせきしくつちようさほうこく わいわざんねんど							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 令和3年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正見・鈴木久史・奥井智子・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・赤松佳奈・黒須亜希子・清水早織・松本千裕・藤井整・上茶谷美保							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大覚寺古墳群	京都市石京区 嵯峨大覚寺門前 室ノ前町10-L, 10-4	26100	849	35度 01分 26秒	135度 40分 55秒	2021/1/5~7 2/1~3	82㎡	宅地造成
室町殿跡 (花の御所)	京都市上京区 烏丸通今出川上る 岡松町255	26100	230 224	35度 01分 46秒	135度 45分 30秒	2021/6/14 ~25	30㎡	共同住宅
山科本願寺南殿跡	京都市山科区 菅羽伊勢町32-54, 32-85	26100	629	34度 59分 01秒	135度 49分 16秒	2021/1/29	10㎡	社宅
山科本願寺南殿跡	京都市山科区 菅羽伊勢町33-43	26100	629	34度 59分 03秒	135度 49分 13秒	2021/6/23	26㎡	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大覚寺古墳群	古墳	古墳時代	円墳			全長を確認		
室町殿跡 (花の御所)	邸宅跡 都城跡	江戸時代	石垣・土坑	土師器・陶磁器・焼締陶器 瓦・骨		敷地境界にともなう 石垣列を確認		
山科本願寺南殿跡	邸宅跡	室町時代~ 江戸時代	柱穴群			室町時代~江戸時代にか けての柱穴群を確認		
山科本願寺南殿跡	邸宅跡	江戸時代	溝					

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとしなしいせきしくつちようさほうこく れいわさんねんど							
書名	京都市内遺跡試掘調査報告 令和3年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	馬瀬智光・家原圭太・西森正見・鈴木久史・奥井智子・新田和央・熊井亮介・熊谷舞子・赤松佳奈・黒須亜希子・清水早織・松本千裕・藤井整・上茶谷美保							
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地							
発行年月日	西暦2021年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京左京二条 四坊五・ 十二町跡	京都市伏見区 久我西出町1-7, 1-8, 1-41, 1-44	26100	3	34度 56分 30秒	135度 43分 24秒	2021/1/14	52㎡	駐車場造成
長岡京左京二条 四坊十一・ 十三・十四町跡	京都市伏見区 久我御旅町9-8他11筆	26100	3	34度 56分 33秒	135度 43分 32秒	2021/6/2・3・ 8～9	234㎡	倉庫
史跡・特別名勝 西方寺庭園	京都市西京区 松尾神ヶ谷町56	26100	A952	34度 59分 31秒	135度 41分 01秒	2021/5/31 ～6/10	9㎡	漏水整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京左京二条 四坊五町・ 十二町跡	都城跡	長岡京期	溝			東四坊坊門小路 両側溝を検出		
長岡京左京二条 四坊十一町・ 十三・十四町跡	都城跡	鎌倉時代 室町時代	柱穴・土坑・落込み	土師器・瓦器				
史跡・特別名勝 西方寺庭園	史跡 特別名勝	室町時代	溝	瓦・焼締陶器など				